



被告人物件云々事實  
 明スヘキ物件ヲ被告  
 人ニ示スルハ爲メニ  
 神情ニ感シ終ニハ犯  
 罪ノ跡ヲ吐露スルコ  
 アル可クハ豫審判  
 事ハ臨檢ノ時ニ被告  
 人カ立會フト立會ハ  
 ザルトニ關セズ差押  
 ヘタル物件ヲ被告  
 人ニ示シテ一々之レガ  
 辨解ヲササハ解イヒ  
 シメルナリ辨解イヒ  
 各別ベラ

允許ニル禁ヌサシト  
 逐斥オヒ  
 留置オトメ  
 時宜ツノトキ囑託ノ  
 ヲ

ノ規則ニ從ヒ物件ヲ差押フ可シ  
 物件ヲ差押ヘタル時ハ其目録ノ謄本ヲ立會人ニ渡ス可シ  
 第六十五條 豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ立會ヒタルト否トテ問ハス其物件ヲ被告人ニ示シ辨解ヲ爲サシムヘシ  
 其訊問及ヒ陳述ハ之ヲ調書ニ記載スヘシ  
 第六十六條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ証人ノ陳述ヲ聽クコトヲ必要ナリトスル時ハ書記ノ立會ニ依リ各別ニ之ヲ訊問ス可シ  
 第六十七條以下ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス  
 第六十七條 豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限ラス允許ヲ得ヌシテ其場所ニ出入スルコトヲ禁スルヲ得モ若シ其禁ヲ犯ス者アル時ハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ之ヲ留置スルコトヲ得  
 第六十八條 豫審判事ハ其管轄地内ト雖モ時宜ニ依リ臨檢

第六節 證人訊問

搜索  
 事實發見  
 官署  
 會社  
 不用ニ屬シタル時  
 終結ニ至ル時カ又ハ  
 公判落着アリタル時  
 ノ如キコ  
 第六節 罪犯ノ證述ヲ  
 見聞シタルト  
 又目撃スルトテ問ハ  
 ズ犯罪ノ前後ノ有様  
 被告人ノ素行ヲ知ル  
 モ之レヲ證人トナス  
 ナリ

家宅搜索ノ事ヲ其地ノ治安判事ニ囑託スルコトヲ得  
 ▲參看 明治十四年九月二十日第四十六號布告  
 治罪法第六十八條第七十二條ニ於テ治安判事ニ囑託スルコトヲ許シタル處分ハ當分ノ内其地ノ司法警察官ニモ囑託スルコトヲ得  
 第六十九條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ遞驛電信鐵道ノ官署諸會社ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ豫審ニ關係アル者ヨリ發シ若クハ是等ノ者ニ對シ發シタル書類電報又ハ物件ヲ受取開披スルコトヲ得但受取證書ヲ渡スヘシ前項ノ書類物件不用ニ屬シタル時ハ其官署又ハ會社ニ還付ス可シ  
 第六節 證人訊問  
 第七十條 豫審判事ハ檢事民事原告人又ハ被告人ヨリ證人トシテ指名シタル者ヲ呼出スヘシ  
 原告證人被告證人ノ員數多ナル時ハ指名ノ順序ニ從ヒ又

夥多  
各五名原告被  
告各

原被告指名  
原被告ヨリ指  
名シタル者  
ヲ呼出スハ是レ其  
雙方ノ信ヲ置ク所  
者ナルヲ  
以テナリ

裁判所々在ノ地ニ住  
セサル時ハ自己ノ管  
轄内ニア  
ルトキト  
雖トモ

ハ最モ事實ヲ知ル可シト思料シタルモノ輕罪事件ニ付テハ  
各々五名重罪事件ニ付テハ各十名ヲ限リ先ツコレヲ呼出ス  
ヘシ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス  
又原被告ノ指名セザル者ト雖モ豫審判事ノ職權ヲ以テ証人ト  
シテ之ヲ呼出スコト得

▲參看 明治十四年九月廿日第四十號布告

豫審又ハ公判ニ付証人ヲ呼出サント請フモノアルハ裁判所  
ニ於テ其旅費日當等ノ金額ヲ算定シテ之レヲ豫納セシムヘシ  
若シ被告人旅費日當ヲ豫納スルノ資力ナキトキハ治罪法第百  
七十條ノ制限ニ從ヒ裁判所ニ於テ其費用ヲ立替置ヘシ

第百七十一條 証人ハ豫審判事ノ名ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ但

其呼出狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ之ヲ送達ス可シ  
若シ証人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ輕罪裁判所書記  
ニ送達ノ事ヲ囑託スヘシ

第百七十二條 豫審判事ハ証人裁判所所在ノ地ニ住セザル時

証人氏名住所云々  
出呼  
狀ニ氏名住所ヲ書シ  
職業ヲモ加フル所以  
ンハ同姓同名ノ人違  
ヒアラソコトヲ恐レテ  
リナ  
勾引  
テヒキダ  
テル

呼出ニ應セサル云々  
罰金拘留等ノ刑律マ  
デテ記入スル所以ハ  
其ノ者ノ或ハ法律ニ  
暗ク後日紛紜ヲ生セ

ハ其住所ノ地ノ治安判事ニ尋問ノ事ヲ囑託スルコト得

若シ証人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事又ハ治

安判事ニ尋問ノ事ヲ囑託スルコト得

本條ノ場合ニ於テ呼出狀ハ囑託ヲ受ケタル判事ノ名ヲ以テ

其裁判所ノ書記局ヨリ之ヲ送達スヘシ

▲參看 明治十四年九月廿日第四十六號布告

治罪法第百六十八條第百七十二條ニ於テ治安判事ニ囑託スル

コトヲ許シタル處分ハ當分ノ内其地ノ司法警察官ニモ囑託スル

コト得

第百七十三條 呼出狀ニハ証人ノ氏名住所及ヒ職業ヲ記載ス

又出頭ノ日時場所及ヒ呼出ニ應セザル時ハ罰金ヲ言渡シ且  
拘引スルコトアル可キ旨ヲ記載ス可シ  
呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クモ廿四時ノ猶豫アル可シ

第百七十四條 証人疾病公務其他正當ノ事故ニ因呼出ニ應ス

シテ恐  
レテナリ

經由  
ヘル

認可  
キハト  
レケル

事由  
コトノ  
延期  
ニシ

費用  
ヨウ  
ヨウ

擔當  
ヒキ  
ウケ

二倍ノ罰金  
例ヘハ前  
ニ五圓ノ

罰金ナレハ今度ハ拾  
圓ニスルカ如シ

ル能ハサルヲテ證明シタル時ハ豫審判事其所在ニ就テ之ヲ  
尋問ス可シ

第七十五條 證人ト爲ル可キ者陸海軍在營ノ軍人軍屬ナル  
時ハ其所屬長官ヲ經由シテ呼出狀ヲ送達ス其長官ハ即時ニ  
出廷セシム可キヲ認可シ又ハ職務上已ムヲ得サル差支ア  
ル時ハ其事由ヲ付シテ出廷ノ延期ヲ豫審判事ニ請求ス可シ

第七十六條 豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合ヲ除  
クノ外証人呼出ニ應ゼサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ貳圓以上  
拾圓以下ノ罰金ヲ言渡スヘシ其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控  
訴ヲ許サス

豫審判事ハ其證人ニ對シ罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼出狀  
ヲ送達シ又ハ直チニ勾引狀ヲ發スルヲ得但其費用ハ證人  
ヲシテ之ヲ擔當セシム  
若シ證人再度ノ呼出ニ應ゼザル時ハ二倍ノ罰金ヲ言渡シ且  
勾引狀ヲ發スルヲアル可シ

豫知  
マハカ  
ドシル

遺失  
ナク  
ス

愛憎已レニヨキ者ノ  
ハキコトチカルクイ  
ヒ己レニアシキ者ノ  
爲ニハカルキ罪畏懼  
ヲモオモクイフ  
已レノ目上ノ人タル  
ヲ恐レテ罪ヲカクヌ  
正實  
トウ

第七十七條 豫審判事ハ證人初度又ハ再度ノ呼出狀ヲ受ケ  
ザルヲ其呼出狀第七十三條ノ規則ニ背キタルヲ又ハ豫知  
シ難キ正當ノ事故アリテ出廷スル能ハサリシヲ證明シタ  
ル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ  
第七十八條 證人呼出狀ニ因リ出廷シタル時ハ其呼出狀ヲ  
書記ニ差出ス可シ若シ之ヲ遺失シタル時ハ其人違ナキヲテ  
證明ス可シ

第七十九條 豫審判事ハ證人トシテ呼出シタル者ニ對シ其  
氏名年齢職業住所及ヒ第八十一條ニ記載シタル者ナリヤ  
否ヲ問フ可シ

第八十條 豫審判事ハ證人ヲシテ愛憎畏懼ノ心ナク正實ニ  
陳述ヲ爲ス可キヲ宣誓セシム可シ  
豫審判事ハ證人ニ宣誓書ヲ讀開カセ之ニ署名捺印セシム若  
シ署名捺印スルヲ能ハサルハ其旨ヲ附記ス可シ  
宣誓書ハ訴訟書類ニ添置ク可シ

第八十一條 列記セ

ハミナ愛憎畏懼ノ念  
アル恐アリ是等ノ者  
ノ言ア所アレバ只事  
實ヲ參考スルノ一助  
ニ供スルノミ其ノ言  
ハ以テ十分ノ勢力ア  
ル者ニ非ズ故ニ證人  
トナルトテ許サス

知覺  
モノオボ精神マ  
エサトリ  
シ劍審トリア停止時  
ヒ劍審ケル  
ト、  
メル

現ニ陳述ヲ爲ヌ可キ  
事件ニ付キ會テ訴テ

第八十一條 左ニ記載シタル者ハ證人ト爲ルコトヲ許サス但

- 事實參考ノ爲メ其陳述ヲ聽クコトヲ得
- 一 民事原告人
- 二 民事原告人及ヒ被告人ノ親屬
- 三 民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ是等ノ者ノ後見ヲ受クル者
- 四 民事原告人及ヒ被告人ノ雇人

第八十二條 左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ

- 一 十六歳未満ノ幼者
- 二 知覺精神ノ不充分ナル者
- 三 瘖啞者
- 四 公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者
- 五 重罪事件ニ付キ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケ又ハ重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ニ付公判ニ付セラレタル者
- 六 現ニ陳述ヲ爲ヌ可キ事件ニ付キ會テ訴テ受ケ其證憑

受クル此ノ事件ニ付  
レタル處其ノ證述判  
然タラザル故免訴セ  
ラレ猶關係コ  
レアル者ナリ

秘密  
ナイ委託  
確實  
カシ同行  
コニユ  
ク

豫審判事ハ證人云々  
證人ノ陳述スル事柄  
ガ犯所ニ關係シ其陳  
述ヲ確實ナラシメン  
ガタメ重罪又ハ輕罪  
ノ犯所又ハ其他ノ場  
所等ニ豫審判事ガ同  
行セシコトヲ促サルハ  
キハ同行スベキナリ

充分ナラサルニ因リ免許ノ言渡ヲ受ケタル者

第八十三條 證人宣誓ヲ肯セヌ又ハ宣誓シテ陳述ヲ肯セサ

ル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第八十二條ニ從ヒ  
罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテ故障及ヒ控訴ヲ許サス  
醫師藥商穩婆又ハ代理人辨護人代書人公證人若クハ神官僧  
侶其身分職業ニ關スル秘密ノ事件ニ付キ委託ヲ受ケタル者  
ハ前項ノ例ニ在ラス

第八十四條 證人ハ他ノ證人及ヒ被告人ト格別ニ之ヲ訊問

ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ證人ト他ノ證  
人又ハ被告人ト對質セシムルコトヲ得

第八十五條 豫審判事ハ證人ノ陳述ヲ確實ナラシムル爲メ

必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所又ハ其他ノ場所ニ同行  
スルコトヲ得  
若シ證人同行スルヲ肯セザル時ハ第七十六條ノ規則ニ從  
ヒ罰金ヲ言渡ス可シ

第八十六條 第一百五十六條 第一百五十七條ノ規則ハ証人ニ就テモ亦之ヲ適用ス

第八十七條 皇族又ハ勅任官 証人ナル時ハ豫審判事書記ト共ニ其所在ニ就テ陳述ヲ聽ク可シ

第八十八條 書記ハ証人ノ陳述ニ付キ各別ニ調書ヲ作可シ 其調書ニハ証人宣誓ヲ爲シタルヲ又ハ爲サ、ル事由ヲ記載ス可シ

第八十九條 豫審判事ハ証人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヤヲ知ラシムル爲メ書記ヲシテ調書ヲ讀開カセシム可シ

証人ハ其陳述ヲ變更増減セシムルヲ請求スルヲ得書記ハ其請求アリタルヲ及ヒ變更増減ノ條件ヲ調書ニ記載シ豫審判事及ヒ証人ト共ニ署名捺印ス可シ若シ証人署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨附記ス可シ

第九十條 証人ハ即時ニ出廷ヨリ付テノ旅費日當ヲ要ムルヲ得

即時其供述ヲ終リテ退廷スルノ事ナリ

第七節 鑑定

生業ナリ  
鑑定 犯罪ノ種類ニヨリ豫審判事之ヲ査定スル能ハサルハ其ノ事業ニ習熟シタルモノニ鑑定ヲ爲サシムルヲヘハ人ヲ殺シシニ藥ヲ以テセシト思料スレハ醫師之ヲ鑑定シ又ハ土藏ヲ掘リテ入りシニ刃物ヲ以テセシカ又ハ鉄槌ヲ以テセシカト思料スレハ職人之ヲ鑑定スルノ類ナリ  
結果 シトケ  
勾引狀ヲ發スルヲ得  
若シ鑑定人ガ呼出スニ應セサル時ハ第百七十六條ノ規則ノ如ク罰金ヲ言渡ス然レハ勾引狀ヲ發スルヲ能ハズ何トナレハ

若シ日稼ヲ以テ生業トスル者ナル時ハ旅費日當ノ外日稼高ニ等シキ償金ヲ要ムルヲ得  
本條ノ場合ニ於テハ豫審判事其金額ヲ定メ之ヲ言渡ス可シ

第七節 鑑定

第九十一條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定人ヲ必要ナリトスル時ハ學術 職業ニヨリ鑑定スルヲ得可キ者一名又ハ數名ヲノ鑑定ヲ爲サシム可シ

第九十二條 鑑定人ハ書記局ヨリ呼出狀ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ其呼出狀ニハ犯罪事件ニ付キ鑑定ヲ命スルヲ及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡ス可キヲ記載ス可シ

鑑定人呼出ニ應セサル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ但勾引狀ヲ發スルヲ得ス

第九十七條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第九十三條 鑑定人ハ正實ニ鑑定ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ

鑑定人ハ證人ノ如ク  
必ラス其人ニ限ルニ  
非ス其事柄ニ適當ナ  
ル職能アル者ナレバ  
固ヨリ其何人タルヲ  
問ハザルカ爲ナリ  
紙尾カミノ背セスシ  
ウチ  
セヌ

急遽ノ際 イソグ  
成ル可ク云々 豫審判  
ノ豫審處分ヲ行フニ  
因リ差支アル外ハ成  
ル立會ス 増加ス  
結果 鑑定ノ上得タル  
發見物ヲ云ナリ  
即チ毒殺事件ニ付テ  
ハ胃腸中ニ毒物ノ正

其宣誓ハ第百八十條ノ式ニ從フ  
書記ハ鑑定人ノ宣誓シタルヲ鑑定命令書ノ紙尾ニ記載シ  
之ニ宣誓書ヲ添置ク可シ  
第百九十四條 鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓ノ鑑定ヲ肯セサ  
ル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第百七十九條ニ從ヒ  
罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サ  
ス

第百九十五條 第百八十一條第百八十二條ニ記載シタル者ニ  
ハ鑑定ヲ命スルヲ得ス其急遽ノ際正當ノ鑑定人ト爲ル可  
キ者ナキ時ハ事實參考ノ爲メ鑑定ヲ命スルヲ得  
第百九十六條 豫審判事ハ成ル可ク鑑定ニ立會フ可シ  
第百九十七條 豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以  
テ鑑定人ヲ増加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セシムルヲ得  
第百九十八條 鑑定人ハ鑑定書ヲ作り其手續結果及ヒ鑑定ヲ  
爲シタル時間ヲ詳記ス可シ

第八節 現行犯ノ豫審

跡ヲ含有スルヤ否毆  
傷事件ニ付テハ其傷  
果シテ致命ノ起因結  
タルヤ否等是ナリ  
果ヲ得サル時 死体腐  
其毒殺ナルヤ否ヤ知  
ル能ハサルノ類ナリ  
契印ヲリ推測 オシハ  
各自ノイ檢印 イソト  
命令書 申付タ 譯本  
ヤク

若シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記載ス可シ  
鑑定人意見ヲ異ニスル時ハ各自鑑定書ヲ作り又ハ各自ノ意  
見ヲ一箇ノ鑑定書ニ記載ス可シ  
第百九十九條 鑑定人ハ鑑定書ニ年月日ヲ記載シ署名捺印及  
ヒ契印ス可シ  
又鑑定書ニハ豫審判事之ヲ受取リタル年月日ヲ記載シ書記  
ト共ニ檢印ス可シ  
鑑定書ハ鑑定命令書ニ添置ク可シ  
外國人鑑定ヲ爲シタル時ハ其鑑定書ニ裁判所ヨリ命シタル  
通事ノ作リタル譯本ヲ添置クヘシ  
第二百條 鑑定人及ヒ通事ニハ放習給料其他相當ノ費用ヲ給  
與ス可シ  
第八節 現行犯ノ豫審  
第二百一條 豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルヲ  
知リタル場合ニ於テ其事件急遽ヲ要スル時ハ檢事ノ請求

得ハ  
 第二百一條 現行ノ犯  
 ハ至急ヲ要スル時ア  
 ルヲ以テ茲ニ本條ア  
 ナリ 犯所ヲオカ  
 ヲ 臨檢 ヲイテシラ  
 証調書 檢事ノ訴ヲ起  
 公訴ノ起ラザルハ未  
 ナル可ケレバ前條ノ  
 場合ト雖モ豫審判事  
 ニシテ檢書調書ヲ作  
 リタラハ其調書ヲ以  
 テ公訴ヲ受理シタル  
 モノト看做 終結ノ  
 スベキナリ 終結ノ  
 但罰金ノ言渡云々 檢  
 ノ職務ハ罪犯ノ事情  
 ナ告訴ヲ求刑スルモ  
 ノナレバ現行犯ノ重  
 輕罪ナル場合ニ於テ

ヲ待タス直チニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルヲ得  
 豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ令狀ヲ發シ其他此章ニ定メタル規  
 則ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲スヲ得  
 第二百二條 前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴ナシト雖モ豫審  
 判事檢調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタル者トス其調  
 書ニハ現行ノ重罪又ハ輕罪ナルヲ記載ス可シ  
 豫審判事ハ 速ニ書類ヲ檢事ニ送致ス可シ但檢事ヨリ其豫  
 審手續ヲ繼續ス可キ者ニ非サルノ意見アリト雖モ通常ノ規  
 則ニ從ヒ之ヲ終結ス可シ  
 第二百三條 檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルヲ  
 ナ知リタル時ハ豫審判事ヲ待ツヲナク其旨ヲ通知シテ犯所  
 ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スヲ得但罰金ノ言渡  
 ナ爲スヲ得ス  
 證人及ヒ鑑定人ノ陳述ハ宣誓ヲ用フルヲナク之ヲ聽ク可シ  
 第二百四條 前條ノ場合ニ於テ檢事ハ證據書類ニ意見書ヲ添

ハ檢事ニ先シテ豫  
 審判事ニ爲シ是レ  
 ハ豫審判事ニ先シ  
 テ檢事ニ爲スサレ  
 但檢事職トシテ罰金  
 ノ言渡ヲ爲スヲ得サ  
 ルナ  
 宣誓ヲ用フルヲナク  
 事實參考ノ爲ニ其  
 陳述ヲ聞クノミ  
 請求書 豫審ノ請  
 求ナリ

速ニ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ  
 第二百五條 第二百三條ニ於テ檢事ニ許シタル職務ハ司法警  
 察官モ亦假ニ之ヲ行フヲ得但令狀ヲ發スルヲ得ス  
 ▲參看 明治十四年九月廿日第四十六號布告  
 治罪法第二百五條第一項但書ニ司法警察官ハ令狀ヲ發スルヲ  
 ナ得サル旨記載有之候得共當分ノ内現行犯ノ場合ニ限り令狀  
 ナ發シ苦シカラヌ  
 司法警察官ハ證據書類ニ意見書ヲ添へ被告人ト共ニ速ニ之  
 ナ檢事ニ送致ス可シ  
 第二百六條 檢事被告人ヲ受取りタル時ハ二十四時内ニ之ヲ  
 訊問シ調書ヲ作り勾留狀ヲ發スルト否トヲ問ハス一切ノ書  
 類ニ請求書ヲ添へ豫審判事ニ送致ス可シ  
 若シ起訴ヲ爲ス可カラサル者ト認メタル時ハ直チニ被告人  
 ナ放免ス可シ  
 第二百七條 豫審判事ハ二十四時内ニ被告人ヲ訊問ス可シ此



場合ニ於テハ檢事ノ發シタル勾留狀ヲ解キ又ハ之ヲ存スルヲ得

第二百八條 豫審判事ハ檢事又ハ司法警察官ノ爲シタル手續ニ付キ更ニ其取調ヲ爲スヲ得但檢事又ハ司法警察官ノ作リタル調書ハ之ヲ訴訟書類ニ添置ク可シ

第二百九條 檢事ハ輕罪ノ現行犯ニ係ル場合ニ於テ勾留狀ヲ發シタルト否トニ拘ラス被告人ヲ訊問シタル後豫審ヲ求ムルニ及スト思料シタル時ハ直チニ輕罪裁判所ニ呼出スヲ得

第九節 保釋

第二百十條 豫審判事ハ豫審中勾留狀又ハ収監狀ヲ受ケタル被告人ノ請求ニ因リ檢事ノ意見ヲ聽キ何時ニテモ呼出シニ應ジ出廷ス可キノ證書ヲ差出サシメ保釋ヲ許スヲ得  
被告人無能力ナル時ハ親屬又ハ代人ヨリ保釋ヲ求ムルヲ得

第九節 保釋

保釋刑ノ言渡決定マテハ純粹潔白ノ無罪人ナリ故ニ被告人ノ請求ニ因リ保證金ヲオサメテ之ガ勾留收監ヲ釋クコトナリ出廷スルニイハルシヨニイヅル無能力幼年白痴等ヲ云

報知シテ

保証書ヲ

貯金タクハ

貯金

貯金預所云々

又ハ貯金預所ノ預証書又銀行ノ預証書ヲ以テスルヲ許スト

雖人民相互ノ貸借証書ヲ以テスルヲハ

許サハルナリ之レ保証金没入ノ時ニ急速

ヲ要セサルヲ以テナリ充分ヤウブ資力シ

ダイア全文又ハ幾分

ルモノ没入ス可シ呼出ニ

シ没入ス可シ應セサルニ疾病事變等正當

ノ事由ナクシハ其ノ保證金ノ金額又ハ何

分ヲ豫審判事ノ言渡

第二百十一條 前條ノ證書ハ書記局ニ差出ス可シ

保釋中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四時前ニ其報知ヲ爲ス可シ

第二百十二條 保釋ヲ許スニハ金額ヲ以テ被告人ノ出廷ヲ保證セシム可シ但豫審判事其金額ヲ定メ保釋ヲ許スノ言渡書ニ記載ス可シ

第二百十三條 保證ヲ爲スニハ被告人又ハ其他ノ者ヨリ保証金若クハ貯金預所又ハ銀行ノ預証書ヲ書記局ニ差出ス可シ

又裁判所ノ管轄地内ニ住シ且充分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツ可キ保證書ヲ差出スヲ得

第二百十四條 保釋中被告人呼出テ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時ハ保証金ノ全部又ハ幾分ヲ没入ス可シ

第二百十五條 保証金ヲ没入スルニハ檢事ノ意見ヲ聽キ豫審判事其言渡ヲ爲ス可シ

ニテ没収 没入トリア  
 スルナリ 他人ヨリ保  
 他人保證 他人ヨリ保  
 モノ没入ノ時ニ金圓  
 ナ納メサル時ハ民事  
 ノ裁判所ニ訴ヘ出  
 テ請求ヲ爲スナリ 民  
 事ノ規則ノ訴訟手續  
 ナ徴収トリマ  
 リ徴収テリ

還付カヘ

責付 被告人ヲ其親屬  
 シ監督ノ責ニ任  
 セシムルナリ

若他人ノ保證ニ係ル時ハ民事ノ規則ニ從ヒ之ヲ徴収ス可  
 シ

第二百十六條 豫審判事保證金ヲ没入シタル時ハ保釋ノ言渡  
 シテ取消ス可シ

又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消スヲ必要ナリトスル時ハ檢事  
 ノ意見ヲ聽キ其言渡ヲ取消ス可シ

第二百十七條 豫審判事保證金ヲ没入シタル後免訴ノ言渡違  
 警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕  
 罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ前  
 ニ没入シタル金額ヲ還付ス可シ

第二百十八條 豫審判事免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言  
 渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡  
 ヲ爲シ若クハ保釋ノ言渡ヲ取消タル時ハ保證金ヲ還付ス可  
 シ

第二百十九條 豫審判事ハ保釋ノ請求アルト否トテ問ハス檢

第十節 豫審終結

第十節 豫審判事ノ取  
 場合ヲ  
 示ス  
 管轄ニ非ス 豫審判事  
 件其ノ管轄ニ非スト  
 ナスハ即チ其ノ被告  
 ハ皇族勅任官ニテア  
 リタルハ又タ其罪ハ  
 違警罪ニテアリタル  
 ハ又犯所ガ我管轄内

▲參看 明治十四年九月廿日第四十七號布告

第一條 被告人ヲ責付スルニハ親屬又ハ故舊ヨリ何時ニテモ  
 呼出ニ應シ出廷セシム可キノ証書ヲ裁判所書記局ニ差出サ  
 シムヘシ

第二條 責付中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四時前ニ其  
 通知ヲ爲スヘシ

第三條 被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時  
 ハ檢事ノ意見ヲ聽キ責付ヲ取消スヘシ

第十節 豫審終結

第二百二十條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ストシ又ハ他  
 ニ取調ヲ要スルコトナシト思料シタル時ハ豫審終結ノ處分ニ  
 付キ檢事ノ意見ヲ求ムル爲メ一切ノ訴訟書類ヲ送致ス可  
 シ  
 檢事ハ訴訟書類ニ意見ヲ付シ三日内ニ之ヲ還付ス可シ

ニアラザルハ或ハ取  
調了リテ他ニ關係  
シタルノ之ナシト思  
考シタル時ハ之ヲ以  
テ其ノ事件ノ豫審ヲ  
終結シタリトス  
終結ニ取調ノス  
ニタルコト

第二百二十二條 本條  
如ノ定ムルモノハ檢  
事ハ第二百四十六條  
ニ定ムル如ク豫審終  
結ニ對シテハ故障ヲ  
ナスコトヲ得  
サル故ナリ

一 裁判所ニ於テ推測  
ヲ以テ罰スルコトヲ  
得ザレ  
ハナリ  
二 現ニ道德ヲ破リタ  
ル罪ハ犯スト雖親  
屬相盜ム如ク法律  
上ニテ罪トナラズ

三 第十一條ニ定メタ  
ル期限ヲ經過シタ  
ルニ因リ公訴既ニ  
消滅シタル場合  
五 大赦アリテ社會ノ  
罪惡一洗シタル時  
六 刑法第一編第四章  
第七十五條乃至第  
八十條第三百十四條  
及ヒ第三百十五條ノ  
場合ヲ謂フ 要償ノ訴  
モノナリ

三 第十一條ニ定メタ  
ル期限ヲ經過シタ  
ルニ因リ公訴既ニ  
消滅シタル場合  
五 大赦アリテ社會ノ  
罪惡一洗シタル時  
六 刑法第一編第四章  
第七十五條乃至第  
八十條第三百十四條  
及ヒ第三百十五條ノ  
場合ヲ謂フ 要償ノ訴  
モノナリ  
チ爲スコトヲ得ス 刑事  
所ノ關係離レタル時  
以附帶ス可ラザレハ  
ナリ 釋放免ト異ナリ  
リ 釋放免シテ被告ノ  
訴ヲ免シテ被告ノ  
自由ヲ復スルコト云ヒ  
釋放ハ罪ノ問フ可キ  
アルモ其輕且微ナル  
ノ故ヲ以テ法律上其  
自由ヲ停止スルコトヲ  
許サハルニ因リ其  
勾留ヲ解シタイフ

第二百二十一條 檢事ハ豫審充分ナラスト思料シタル時ハ其  
條件ニ付中更ニ取調ヲ請求スルコトヲ得若シ豫審判事其請求  
ヲ肯ヒザル時ハ檢事訴訟書類ニ意見ヲ付シ二十四時内ニ之  
ヲ還付ス可シ

第二百二十二條 豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハス後  
ニ記載シタル言渡ヲ以テ豫審ヲ終結ス可シ

第二百二十三條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非サルコトヲ認  
メタル時ハ其旨ヲ言渡ス可シ若シ拘留ヲ要スル者ト認メタ  
ル時ハ前ニ發シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發シ其事件  
ヲ檢事ニ交付ス可シ

第二百二十四條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ言渡ヲ爲  
シ且被告人拘留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ  
一 犯罪ノ證據充分ナラサル時  
二 被告事件罪ト爲ラサル時  
三公訴ノ期滿免除ト爲リタル時

四 確定裁判ヲ經タル時  
五 大赦アリタル時  
六 法律ニ於テ其罪ヲ全免スル時  
本條ノ場合ニ於テ被害者ハ民事裁判所ニ非サレハ要償ノ訴  
ヲ爲スコトヲ得ス

第二百二十五條 被告事件違警罪ナリト思料シタル時ハ違警  
罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ且被告人拘留ヲ受ケタル時ハ  
釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百二十六條 被告事件輕罪ナリト思料シタル時ハ輕罪裁  
判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ

被告人拘留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金ノ刑ニ該ル可キ者ト  
思料シタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ  
禁錮ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ保釋ヲ許シ又ハ責  
付ヲ爲スコトヲ得  
若シ被告人未ダ勾留ヲ受ケサル時ハ令狀ヲ發スルコトヲ得

其言渡 重罪ノ被告人  
付ヲ爲ス可カラズ故  
ニ豫審中保釋又ハ責  
付セシモノト雖用重  
罪裁判所ニ移スノ言  
渡アリタルハ保釋  
又ハ責付ヲ取消スモ  
ノト

指揮 サン  
實事 コト理由 道理又  
ハヨリ  
原由 ヨリド 明示 アキ  
メニ  
メス  
正條 第何條ニ當  
ルト云フ  
臆本 ウツ

第二百二十七條 被告事件重罪ナリト思料シタル時ハ重罪裁  
判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ若シ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲  
シタル時ハ其言渡ヲ取消ス可シ  
重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニハ控訴裁判所檢事長ノ指揮ア  
ルマテ豫審ヲ爲シタル裁判所ノ監倉ニ被告人ヲ留置ス可キ  
ヲ記載ス可シ

第二百二十八條 豫審終結言渡ニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理  
由ヲ付ス可シ  
管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲スニハ其原由ヲ明示シ若シ被告人  
ヲ勾留ス可キ時ハ其原由ヲ明示ス可シ  
免訴ノ言渡ヲ爲スニハ被告事件罪ト爲ラサルヲ公訴受理ス  
可カラサルコト及其原由又犯罪ノ證據充分ナラサル時ハ其旨  
ヲ明示ス可シ  
違警罪裁判所輕罪裁判所又ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲  
スニハ犯罪ノ性質模樣證據ノ充分ナルコト及ヒ其罪ヲ罰ス

被告人ヲ逮捕スル能  
ハサル場合云々 勾留  
發スルモコレヲ逮捕  
スルコト能ハザルカ又  
ハ逮捕勾留セシモノ  
逃ビシタルトキタリ  
トモ豫審ヲ停止スル  
コトナク証人ヲ訊問  
シ犯所ニ臨檢スル等  
ノ處分ヲナシ其ノ末  
被告人禁錮以上ノ刑  
ニ該ル可シト思料シ  
テ之レヲ重罪裁判所  
又ハ輕罪裁判所ニ移  
スノ言渡ヲナス場合  
ニハ其ノ旨趣ヲ明ラ  
カニ記シテ他日ノ上  
異議ヲ防グベシ  
故障 財產家財  
訴上告 財產簡略

可キ法律ノ正條ヲ明示ス可シ  
第二百二十九條 前條ノ言渡書ニハ第三百三十條ノ規則ニ從ヒ  
被告人ノ氏名等ヲ明示ス可シ  
第二百三十條 書記ハ速ニ豫審終結ノ言渡書ノ臆本ヲ檢事民  
事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ但是等ノ者ハ第二百四十  
六條以下ノ規則ニ從ヒ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スコトヲ得  
第二百三十一條 被告人ヲ逮捕スルコト能ハサル場合ニ於テ重  
罪裁判所又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ  
移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ其旨ヲ言渡書ニ記載ス可シ但被  
告人ハ現ニ勾留ヲ受クルニ非レハ其言渡ニ對シ上訴ヲ爲ス  
コトヲ得ス  
第二百三十二條 前條ノ場合ニ於テ檢事又ハ民事原告人ハ假  
ニ被告人ノ財產ヲ差押可クテ民事裁判所ニ請求スルヲ得  
第二百三十三條 豫審終結ノ言渡ヲ爲シタル時ハ豫審判事ヨ  
リ速ニ其旨ヲ裁判所長ニ報告ス可シ

豫審上訴 第四章

テガ豫審上訴豫審裁  
ルキ故障ヲ會議局ニ訴  
フル豫審處分ハ公然  
故障豫審處分ハ公然  
ニ辨論シタルモノニ  
アラザレハ豫審判事  
ノ處分不當ナキヲ保  
シ難シ故ニ之ヲ改正  
スルノ申立ヲナスヲ  
云フ然レハ四個ノ原  
因ナケレ  
ハ能ハス  
一豫審判事ノ管轄ニ  
非サルノ申立ヲナ  
スモ判事之レヲ棄  
却シテ省ミザルハ  
被告事件禁錮以上ノ  
刑ニ該ル可キ時ニ非  
スシテ勾留狀ヲ發シ  
若クハ此令狀ヲ發シ  
タルヨリ十日ヲ過ク  
ルモ被告入ヲ責付ス  
ルコトナクシテ収監狀  
等ヲ發セサル時等コ

又十五日毎ニ未決ノ豫審事件ニ付キ簡略ナル報告書ヲ差出  
ス可シ

第四章 豫審上訴

第二百三十四條 左ノ場合ニ於テ檢事又ハ被告人ヨリ豫審終  
結ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スコトヲ得

一管轄違ノ申立ヲ棄却シタル時

二法律ニ背キ令狀ヲ發シ又ハ之ヲ發セサル時

三法律ニ背キ保釋責付ヲ爲シ又ハ之ヲ爲ササル時

四越權ノ處分アル時

民事原告人ハ私訴ニ付第四ノ場合ニ於テ故障ヲ爲スコトヲ得

第二百三十五條 故障ヲ爲サントスル者ハ其裁判所ノ書記局  
ニ瓶意書ヲ差出ス可シ

故障アリタル時ハ書記其瓶意書ノ原本ヲ對手人ニ送達シ對  
手人ハ三日内ニ答辨書ヲ差出スコトヲ得

故障ニ付テハ豫審處分ノ執行ヲ停止セス但保釋責付ヲ爲シ

タルニ付キ檢事ヨリ故障アリタル時ハ其執行ヲ停止ス

第二百三十六條 故障ハ其裁判所ノ會議局ニ於テ判事三名以  
上ニテ瓶意書答辨書其他訴訟書類及ヒ檢事ノ意見書ニ依リ  
之ヲ判決ス可シ

會議局ノ言渡ハ速ニ之ヲ執行ス但其言渡ニ對シテハ豫審終  
結ノ言渡アリタル後上告ヲ爲スコトヲ得

第二百三十七條 左ノ場合ニ於テハ檢事被告人又ハ民事原告  
人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ豫審判事ヲ忌避スルコトヲ得

一豫審判事又ハ其配偶者ト被告人被害者又ハ是等ノ者ノ配  
偶者ト親屬ナル時

二豫審判事被告人又ハ民事原告人ノ後見人ナル時

三豫審判事又ハ其配偶者ニ於テ民事原告人被告人又ハ是等  
ノ者ノ親屬ヨリ賄賂ニ非スト雖モ贈物ヲ收受シ若クハ聽  
許シタル時

第二百三十八條 忌避ノ申立ハ豫審判事ニ之ヲ爲ス可シ但其

レナ三被告人ノ請求  
ヲ待タズシテ  
保釋ヲナシ檢事ノ意  
見ヲ聽カスシテ責付  
ヲナシ若クハ保釋責  
付ヲ爲ス可キ時之ヲ  
爲サレ  
ル場合 四 豫審判事其  
シテ專横ノ處分ヲ越  
テ爲シタル場合 對手  
人ヲヒ 會議局ノ言渡  
云々 會議局ノ言渡シ  
ニ對シテハ之ヲ  
上告スルヲ得ルト雖  
モ豫審終結ノ言渡ヲ  
待ツ所以ハ假令ヒ會  
議局ノ決定如何ナル  
モ豫審ハ一切之ニ關  
セザルモノナレハ豫  
審ノ裁判却テ被告ヲ  
シテ満足セシムルア  
ルモ知ル可カラズ是  
其ノ終結ノ言渡ヲ終  
リテ後上告ス 忌避者  
ル所以ナリ

治罪法

ハ此豫審判事ノ親屬  
ナル故我ニ利ナシ必  
ス幾分カ一方ノ利ヲ  
計ルト思フハ之ヲ  
サケテ外ノ判事配偶  
ヲ掛リニ願フ  
者アヒ親屬法律上親  
ルモノハ刑賄賂ナヒ  
法ニ詳ナリ賄賂ナヒ  
贈物オシリ收受ウケ  
贈物オシリ收受ウケ  
聽許贈物ヲイマダ手  
クトルヲ認可スル  
承知スル認可スル  
棄却採用セ置メオサ  
キ會議局云々棄却ニ  
キ會議局云々付故障  
ヲ爲スコト得ルモ忌  
避ノ認可ヲ得タルト  
對手ハヨリ上訴スル  
コトハ許サハルナリ  
辨明書イヒワ繼續云  
クガキ繼續云

申立ヲ爲スニハ趣意書一通ヲ書記局ニ差出ス可シ  
書記ハ趣意書ヲ豫審判事ニ送致シ豫審判事ハ其送致ヲ受ケ  
タルヨリ二十四時内ニ其申立ヲ認可シ又ハ棄却スルコト趣  
意書ノ紙尾ニ記載シ一通ヲ書記局ニ藏置シ一通ヲ本人ニ送  
達ス可シ  
第二百三十九條 豫審判事忌避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ其中  
立人ヨリ故障ヲ爲スコト得  
會議局ニ於テハ故障ノ派意書及ヒ豫審判事ノ辨明書ニ依リ  
判決ヲ爲ス可シ  
第二百四十條 豫審判事ハ忌避ノ申立アリタル時又ハ其申立  
ヲ棄却シタル時ト雖モ豫審ノ手續ヲ繼續ス可シ但終結ノ言  
渡ヲ爲スコト得ス  
又タ急速ヲ要セサル事件ニ付テハ豫審ノ手續ヲ停止スルコ  
ト得  
第二百四十一條 會議局ニ於テハ忌避ニ付テハ故障ヲ棄却シ

々忌避ノ申立アリタ  
ルカ又ハ其故障ア  
リタルカヲ問ハス豫  
審判事ハ豫審ノ手續  
ヲ繼續スベシサレモ  
事ノ急速ヲ要セズ數  
日ヲ延バスモ弊害ナ  
キ時ハ之ヲ中止スル  
ヲ繼續引ツ  
時繼續引ツ  
忌避ニ付故障云々第  
百三十七條ニ定メタ  
ル忌避スヘキ原由ア  
ルヲ知リ又ハ嫌疑ア  
リテ回避スベキ者ト  
思料シタル時ハ假令  
其ノ申立ナキモ豫審  
判事自ラ回避ノ申立  
ヲ會議局ニ爲スベシ  
回避豫審判事自ラ其  
回避掛リテ遠慮スル  
認可ハハト  
ト

タル時ハ上告ヲ爲スコト得但豫審終結ノ言渡アリタル後ニ  
非サレハ之ヲ爲スコト得ス  
第二百四十二條 豫審判事自ラ第二百三十七條ニ定メタル原  
由アルコト認メ又ハ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ會議局  
ニ回避ノ申立ハ爲スコト得  
回避ノ申立ハ會議局ニ於テ之ヲ判決ス可シ  
第二百四十三條 會議局ニ於テ忌避又ハ回避ノ申立ヲ認可シ  
タル時ハ裁判所長更ニ他ノ判事ヲシテ豫審ヲ爲サシム可シ  
其判事ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ  
前豫審判事ノ爲シタル處分ト雖トモ更ニ取調ヲ爲スコトヲ  
得  
第二百四十四條 書記ハ自ラ回避シ又ハ檢事其他訴訟關係人  
ヨリ會議局ニ申立テ之ヲ忌避スルコト得  
第二百四十五條 檢察官ハ被告人又ハ民事原告人ヨリ之ヲ忌  
避スルコト得ス若シ自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其

**職權職限**  
 許否 ヌルスカニルサ  
 ハンケ 豫審終結ノ言  
 ツスル 第一管轄違ノ言渡  
 渡 第二免訴ノ言渡第  
 三重罪裁判所ニ移ス  
 ノ言渡第四輕罪裁判  
 所ニ移スノ言渡第五  
 違警罪裁判所ニ移ス  
 ノ言渡

**越權權限ヲ**  
 第二百四十六條三項  
 被告人ハ自己ノ利害  
 ニ關スルノ外ハ故障  
 ナラスヲ許  
 サハルナリ  
 期限一日 書記局ヨリ  
 達シタルヨリ一日ノ  
 内ニ其ノ申渡シヲナ

旨ヲ會議局ニ申立ツルヲ得  
 檢事補自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ檢事ニ申  
 立ツ可シ檢事ハ其申立ヲ許否ス可シ  
 第二百四十六條 檢事ハ總テ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲  
 スヲ得  
 民事原告人ハ私訴ニ付キ越權ノ處分アルニ因リ豫審終結ノ  
 言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得  
 被告人ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得  
 輕罪裁判所又ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シテハ豫審  
 判事ノ管轄違越權又ハ其事件ヲ移ス可キ裁判所ノ管轄違  
 ニ非サレハ故障ヲ爲スヲ得ス  
 第二百四十七條 故障ノ期限ハ一日ナリトス但言渡書ノ送達  
 アリタルヨリ之ヲ起算ス  
 第二百四十八條 檢事民事原告人及ヒ被告人故障ヲ爲スニハ  
 申立ヲ書記局ニ差出ス可シ書記ハ 速ニ其旨ヲ對手人ニ通

スコトハ左ノ趣  
 意書ハ到底一日ノ間  
 ニ認メ得ル可キモノ  
 ニアラザレハ次條ノ  
 例ニ從フ  
 モノトス  
 起算 カツヒハ  
 シムル  
 通知 セル  
 附帶ノ故障 他ノ一方  
 ノ言渡ニ服セズシテ  
 故障ヲ爲シタルニ因  
 リ己モ亦之ニ附帶シ  
 テ不服ノ條件ヲ申立  
 ルチイフ最レ原故障  
 即チ主タル故障ニ對  
 スルノ  
 義ナリ  
 第二百三十六條云々  
 故障ヲ會議局ニテ判  
 決シ豫審判事ノ言渡  
 正當ニシテ故障ヲ理  
 ナシトスルハ原告

知ス可シ  
 故障申立人ハ三日内ニ無意書ヲ書記局ニ差出ス可シ  
 書記ハ 速ニ無意書ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答  
 辨書ヲ差出スヲ得  
 第二百四十九條 故障アリタル時ハ對手人ヨリ其判決アルマ  
 テ何時ニテモ附帶ノ故障ヲ爲スヲ得  
 附帶ノ故障アリタル時ハ書記ヨリ其趣意書ヲ對手人ニ送達  
 ス可シ對手人ハ三日内ニ答辨書ヲ差出スヲ得  
 第二百五十條 豫審終結ノ言渡ハ故障ノ期限内又故障アリタ  
 ル時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止ス但被告人ヲ勾留シ又ハ  
 保釋責付ヲ取消スノ言渡ハ其執行ヲ停止セス  
 第二百五十一條 書記ハ故障無意書答辨書其他訴訟書類ヲ會  
 議局ニ差出ス可シ  
 第二百五十二條 會議局ニ於テハ第二百三十六條ノ規則ニ從  
 ヒ故障ノ判決ヲ爲ス可シ

渡ヲ認可スルノ言渡  
ヲナスナリ其ノ内或  
ハ終結ノ言渡ノ全部  
又幾分カヲ採用スヘ  
キ所アリテ之ヲ用ヒ  
彼ノ捨ツルニ於テ  
モ全部ノ言渡ヲ更ニ  
爲ス可シ是レ仍チ誤  
謬ナカラシム  
ン爲メナリ

指示 缺ケタル條件ヲ  
指示 指示スルナリ

發見 ミツケ  
ダス

共犯 二人以上共ニ罪  
ヲ犯シタルノ  
附帶ノ犯罪 第三十八  
條ニ詳ナ  
リ

豫審判事ノ言渡ヲ認可シタル時ハ其旨ヲ言渡シ若其全部又  
ハ幾分ヲ取消シタル時ハ全部ニ付キ更ニ言渡ヲ爲ス可シ  
又被告人ハ保釋責任付シ又ハ勾留スルノ言渡ヲ爲ス可シ得  
第二百五十三條 會議局ニ於テ必要ナリトスル時ハ判事一名  
ヲシテ更ニ豫審ヲ爲シ又ハ其指示スル所ノ條件ニ付キ更ニ  
取調ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可シ  
第二百五十四條 會議局ニ於テ故障ノ取調中管轄越權又  
ハ公訴受理ス可カラサルヲ發見シタル時ハ職權ヲ以テ豫  
審判事ノ言渡ヲ取消ス可シ得  
第二百五十五條 會議局ニ於テ故障ノ取調中共犯ノ起訴ヲ受  
ケサル者アルヲ附帶ノ犯罪ニ付キ豫審ヲ受サル者アルヲ  
發見シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ判事一名  
ヲシテ豫審ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可シ  
檢事ハ意見書ヲ差出ス可シ  
會議局ニ於テハ報告書其他訴訟書類ニ依リ故障ト共ニ之ヲ

上告 四百十條以  
下ニ詳ナリ

上訴 法律ハ被告人ヲ  
保護スル者多シ  
是レ間々冤枉アルヲ  
以テナリ本條亦其一  
ニシテ上訴得ヘキ  
事ト上訴期限ヲモ記  
入ス其記入無キ時ハ  
言渡書無効ニ屬シ更  
ニ規則ヲ踏ミタル送  
達書アル迄上訴シ得  
ヘキモ  
ノトス

確定 各種ノ言渡ノ上  
訴アリサルニ因  
リ又ハ上訴ヲ受ケタ  
ル大審院又ハ輕罪裁  
判所會議局ニ於テ其  
言渡ヲ認可シタルニ  
因リ確定 控訴裁判所  
スルナリ

判決ス可シ

第二百五十六條 故障ノ判決アリタル時ハ 速ニ其言渡書ノ  
原本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ  
第二百五十七條 檢事其他訴訟關係人ハ會議局ノ言渡ニ對シ  
上告ヲ爲ス可シ得  
第二百五十八條 被告人ニ送達ス可キ言渡書ニハ其言渡ニ對  
シ上訴スルヲ得キ及ヒ其期限ヲ記載ス可シ其記載ナキ  
時ハ規則ニ從ヒ更ニ言渡書ノ送達アルマテ被告人上訴ノ權  
ヲ失フ可ナル可シ

第二百五十九條 第三百十一條ヨリ第三百十三條マデノ規則  
ハ豫審ノ上訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス  
第二百六十條 重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事  
其言渡書ニ一切ノ書類ヲ添ヘ 速ニ之ヲ控訴裁判所檢事長  
ニ送達ス可シ  
檢事長ハ一切ノ書類證據物件及ヒ被告人ヲ重罪裁判所ニ移



重罪裁判所檢  
 行ノモ以外  
 警罪裁罪名ノ變更謀  
 判所ノ故殺ト爲シ盜罪ト  
 詐欺取財ト爲スモ此  
 ノ改革ニ付キ再訴ヲ  
 受ルノ理由ヲ生セス  
 然レモ別ニ新証アリ  
 タルハ訴ヲ起スヲ得  
 第四編 豫審ハ密行チ  
 判ハ之レニ反シテ衆  
 人ノ傍聴ヲ許シ公ク  
 ニ裁判ヲ爲スモノナ  
 リ本篇ニ於テハ重罪  
 輕罪違警罪裁判所ニ  
 於テ豫審終結ノ言渡  
 ニ因リ或ハ豫審ナク  
 シテ直チニ起訴アリ  
 タルニ因リ又ハ上等  
 ナル裁判所ノ判決ニ  
 依リ之ヲ移サレタル  
 ニ因リ之ヲ管掌スル

スノ處分ヲ檢事ニ命ス可シ  
 重罪裁判所以外ノ裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事  
 速ニ其執行ヲ爲ス可シ  
 第二百六十一條 豫審ニ於テ被告人免訴ノ言渡ヲ受ク其言渡  
 確定シタル時ハ罪名ノ變更アルモ同一ノ事件ニ付キ更ニ訴  
 ヲ受クルコトナカル可シ但新ナル證據アル時ハ此限ニ在ズ新  
 ナル證據アル時ハ檢事ヨリ之ヲ會議局ニ差出シ會議局ニ於  
 テハ其起訴ヲ許ス可キヤ否ヲ判決ス可シ  
 第四編 公判  
 第一章 通則  
 第二百六十二條 訴訟事件ハ書記局ノ簿冊ニ登記シタル順序  
 ニ從ヒ之ヲ公判ニ付ス可シ  
 裁判所長ハ未決勾留ノ日數ヲ減縮スル爲メ職權ヲ以テ其順  
 序ヲ變更スルコトヲ得

重罪輕罪違  
 定ム通則 警罪ノ區別  
 ナタ且大審院ノ訴訟  
 手續ニ係ルモノト雖  
 モ總テ通用スベシ即  
 チ第二百六十二條ヨ  
 リ以下第三百二十條  
 條マテノ規則ナリ順  
 冊ヲ登記セルノ順  
 序シテ公判裁判所ニ  
 傍聴ヲ許シ公ケニ減  
 判決スルコトヲ云フ  
 縮メル重要ナル事由  
 訴訟關係人ノ不在若  
 シクハ疾病ニ因リ出  
 廷シ難キ事由ノ證明  
 アルハ或ハ犯罪ノ  
 證據充分ナラサル爲  
 メ公判ノ期日ヲ延引  
 スル等 訊問 セン 辯論  
 是ナリ 公行 衆人ノ傍  
 ヒラキ 聴クヲ許シ

又重要ナル事由ノ爲メ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタ  
 ル時モ亦順序ヲ變更スルコトヲ得  
 第二百六十三條 重罪輕罪違警罪ノ訊問辯論及ヒ裁判言渡ハ  
 之ヲ公行ス否ラサル時ハ其言渡ノ効ナカル可シ  
 第二百六十四條 被告事件公安ヲ害シ又ハ猥褻ニ涉リ風俗ヲ  
 害スルノ恐アル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ  
 職權ヲ以テ其訊問及ヒ辯論ノ傍聴ヲ禁スルコトヲ得其裁判言  
 渡ヲ爲スニ當テハ傍聴ヲ許ス可シ  
 第二百六十五條 被告人ハ公廷ニ於テ身體ノ拘束ヲ受クルコ  
 トヲ但守奉チ置クコトアル可シ  
 禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人疾病アルニ非スシテ出廷ヲ  
 肯セザル時ハ之ヲ引致スルコトヲ得若シ出廷シテ辯論スルコ  
 トヲ肯セザル時ハ對審トシテ裁判言渡ヲ爲ス可シ  
 第二百六十六條 被告人ハ辨論ノ爲メ辨護人ヲ用ルコトヲ得  
 辨護人ハ裁判所々屬ノ代理人中ヨリ之ヲ選任ス可シ但裁判

テ公ニ 公安ヲ害シ 國  
 スル 如キ其訊問ヲ傍  
 聽セシメ爲ニ人心ヲ  
 激動ナサシ 猥褻ニ涉  
 ムル是ナリ 猥褻ニ涉  
 リ風俗ヲ害スルノ恐  
 アル時 強姦有夫姦ノ  
 拘束 拘束等ノ 守卒  
 人逃亡若クハ暴行  
 行テ豫防スルモノ  
 銅以上 禁錮以下ハ固  
 延シ必要 引致 巡査ヲ  
 トセシメ 對審 トシテ 雙  
 キタテ 對審 トシテ 雙  
 シム 對審 トシテ 雙  
 辨論ヲ盡シタルモ 辨  
 ノト看做スナリ 辨  
 護人ソノ申立ノ間違  
 分ニ我情狀ヲ言フ  
 出来ヌ時ニ問ヒ合

所ノ允許ヲ得タル時ハ 代理人ニ非サル者ト雖モ 辨護人ト爲  
 スコト得  
 第二百六十七條 被告人公廷ニ於テ 暴行又ハ 喧嘩ヲ爲シ 辨論  
 ヲ妨礙スル時ハ 裁判長ヨリ 再度告戒ヲ爲シ 仍ホ之ニ從ハザ  
 ル時ハ 檢察官ノ 請求ニ 因リ 又職權ヲ以テ 被告人ヲ 退廷セシ  
 メ 若クハ 勾留スルコト得  
 前項ノ場合ニ於テハ 對審トシテ 引續キ 辨論及ヒ 裁判言渡ヲ  
 爲スコト得  
 若シ 辨論二日ニ 渉ル時ハ 更ニ 被告人ヲ 出廷セシム可シ  
 第二百六十八條 被告人 精神錯亂又ハ 疾病ニ 因リ 出廷スルコ  
 能ハサル時ハ 痊癒ニ 至ルマテ 辨論ヲ 停止ス  
 辨論ニ 取掛リタル 後 被告人 精神錯亂シタル時ハ 其 痊癒ノ 後  
 新ニ 辨論ヲ 爲スコシ 其他ノ 疾病ニ 罹ル時ハ 痊癒ノ 後 前ニ 停  
 止シタルヨリ 以後ノ 手續ヲ 爲スコシ 但五日間 辨論ヲ 停止シ  
 又ハ 檢察官 其他 訴訟關係人ノ 請求アリタル時ハ 新ニ 辨論ヲ

ハセ又ハ代テ 暴行  
 言シタルモノ 暴行  
 ノ 喧嘩 ヲカマシ 妨礙  
 シヤ 裁判長 上席裁判  
 官ニ 告戒  
 告戒トキキツケル  
 廷ハシヨシリツ  
 留禁錮 精神錯亂  
 以上 精神錯亂  
 痊癒ナホ 停止  
 告知書  
 闕席シタル 被告人  
 已  
 得サルノ 闕席ヲ 除  
 ク外ハ 被告人ガ 自ラ  
 辨護ノ 權ヲ 拋棄スル  
 モノナリ 故ニ 闕席シ  
 ナカラ 名代人ヲ 用ヒ  
 テ 辨護セシムルコト  
 許サ

爲スコシ  
 若シ 被告事件及ヒ 法律ノ 適用ニ 付キ 既ニ 辨論ヲ 終タル時ハ  
 其 痊癒ノ 後 更ニ 取調ヲ 爲スコシ 裁判官 言渡ヲ 爲スコシ  
 第二百六十九條 禁錮以上ノ 刑ニ 該ル可キ 被告人 公判ノ 日時  
 ニ 出廷セスト 雖モ 豫審 終結ノ 言渡書又ハ 呼出狀ヲ 本人ニ 送  
 達シタルノ 證アルニ 非サレハ 闕席 裁判ヲ 爲コカラス  
 豫審 終結ノ 言渡書又ハ 呼出狀ヲ 本人ニ 送達スルコト 能ハサル  
 場合ニ於テハ 裁判所ニテ 猶豫ノ 期限ヲ 定メ 其 期限内ニ 被告  
 人 出廷セサル時ハ 闕席 裁判ヲ 爲スコキノ 告知書ヲ 親屬若ク  
 ハ 戸長ニ 送達ス可シ  
 第二百七十條 闕席シタル 被告人ニ 付テハ 辨護人ヲ 用アルコ  
 ト 許サヌ 但 其 親屬 故舊ハ 被告ノ 出廷スルコト 能ハサルノ 事由  
 ヲ 證明スルコト 得  
 裁判所ニ於テ 其事由ヲ 正當ナリトスル時ハ 檢察官ノ 意見ヲ  
 聽キ 裁判ヲ 延期スルコト 得

公廷云々 公廷内ハ靜  
 長ハ取締ノ爲メニ相  
 爲ス可シ  
 稱讚ホメ 誹謗ソシ制  
 止セイシト  
 其身分ノ如何ニ拘ハ  
 ラス 高等法院又ハ軍  
 事裁判所ニ屬ス  
 ト離モ  
 命令イヒ  
 命ツケ  
 前條ノ場合云々 違警  
 判所ニ於テ前條ノ罪  
 ナ犯ス者アルハ直  
 ニ終審即チ控訴ス可  
 カラザル裁判ヲ爲ス  
 可シ然レモ若シ其ノ  
 犯ス所輕罪ニ當ルモ

第二百七十一條 被告人中ノ一名又ハ數名出廷セスト雖モ出  
 廷シタルモノニ付テハ通常ノ規則ニ從ヒ對審裁判ヲ爲ス可  
 シ  
 第二百七十二條 裁判長ハ公廷ニ於テ諸般ノ取締ノ爲メ相當  
 ノ處置ヲ爲ス可シ  
 稱讚誹謗其他辯論ヲ妨礙スル者アル時ハ之ヲ制止シ又ハ退  
 廷セシムルヲ得  
 第二百七十三條 公廷ニ於テ輕罪違警罪ヲ犯シタル者アル時  
 ハ其身分ノ如何ニ拘ハラス裁判長ノ命令ニ因リ之ヲ取押ヘ  
 檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ裁判ヲ爲シ又ハ次ノ公判ニ付ス  
 ルノ言渡ヲ爲ス可シ  
 書記ハ犯罪ノ事件及ヒ裁判長ノ處分ニ付キ即時ニ調書ヲ作  
 ル可シ  
 第二百七十四條 前條ノ場合ニ於テ違警罪裁判所ニテハ違警  
 罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲シ輕罪ニ付キ始審ノ裁判ヲ爲ヘシ

ノナレハ始審裁判即  
 控訴セラルヘキ裁判  
 ナ爲ス  
 送附 オクリ  
 ツケル  
 附帶ノ事件 ツキソツ  
 ガラ豫審判事取調ヘ  
 タル口供ニ因リテ公  
 判ニ取掛リタルニ辨  
 論中以外ノ罪犯ヲ獲  
 見スル  
 本署 其事件ト  
 云フ

輕罪裁判所其他上等ノ裁判所ニテハ輕罪ニ付キ終審ノ裁判  
 ナ爲ス可シ  
 第二百七十五條 公廷ニ於テ重罪ヲ犯シタル者アル時ハ裁判  
 長被告人及ヒ證人ヲ訊問シ調書ヲ作り裁判所ニ於テ檢察官  
 ノ意見ヲ聽キ通常ノ規則ニ從ヒ裁判スル爲メ豫審判事ニ送  
 付スルノ言渡ヲ爲ス可シ  
 第二百七十六條 裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケタル事件ニ付キ裁  
 判ヲ爲ス可カラズ但辨論ニヨリ發見シタル附帶ノ事件及ヒ  
 公廷内ノ犯罪ニ付テハ此限ニ在ラス  
 若シ附帶ノ事件ニ付キ豫審ヲ必要ナリトスル時ハ本案ノ裁  
 判ヲ停止スルヲ得  
 第二百七十七條 檢察官被告人及ヒ民事擔當人ハ始審終審ヲ  
 問ハス本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ管轄違又ハ公  
 訴受理スヘカラサルノ申立ヲ爲スヲ得  
 裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴受理スヘカラ

棄却 ウチヌテ

控訴 シマフ  
第三百三十八條  
第三百六十五條

上告 シマフ  
第四百條

違警罪裁判所云々 大

院ノ裁判官ハ之ヲ  
忌避スルヲ得ス

干預 タチ  
イル

サルノ言渡ヲ爲スヲ得

第二百七十八條 裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ棄却シタル時ハ  
本案ノ裁判言渡ヲ待タヌ直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得  
此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百七十九條 檢察官其他訴訟關係人ハ第二百三十七條ニ  
定メタル理由アル時ハ違警罪裁判所輕罪裁判所控訴裁判所  
又ハ重罪裁判所ノ裁判官及書記ニ對シ忌避ノ申立ヲ爲スヲ  
得

豫審ヲ爲シタル裁判官其公判ニ干預シ又ハ始審裁判ヲ爲シ  
タル裁判官其豫審裁判ニ干預シタル時亦同シ

第二百八十條 忌避ノ申立ハ本案ノ裁判言渡ニ至ルマテ何時  
ニテモ之ヲ爲スヲ得

忌避ノ申立アリタル時ハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百八十一條 忌避又ハ回避ノ申立及ヒ其判決ヲ爲スニハ  
第二百三十八條ヨリ第二百四十五條迄ニ定メタル規則ニ從

變災厄難ノ爲メ 裁判官被  
告人又ハ其辯護人變  
災厄難ニ罹ルナリ

朗讀 コヘタカ  
ニヨム

陳述 マチシ  
タテ

効チカ  
ラ

允許 ユル  
シ

フ

第二百八十二條 忌避又ハ回避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ前ニ  
停止シタルヨリ以後ノ手續ニ取掛ル可シ但五日間辯論ヲ停  
止シタル時ハ新ニ辯論ヲ爲ス可シ  
變災厄難ノ爲メ訴訟手續ヲ停止シタル時亦同シ

第二百八十三條 公判ニ於テ用フ可キ證據ハ豫審ニ於テ用フ  
可キ證據ニ同シ

第二百八十四條 裁判長ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因  
リ又ハ職權ヲ以テ豫審中管轄官吏ノ作りタル調書及ヒ檢證  
書類ヲ朗讀セシムルヲ得  
是等ノ書類ハ原被證人ノ陳述ト同一ノ効チ有ス

第二百八十五條 調書ヲ作りタル司法警察官ハ檢察官其他訴  
訟關係人ヨリ證人トシテ之ヲ呼出シ又ハ裁判所ノ職權ヲ  
以テ之ヲ呼出スヲ得  
豫審判事ハ裁判所ノ職權ニ因リ又ハ檢察官其他訴訟關係人

説明 トキア  
カシ

録取 トル  
カキ

比較ス可キ時 証人ヲ  
呼ビ出  
スト雖モ 豫審及ヒ公  
判ニ於テノ 陳述 齟齬  
スルヲ以テ之ヲ  
比較スルナリ

言語ヲ接ス可カラズ

陳述ノ前ニ 辨論ニ立  
會ハサシムルルハ 甲  
乙自然掩蔽スルノ 恐  
レナキニ非ザルニハ  
陳述後ニ 辨論ニ立會  
ハシメ又互ニ 言語ヲ

ヨリ其裁判所ノ 允許ヲ得テ 調書説明ノ 爲メ之ヲ 呼出スヲ  
得

第二百八十六條 豫審ニ於テ 訊問シタル 証人ハ 更ニ之ヲ 呼出  
スヲ得

豫審ニ於テ 録取シタル 証人ノ 陳述書ハ 更ニ其 証人ヲ 呼出  
サ、ル時 証人呼出テ 受ケ出廷セサルトキ 又ハ 豫審及ヒ 公判  
ニ於テノ 陳述ヲ 比較ス可キトキハ 檢察官 其他 訴訟關係人ノ  
請求ニ 因リ 又ハ 裁判長ノ 職權ヲ以テ之ヲ 朗讀セシムルヲ  
得

第二百八十七條 第二百七十八條以下ノ 規則ハ 公判ノ 証人ニ  
モ亦之ヲ 適用ス

第二百八十八條 証人ハ 互ニ 言語ヲ 接ス可カラズ 又 陳述前 辨  
論ニ立會フ可カラズ

第二百八十九條 証人ハ 左ノ 順序ニ 從ヒ 訊問ス可シ  
一 檢察官ノ 請求ニ 因リ 呼出シタル 証人

交ユルルハ 事實ヲ 曲  
シルノ 恐レアルベキ  
ニハ之レヲ 禁  
ジラレタリ

分明 ヲタク  
カシ

証人ノ 陳述不實云々  
該ル可キ者 刑法 第二  
百十八條  
第二百二十條ハ 証人  
タルモノ 被告人ヲ 陷  
害スル爲メ 事實ヲ 掩  
ヒテ 偽證ヲ ナシ又ハ

二 民事原告人ノ 請求ニ 因リ 呼出シタル 証人  
三 被告人及ヒ 民事擔當人ノ 請求ニ 因リ 呼出シタル 証人  
第二百九十條 証人 數名アル時ハ 氏名 目錄ノ 順序ニ 從ヒ之ヲ  
訊問ス可シ 但 裁判長ハ 証人ヲ 呼出シタル者ノ 意見ヲ 聽キ 其  
順序ヲ 變更スルヲ得

第二百九十一條 証人及ヒ 被告人ハ 裁判長ニ 非サレハ之ヲ 訊  
問スルヲ得ス  
陪席判事及ヒ 檢察官ハ 裁判長ニ 告ケ 証人及ヒ 被告人ヲ 訊問  
スルヲ得

訴訟關係人ハ 辨論ニ 必要ナリトスル 條件ヲ 分明ナラシムル  
爲メ 証人ヲ 訊問ス可キヲ 裁判長ニ 求ムルヲ得  
第二百九十二條 証人ノ 陳述不實ニシテ 故意ニ 出テ 禁錮以上  
ノ 刑ル 該ル可キ者ト 思料シタル時ハ 裁判所ニ於テ 檢察官 其  
他 訴訟關係人ノ 請求ニ 因リ 又ハ 職權ヲ以テ之ヲ 取押ヘ 勾引狀  
ヲ以テ 豫審判事ニ 送致ス可キノ 言渡ヲ 爲ス可シ

被告人ヲ曲庇スル爲  
ノ偽證ヲナシタル場  
合ノ罪ヲ論ス本條ハ  
即チ是等ノ現行犯ヲ  
發見シタル時  
ノ手續ヲ示ス  
故意 或ハ罪ヲ輕クセ  
ントシ或ハ罪ヲ  
重クセントコトサテ  
ニモクロムコトナリ  
即時  
サマ  
闕席 裁判所ヘ  
出テヌ  
出廷 裁判所ヘ  
出ル

其證人ノ陳述ハ書記之ヲ錄取シ豫審判事ニ送致ス可シ  
本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢察官其他訴訟關係人ノ請  
求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ事件ニ付キ裁判ノ延期ヲ言  
渡スコトヲ得

第二百九十三條 証人呼出ニ應セサル時ハ裁判所ニ於テ即時  
ニ檢察官ノ意見ヲ聽キ左ノ科料罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡  
ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス  
一 違警罪事件ニ付テハ五拾錢以上壹圓九拾五錢以下ノ科料  
ニ輕罪以上ノ事件ニ付テハ貳圓以上拾圓以下ノ罰金  
被告人闕席シタル時ハ其呼出シタル證人出廷セスト雖モ科  
料罰金ヲ言渡ス可カラズ

第二百九十四條 本條ノ言渡書ハ即時ニ書記ヨリ本人ニ送達  
ス可シ  
其言渡ヲ受ケタル者三日内ニ出廷スルコト能ハサリシ正當ノ  
事由ヲ證明シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ科

閉廳 役所ヲ開廳 役所  
ヲマテ

意見  
陳述  
再度  
勾引狀ヲ發ス可シ  
期日ハ之ヲ勾引シテ  
必ス出廷セ  
シムルナリ  
適用  
新ニ命シタル云々  
ニテ命シタル鑑定人  
ヲ公判ニ付キ更ニ用  
フルハ其ノ性質証  
人ト異ナラズシテ豫  
審ニテ鑑定シタル所  
ヲ說明シ解釋スルモ

料又ハ罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ  
但重罪裁判所閉廳ノ後ハ其開廳シタル裁判所ニ其申立ヲ爲  
ス可シ

第二百九十五條 証人呼出ニ應セサル時ハ檢察官其他訴訟關  
係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公判ヲ延期スル  
ノ言渡ヲ爲スコトヲ得

檢察官自ラ其請求ヲ爲サル時ハ公判ノ延期ニ付キ意見ヲ  
陳述ス可シ

第二百九十六條 証人再度ノ呼出ヲ受ケ仍ホ出廷セサル時ハ  
檢察官ノ意見ヲ聽キ前ニ定メタル科料罰金ノ二倍及ヒ再度  
ノ呼出ノ費用ヲ言渡ス可シ此場合ニ於テモ亦前條ニ從ヒ再  
ヒ公判ヲ延期スルコトヲ得但延期シタル時ハ其証人ニ對シ勾  
引狀ヲ發ス可シ

第二百九十七條 第九十一條以下ノ規則ハ公判ニ於テ新ニ  
命シタル鑑定人モ亦之ヲ適用ス但呼出ニ應セサル時ハ第二

ノナレバ証人ニ付テ  
ノ規則ト同シク取扱  
ス  
盛者ツン 啞者オ 國語  
ニ通セザル者 日本語  
シラザ 其順序ヲ變更  
スルヲ得 裁判上席人  
理シ順序ヲ正スノ任  
アリ而シテ其順序ノ  
一定シタル上ハ漫ニ  
之ヲ改ム可ラズト雖  
モ若シ事實ノ發言ニ  
付キ前後ヲ操換スル  
ヲ得ト欲スルニ  
於テハ之ヲ改ムルコ  
ト得是其ノ特權ナリ  
一日順序ヲ定メタル  
後ト發言イヒ 檢察官  
雖モ發言ス 民事原告  
爲メ發言ス

百九十三條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ  
鑑定人ノ鑑定シタル事件ニ付キ説明ノ爲メ更ニ之ヲ呼出ス  
時ハ証人ニ付キ定メタル前數條ノ規則ニ從ヒ處分ス可  
シ  
第二百九十八條 被告人盛者啞者又ハ國語ニ通セサル者ナル  
時ハ第五百五十六條第五百五十七條ノ規則ニ從フ  
第二百九十九條 被告人數名アル時ハ裁判長其意見ヲ述ヘ且  
檢察官其他訴訟關係人ノ意見ヲ聽キ訊問ノ順序ヲ定ム可シ  
裁判長ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ職權ヲ以テ其  
順序ヲ變更スルコト得  
第三百條 證據 調濟ノ後檢察官民事原告人被告人其辨護人  
及ヒ民事擔當人ハ順次發言ス可シ  
檢察官其他訴訟關係人ノ陳述ハ他ヨリ妨礙スルコト得ス  
檢察官其他訴訟關係人ハ迭ヒニ辨論ヲ爲スコト得但辨論ノ  
最終ニハ被告人又ハ辨護人ヲシテ發言セシム可シ

人賠償要求ノ被告人  
爲メ發言ス 辨護人  
爲メ發言ス 民事  
辨護人 其負擔スル  
事擔當人 所ノ義務ヲ  
免カレントス 妨礙  
ル爲メ發言ス 妨礙  
マ 最終イチハ 拋棄  
ス 相當ノ裁判ヲ爲  
ル 相當ノ裁判ヲ爲  
スベシ 檢察官ニ於テ  
ノ事件ヲ拋棄シ復テ  
公判ヲ仰カザルニ至  
ルト雖モ裁判所ニ於  
テハ其儘之ヲ棄擲セ  
ズ相當ノ裁判ヲ爲シ  
之ヲ言渡ス可シコト  
公訴ノ私訴ニ異議ノ  
異ナル所以也 異議ノ  
申立證據差出ノ許否  
若クハ順序又ハ  
證人訊問ノ次第ニ付  
キ異議ヲ申立ルナリ

第三百一條 檢察官公訴ヲ拋棄スト雖モ裁判所ニ於テハ本案  
ニ付キ相當ノ裁判ヲ爲ス可シ  
第三百二條 辨論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ申立アリタル時  
ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ之ヲ判決ス可シ  
但其裁判ニ對スル控訴又ハ上告ハ本案ノ裁判言渡アリタル  
後ニ非サレハ之ヲ爲スコト得ス  
第三百三條 民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハズ何時ニテモ其訴  
訟ニ關係スルコト得  
又民事原告人ハ民事擔當人ヲシテ其訴訟ニ關係セシムルコ  
ト得  
若シ異議ノ申立アリタル時ハ其裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可  
シ其判決ニ對シテハ本案ノ裁判言渡ヲ待タズ直チニ控訴又  
ハ上告ヲ爲スコト得此場合ニ於テハ本案ノ辨論ヲ停止  
ス  
第三百四條 裁判所ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲スニハ事實及ヒ法律

民事擔當人 被害者要  
ナシタル時 被告入ニ  
代リ辨償スベキ義務  
アル  
刑ノ言渡云々 裁判ハ  
大ヲ以テ主旨トス故  
ニ刑ノ言渡及ヒ免訴  
ノ言渡ニハ細密漏ス  
ナク一讀了然タルヲ  
要ス故ニ事實ニ由テ  
其ノ理ヲ明ニシ法律  
ニ依リテ其ノ適用ヲ  
示シ罪跡ノ証憑ヲ明  
示ス 實事ガラ理由ケ  
明示ハツキリ一切ス  
テ証憑シヨ  
費用イリ擔當ヒキツ  
敗訴マケ  
敗訴マケ

ニ依リ其理由ヲ明示シ且一切ノ証憑ヲ明示ス可シ  
免訴ノ言渡ヲ爲スニ付テモ亦全シ  
第三百五條 無罪ノ言渡ヲ爲スニハ其理由トシテ被告人ニ對  
シ犯罪ノ証憑ナキコトヲ明示ス可シ  
第三百六條 裁判所ニ於テハ公訴ノ裁判ト全時ニ私訴ノ裁判  
言渡ヲ爲ス可シ  
私訴ニ付キ取調未タ充分ナラザル時ハ公訴ノ裁判アリタル  
後其裁判言渡ヲ爲スヲ得  
第三百七條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ裁判所ノ職權ヲ  
以テ公訴裁判費用ノ全部又ハ幾分ヲ擔當ス可キノ言渡ヲ爲  
ス可シ  
免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴裁判費用ハ官  
ニテ之ヲ擔當ス可シ  
私訴裁判費用ハ民事ノ規則ニ從ヒ敗訴シタル者之ヲ擔當ス  
ベシ

沒收トリア 還付カヘ  
請求マテシ 所有主  
逃亡ニケ  
現ニ捕ニ就クイマト  
訴訟關係人云々 故障  
ノ期限ハ三日トシタ  
ルヲ以テ變事即火災  
洪水地震等ニ際シテ  
ハ之ヲ經過スルコトモ  
アルベシ故ニ一ノ法  
ヲ設ク之ヲ經過シタ  
リトモ其ノ申立道理  
アルニ於テハ其ノ權

第三百八條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタルト否トテ問ハス沒收  
ニ係ラサル差押物品ハ所有主ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付ス  
ルノ言渡ヲ爲ス可シ  
第三百九條 本案ノ裁判言渡ニ對スル上訴ノ期限内又上訴ア  
リタル時ハ其判決アルマテ裁判執行ヲ停止ス  
第三百十條 禁錮以上ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡シタル時  
ハ現ニ捕ニ就クニ非ザレハ上訴ヲ爲スヲ得ス  
第三百十一條 勾留ヲ受ケタル者上訴ヲ爲シ又ハ保釋ヲ求ム  
ル時ハ其申立書ヲ監獄長ニ差出シ監獄長ヨリ之ヲ其裁判所  
ノ書記ニ差出ス可シ  
第三百十二條 訴訟關係人又ハ其代人非常ノ變災危難ニ因リ  
上訴期限ヲ經過シタル場合ニ於テ其旨ヲ證明シタル時ハ期  
限ヲ過經シタルニ因失ヒタル權利ヲ回復スルヲ得但變災  
厄難ヲ免カレタルヨリ通常ノ期限内ニ其證據ヲ申立書ニ添  
ヘ上訴ヲ爲ス可シ



利ヲ失フ 證明 コトヲ  
コトナシ 証明 コトヲ  
ハコトナシ 回復 トリ  
キラカニス 回復 トリ  
ス 通常ノ期限内 治罪  
法ニ定メラレタル  
レノ通常ノ期限  
ナ  
受理ス可キヤ否ヲ判  
決ス可シ 訴訟關係人  
果シテ變災難危ニカ  
ハリタルヤ又其過失  
ニ基クヤ否ヲ鑑定ス  
ルヲ要スレハナリ

第三百十三條 書記ハ速ニ前條ノ申立書ヲ對手人ニ送達ス可  
シ對手人ハ三日内ニ答辨書ヲ差出スヲ得  
上訴ヲ判決ス可キ裁判所ニ於テハ會議庭ニテ檢察官ノ意見  
ヲ聽キ先ツ其上訴ヲ受理ス可キヤ否ヤヲ判決ス可シ  
上訴ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時書記ヲシテ其旨ヲ訴訟  
關係人ニ通知セシメ通常ノ規則ニ從ヒ本案ノ裁判ヲ爲ス可  
シ  
上訴ヲ受理ス可カラザル者ト判決シタル時ハ他ノ理由アル  
ニ非サレハ即時ニ裁判執行ヲ爲サシム可シ  
第三百十四條 裁判言渡ハ辨論ヲ終リタル後公廷ニ於テ即時  
ニ之ヲ爲シ又ハ次日ニ之ヲ爲ス可シ  
裁判言渡書ハ其言渡前裁判官之ヲ作り書記ト共ニ署名捺印  
ス可シ  
裁判言渡書ニハ其言渡ヲ爲シタル裁判所年月日其事件ニ干  
預シタル檢察官ノ氏名ヲ記載ス可シ

干預  
タル  
ハル

費用 其用紙一  
枚金三錢  
下付 サケツ  
タス  
告知 ツケシ  
ラセ  
上訴期限ノ經過ヲ停  
止 控訴上告故障ヲナ  
スニハミナ期限ア  
レト告知又ハ記載ナ  
クレハイツマテモ上  
訴期限ノツ  
キヌ  
事由 傍聽ヲ禁シ 公行  
タルヲケ  
傍聽ヲ許シオホヤケ  
ニ裁判ヲトリ行フタ  
ル  
傍聽  
ザハ

第三百十五條 訴訟關係人ハ其費用ヲ以テ裁判言渡書ノ原本  
又ハ其拔書ヲ求ムルヲ得但上訴ノ爲メ其求ヲ爲シタル時  
ハ書記ヨリ二十四時内ニ之ヲ下付ス可シ  
第三百十六條 對審裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ裁判長  
ヨリ其言渡ヲ受ケタル者ニ前條ノ請求及ヒ其言渡ニ對シ控  
訴又ハ上告ヲ爲スヲ得可キヲ及ヒ其期限ヲ告知シ又闕席裁  
判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ  
得可キヲ及ヒ其期限ヲ言渡書ニ記載ス可シ  
若シ其告知又ハ記載ナキ時ハ通常ノ規則ニ從ヒ其告知アル  
マテ上訴期限ノ經過ヲ停止ス  
第三百十七條 書記ハ各事件ニ付キ各別ニ公判始末書ヲ作リ  
左ノ條件其他一切ノ訴訟手續ヲ記載ス可シ  
一 裁判ヲ公行シタルヲ又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡アリタルヲ  
及ヒ其事由  
二 被告人ノ訊問及ヒ其陳述

原被告  
原告人  
被告人

同一ノ裁判官云々同一ノ裁判官ナルト他ノ判事之レニ代リタルトヲ記入スレハ是其ノ判事ノ交代ニ因リ取調ノ手續ノ變革アラザリシヤヲ檢定スルニ供ス裁判官ノ交換ハ大關係アルモノナレハ

三証人鑑定人ノ陳述及ヒ宣誓ヲ爲シタルヲ若シ宣誓ヲ爲サル時ハ其事由  
四原被告ノ證據物件  
五辨論中異議ノ申立アリタルヲ後日ヲ期シテ申立ツ可キ事件ヲ申立タルヲ是等ノ事件ニ付キ檢察官其他訴訟關係人ノ意見及ヒ裁判所ノ判決  
六辨論ノ順序及ヒ被告人ヲシテ最終ニ發言セシメタルヲ  
第三百十八條 公判始末書ニハ前條ニ記載シタル條件ノ外言渡ヲ爲シタル裁判所年月日裁判長陪席判事檢察官及ヒ書記ノ氏名ヲ記載ス可シ  
辨論數日ニ涉ル時ハ其旨及ヒ同一ノ裁判官出席シタルヲ記載ス可シ  
辨論中豫備判事ヲシテ代ラシメタル時ハ其旨ヲ記載ス可シ  
檢察官及ヒ書記ニ付テモ亦同シ  
第三百十九條 公判始末書ハ裁判言渡ヨリ三日内ニ之ヲ整頓

第二章  
違警罪  
公判

シ整頓 トリソ 檢閱ラ  
ルベミ  
保存 タイセツニ  
認印 ミトメ  
受理 トリアケ  
サハク  
上等ノ裁判所 重罪裁  
罪裁判所  
等ヲ云フ  
呼出狀云々 呼出狀ハ  
等ナキ爲メ務メテ之  
ヲ明記セサルヘカラ  
ス故ニ氏名ヨリ代人  
ヲ出スモ 差支ナキマ  
デ記  
載ス

シ裁判長及ヒ書記署名捺印ス可シ  
裁判長ハ署名捺印セサル以前ニ公判始末書ヲ檢閱シ若シ意  
見アル時ハ其紙尾ニ記載ス可シ  
第三百二十條 裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ正本ハ其裁判所  
ノ書記局ニ保存ス可シ  
上訴アリタル時ハ裁判長及ヒ書記裁判言渡書及ヒ公判始末  
書ノ謄本ニ認印シ之ヲ上訴書類ニ添フ可シ  
第二章 違警罪公判  
第三百二十一條 違警罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴  
ヲ受理ス  
一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼  
出狀  
二 豫審判事又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ  
言渡  
第三百二十二條 呼出狀ニハ呼出ヲ受ク可キ者ノ氏名職業住

其呼出 證人

猶豫 ヲト

急速 イツ

對手 アヒ

訊問 セン 名刺 ナフ 證人 トシテ 其陳述ヲ 聽

所出廷ノ日時被告事件及ヒ代人ヲ出廷セシムルヲ得可  
キ旨ヲ記載ス可シ若被告事件ノ記載ナキ場合ニ於テ被告人  
未タ其證人ヲ呼出サル時ハ公廷ニテ其事件ノ告知ヲ受ケ  
タル後其呼出及ヒ辨議ノ爲メ二日ノ猶豫ヲ求ムルコトヲ  
得

第三百二十三條 呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日  
ノ猶豫アル可シ

第三百二十四條 違警罪裁判官ハ被告事件急速ヲ要スル時ハ  
公判ニ取掛ル前檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職  
權ヲ以テ對手人ノ立會ヲ要セスシテ檢證處分ヲ爲ス可  
得

第三百二十五條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少ク  
モ二十四時ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

又呼出ヲ受ケスシテ出廷シタル者ト雖モ訊問前其名刺ヲ書  
記ニ差出シタル時ハ裁判所ニ於テ證人トシテ其陳述ヲ聽ク

シヲ得 是レ其ノ簡

ニ裁判ヲ爲スノ方法  
ナリ訊問ニ取懸ル後  
ニ於テハ事實參考ノ  
爲ニ非サレバ其陳述  
ヲ聽ク

他ノ事件云々 勳モス  
參人ノアルモノナル  
ユハ容易ニ陪席裁判  
ヲナサスシテナルベ  
ク其ノ猶豫ヲナスノ  
旨趣

朗讀 ヲミ  
承認 シヨ  
被告 人白狀云々 違警

斷決スルハ速ナルヲ  
尙フ故ニ本人ノ白狀  
アリテ其ノ罪ニ服セ  
ハ之ヲ以テ足レト

ヲ得

第三百二十六條 書記ハ各事件毎ニ訴訟關係人ノ氏名ヲ呼立  
ツ可シ若シ其呼立ニ應セサル時ハ他ノ事件ノ裁判ヲ終リタ  
ル後其事件ヲ裁判ス可シ

第三百二十七條 違警罪裁判官ハ最初ニ被告人ノ氏名年齢身  
分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ

官吏ノ作リタル調書又ハ申立書アル時ハ書記之ヲ朗讀ス可  
シ檢察官ハ被告事件ヲ陳述ス可シ

第三百二十八條 違警罪裁判官ハ被告人ニ被告事件ヲ承認ス  
ルヤ否ヲ訊問ス可シ

若シ被告人代人ヲ以テ白狀ヲ爲ス時ハ其署名捺印シタル書  
面ヲ差出ス可シ

第三百二十九條 被告人ノ白狀アリタル時ハ他ノ證據ヲ差出  
スニ及ハス但裁判所ニ於テハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因  
リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ差出サシムルヲ得

ス

法律ノ適用 被告人ノ所爲ハ刑法ノ第何條ニテ罰スヘシト云フ

民事原告人 損害ノ要償ヲ請求スルモノ

若シ白狀ナキ時ハ原被ノ證人ヲ訊問シ其他證憑アル時ハ之ヲ差出ス可シ

第三百三十條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ 民事原告人ハ被害事件ヲ證明シ及ヒ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

被告人民事擔當人又ハ其代人ハ答辨ヲ爲ス可シ

第三百三十一條 呼出テ受ケタル被告人民事擔當人又ハ其代人出廷セサル時ハ檢察官及ヒ民事原告人ノ請求スル所ヲ聽キ 闕席裁判ヲ爲ス可シ 民事原告人出廷セサル時亦同シ

第三百三十二條 闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ闕席シタル者又ハ其住所ニ之ヲ送達ス可シ

闕席裁判ヲ受タル者故障ヲ爲サントスル時ハ言渡書ヲ送達アリタルヨリ三日内ニ其申立書ヲ書記局ニ差出ス可シ

第三百三十三條 裁判所ニ於テハ先ツ故障ノ申立ヲ受理ス可シ

故障申立云々 闕席シタル者

ヨリ故障ヲ申立タル者ハ先ツ其受シ可キヤ否ヲ判決シ受ク可キ者ナラハ書記ヨリ其ノ旨ト公判ニ爲ス可キ日時ハ前日ニ其申立人ニ報知シ着手スルヲ知ラシム

其裁判ニ闕席シタル者ハ故障ヲ爲スヲ得

故障ノ裁判ニ闕席シタル者ハ其申立人ナルト對手人ナルトヲ問ハス復ヒ故障ヲ爲スヲ許サス

キヤ否ヲ判決ス可シ若シ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記ヨリ故障アリタルコト及ヒ其事件ヲ公判ニ付ス可キ日時ヲ

故障ノ對手人ニ通知スル爲メ呼出狀ヲ送達ス可シ 但其送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

又公判ニ付ス可キ日時ヲ其前日ニ故障ノ申立人ニ報知ス可シ

第三百三十四條 故障ノ申立ヲ受理シタル場合ニ於テハ第三百二十六條ヨリ第三百三十條マテノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ

其裁判ニ闕席シタル者ハ故障ヲ爲スヲ得ス 第三百三十五條 犯罪ノ證憑充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百三十六條 被告事件違警罪ニシテ且證憑充分ナル時

法律刑

管轄違云々 管轄ヲ定  
ニ之ヲ侵犯セザルハ  
法律ノ原則ナリ故ニ  
管轄違ト決定スルニ  
於テハ速ニ之ヲ送附  
ス

豫納 マハカタ  
オサメル

擬律ノ錯誤例ハハ被  
告人ノ所

ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百三十七條 被告事件重罪又ハ輕罪ナル時ハ管轄違ノ言  
渡ヲ爲シ其事件ヲ輕罪裁判所檢事ニ送致ス可シ但被告人ニ  
對シ勾留狀ヲ發スルヲ得

第三百三十八條 違警罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ左ノ區  
別ニ從ヒ輕罪裁判所ニ控訴スルヲ得

▲參看 明治十四年九月第四拾五號布告

刑事裁判所ノ裁判言渡ニ對シ訴訟關係人ヨリ控訴又ハ上告ヲ  
爲ス者アルハ原裁判所ニ於テ其訴訟費用ノ金額ヲ算定シテ  
之ヲ豫納セシム可シ若シ豫納スルヲ能ハサルハ控訴又ハ上  
告ヲ爲スヲ許サス

一 被告人ハ拘留ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時

二 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡民  
事上治安裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時

三 檢察官其他訴訟關係人ハ上ニ記載シタル原由アラサル時

犯科料ヲ言渡スヘキ  
ニ拘留ノ刑ヲ言渡ス  
如キアヤ  
マリ

申立書 控訴ヲ爲ス  
旨ノ書面

對手人 アヒテ  
ニン

通知 シラ

猶豫 證人ハ一日ノ猶  
豫ヲ以テ其ノ用  
意ヲ爲メ證人ノ猶豫  
日限ノ半減ナレハ只

ト雖モ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無効ノ記載アル規則ニ  
背キタル時

第三百三十九條 控訴ヲ爲サントスル者ハ原裁判所書記局ニ  
其申立書ヲ差出ス可シ但其申立ノ期限ハ對審裁判ニ付テハ  
言渡ヨリ三日又闕席裁判ニ付キ故障アラサル時ハ本人又ハ  
其住所ニ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日內トス

控訴ヲ爲スノ申立アリタル時ハ書記ヨリ其旨ヲ對手人ニ通  
知ス可シ

第三百四十條 訴訟ニ關スル一切ノ書類ハ檢察官ヨリ控訴ヲ  
受ク可キ裁判所ノ書記局ニ之ヲ送達ス可シ

若シ檢察官控訴ノ申立人又ハ對手人ナル時ハ控訴ヲ受ク可  
キ裁判所ノ檢察官ニ其意見書ヲ差出ス可シ

第三百四十一條 控訴ヲ受ク可キ裁判所ニ於テハ書記局ヨリ  
訴訟關係人ニ對シ呼出狀ヲ發シタル後其裁判ニ取掛ル可  
シ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可

其ノ證據ヲ陳述スルニ止リ辨護等ノ豫備ヲ要セザルハナリ

附帶ノ控訴 第二百四十九條ニ

新ナル証人云々 新ナル証人又ハ已ニ陳述シタル証人ヲ更ニ呼出スルヲ禁シタルハ裁判ノ迅速ト費用ヲ節減セシメ

允許 認可 被告人ノミ 檢察官ノミ 裁判時ニ示スナリ

シ証人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百四十二條 控訴ノ對手人ハ其裁判言渡アルマテ何時ニテモ附帶ノ控訴ヲ爲スヲ得但附帶ノ控訴ハ公廷ニ於テ直チニ之ヲ申立ルヲ得

第三百四十三條 控訴ニ係ル事件ハ輕罪ノ裁判ヲ爲スニ付キ定メタル規則ニ從ヒ之ヲ裁判ス可シ 檢察官其他訴訟關係人ハ裁判長ノ允許ヲ得ルニ非サレハ新ナル証人又ハ始審ニ於テ陳述シタル証人ヲ呼出スヲ得ス

第三百四十四條 控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ原裁判言渡シヲ認可スルノ言渡ヲ爲シ又ハ之ヲ取消シ更ニ裁判言渡ヲ爲ス可シ 被告人ノミ 控訴ヲ爲シタル時ハ原裁判言渡ヨリ重キ刑ヲ言渡スヲ得ス

第三章 輕罪公判

終審ノ對審裁判言渡 始審ナルハ仍ホ控訴ヲ爲スノ途アリ又 闕席ナルハ仍ホ故障ヲ爲スノ途アリ終審對審ノ四字ニ着意スベシ

第三章 此ノ章ハ輕罪ノ刑ニ當ル者ト違警罪裁判言渡ニ對シテ控訴ヲ爲セシモノトテ裁判スルノ規則ヲ示ス

代人出廷 民事原告人ト民事擔當

私訴ニ付テノ控訴ノ裁判ハ通常民事ノ規則ニ從フ 第三百四十五條 第三百三十一條以下ノ規則ハ控訴ノ闕席裁判ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第三百四十六條 檢察官其他訴訟關係人ハ違警罪事件ノ終審ノ對審裁判言渡ニ對シテ上告ヲ爲スヲ得 違警罪即決例 第三章 輕罪公判

第三百四十七條 輕罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀

二 豫審判事輕罪裁判所會議局又ハ上等裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百四十八條 呼出狀ニ付テハ第三百二十二條第三百二十三條ノ規則ニ從フ

第三百四十九條 被告事件罰金ノ刑ニ該ル可キ時ハ代人ヲシ

人ハ法廷ニ於テ對決  
スルニ止ルヲ以テ代  
人ニテ足  
レリトス

豫審ヲ經ザル輕罪事

件其ノ公訴豫審ス可  
キモノナル時ハ裁  
判官ハ請求ヲ受ケ又  
ハ職權ヲ以テ檢閲處  
分ヲ爲スヲ得是レ其  
ノ違警罪ニ付キ急遽  
ヲ要スル時ノ方法ナ  
リ今之ヲ豫審ヲ經ザ  
ル輕罪ニモ適用ス第  
百七條第二參看ヲミ  
ルハ  
辨解  
ク  
エ  
ト

テ出廷セシムルヲ得可キ旨ヲ呼出狀ニ記載ス可シ  
民事原告人及ヒ民事擔當人ハ代人ヲ出廷セシムルコトヲ  
得

第三百五十條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ  
一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百五十一條 第三百二十四條ノ規則ハ豫審ヲ經サル輕罪  
事件ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十二條 檢察官ハ裁判長ヨリ被告人ノ氏名年齢職業  
住所及ヒ出生ノ地ヲ問ヒタル後被告事件ヲ陳述ス可シ民事  
原告人ハ被害者事件ヲ聲明ス可シ  
調書又ハ申立書アリタル時ハ書記ヲシテ之ヲ朗讀セシメ次  
ニ原被證人ノ陳述ヲ聽キ且證據物件ヲ被告人ニ示シ辨解ヲ  
爲サシム可シ

被告人及ヒ民事擔當人ハ答辨ヲ爲ス可シ  
第三百五十三條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ其意見ヲ陳述ス

可シ

民事原告人ハ要償ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

被告人及ヒ民事擔當人ハ更ニ答辨ヲ爲スヲ得

第三百五十四條 罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人又ハ第二百六十

九條ノ規則ニ從ヒ闕席裁判ヲ爲スヲ得可キ被告人其呼出

ノ日時ニ出廷セサル時ハ闕席裁判ヲ爲ス可シ

第三百五十五條 闕席裁判ニ關スル第三百三十一條ヨリ第三

百三十四條マテノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十六條 闕席裁判ニ因リ禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル

被告人ハ左ノ場合ヲ除クノ外刑ノ期滿免除ニ至ルマテ故障

ヲ爲スヲ得

一 被告人本案ノ裁判前豫ノ裁判ス可キ事件ヲ申立タル時

二 裁判言渡書ヲ本人ニ送達シタル時

三 被告人裁判執行ニ因リ刑ノ言渡アリタルヲ知リタルノ  
證アル時

更ニ答辨ヲ爲スヲ得  
得 檢察官ノ求刑其當  
告人ノ要求スル金額  
ヲ過分ナリトスルハ  
ハ更ニ答辨  
スルヲ得

一 被告人闕席ヲナス  
ノ前管轄違ノ言渡  
若クハ公訴受理ス可  
ラザルノ言渡アル可  
キノ申立ヲナシ聽許  
セラレズシテ退廷シ  
タルトノ如キ  
ヲ謂フナリ  
二 被告人未だ何等ノ  
申立ヲモナサズト

雖モ其ノ裁判言渡ヲ受取リタル日ヨリ三日内ニ故障ヲ爲スコト得ル

第一ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ第二第三ノ場合ニ於テハ言渡アリタルヲ知リタルヨリ三日内ニ故障ヲ爲スコト得

第三百五十七條 裁判所ニ於テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ新ナル證人ヲ呼出シ鑑定人ヲ命シ若クハ臨檢ヲ爲スコト得但是等ノ處分ヲ爲スニ付テハ第三編第三章ニ定メタル規則ニ從フ

又豫審ヲ經サル事件ニ付テハ豫審判事チノ其指示スル所ノ條件ニ付キ取調ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシムルヲ得

第三百五十八條 犯罪證據充分ナラサル時ハ裁判所ニ得テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

本條ノ場合ニ於テ被告人拘留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ

三例ハハ逮捕ヲ受ケ又ハ罰金ノ徵收ノ爲メ財産ノ差押ヲ受ケタルニヨリ刑ノ言渡アリタルヲ知リタル時ハ其ノ知リタル日ヨリ三日内ニ故障ヲ中立ルヲ得ル

放免 全ク公訴ヲ免シテ被告人ノ自由ヲ復スルナリ是レ違警罪ノ犯人ハ之ヲ勾留ス可ラス速時決斷ス可キモノトス故ニ其ノ勾留人ノ罪違警罪タルヲ知リタル日ハ之ヲ放免セサルヲ得ス

釋放 罪ノ問フ可キアルノ故ヲ以テ法律上其自由ヲ許サルニ因リ其勾留ヲ解クナリ

其裁判所ノ會議局 輕

裁判所ノ會議局ナリ會議局ハ第二百五十三條ノ規則ニ從フテ報告書ヲ作り故障アルニ於テハ第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ取調ヲ爲シタル上之ヲ管轄スル裁判所ニ言渡ヲ爲ス

管轄裁判所 重罪ナル裁判所違警罪ナル裁判所

第三百五十九條 被告事件違警罪ナル時ハ終審ノ裁判言渡ヲ爲シ且被告人拘留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百六十條 被告事件重罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ若シ豫審ヲ經サル時ハ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ但被告人拘留ヲ受ケタル時ハ拘引狀ヲ發ス可シ訴訟書類及ヒ證據物件ハ檢察官ヨリ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

第三百六十一條 被告事件豫審ヲ經タル時ハ之ヲ其裁判所ノ會議局ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

會議局ニ於テハ第二百五十三條第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ取調ヲ爲シ被告人ノ管轄裁判所ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百六十二條 會議局ノ言渡ニ因リ事件ヲ受理シタル場合ニ於テ新ナル證據ヲ發見スルコトナクシテ其事件ヲ重罪ナ

雖モ其ノ裁判言渡ヲ受取リタル日ヨリ三日内ニ故障ヲ爲スコト得ル

第一ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ第二第三ノ場合ニ於テハ言渡アリタルヲ知リタルヨリ三日内ニ故障ヲ爲スコト得

第三百五十七條 裁判所ニ於テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ新ナル證人ヲ呼出シ鑑定人ヲ命シ若クハ臨檢ヲ爲スコト得但是等ノ處分ヲ爲スニ付テハ第三編第三章ニ定メタル規則ニ從フ

又豫審ヲ經サル事件ニ付テハ豫審判事チノ其指示スル所ノ條件ニ付キ取調ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシムルヲ得

第三百五十八條 犯罪證據充分ナラサル時ハ裁判所ニ得テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

本條ノ場合ニ於テ被告人拘留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ



發見  
ダス

判決アルマテ云々ノ  
未タ判決セザル者ハ  
罪人ヲ以テ視ル可ラ  
ズ故ニ之ヲ保釋メ其  
家ニ放歸セシム尙ホ  
本條ノ如キハ未ダ犯  
罪ノ性質ヲ全具セザ  
ルモノナレハ之  
ヲ保釋スルヲ得

當然  
アタリ

一 被告人ヲ無罪免訴  
刑ノ言渡ヲナシ又ハ  
時檢事ヨリ控訴ヲナ  
スコトヲ得  
ルナリ

リトスル時ハ管轄  
檢事ハ大審院ニ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可シ

第三百六十三條 前二條ノ場合ニ於テハ會議局又ハ大審院ノ  
判決アルマテ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ

被告人ヲ其裁判所ノ監倉ニ留置スルノ言渡ヲ爲スコトヲ得  
又第二百十條以下ノ規則ニ從ヒ保釋ニ付キ判決ヲ爲コトヲ得

第三百六十四條 被告事件輕罪ニシテ且證據充分ナル時ハ  
法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

被告人禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ當然保釋責付ヲ取消  
シタル者トス但上訴中更ニ保釋ヲ求ムルコトヲ得

第三百六十五條 檢察官其他訴訟關係人ハ左ノ區別ニ從カヒ  
輕罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シ控訴裁判所ニ控訴スルコトヲ得

△(明治十八年一月太政官第二號布告輕罪控訴規則與ニアリ)  
一 檢察官ハ無罪免訴又ハ刑ノ言渡アリタル時但違警罪事件

トシテ言渡有タル場合ニ於テハ其事件ヲ輕罪ナリトスル

二 違警罪ノ裁判ヲ輕  
罪裁判所ニ於テ之  
ヲ爲ス時ハ控訴ス可  
カラザル原則ナルヲ  
以テ之ヲ除クノ外刑  
ノ言渡アリタル時ハ  
被告人之ヲ  
爲スヲ得  
金額キテ超過多分ニ  
金額ノ超過ナルヲ  
擬律ノ錯誤違警罪ヲ  
ス等ノ如キ刑  
ノ適用チガヒ

被告人勾留ヲ受ケタ  
ル時禁錮ノ刑ノ言渡  
ヲ受ケタル時

時

二 被告人ハ違警罪ニ付テノ言渡ヲ除クノ外刑ノ言渡ヲ受ケ  
タル時

三 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡民  
事上始審裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時

四 檢察官其他訴訟關係人ハ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無  
効ノ記載アル規則ニ背キタル時

第三百六十六條 控訴ハ裁判言渡アリタルヨリ五日內ニ之ヲ  
爲スコトヲ得

關席裁判ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテ  
モ故障ヲ爲サスシテ直チニ控訴ヲ爲スコトヲ得但第三百五十

六條ノ場合ニ於テハ五日內ニ之ヲ爲ス可シ

第三百六十七條 控訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴アリタル場合ニ  
於テ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ檢察官ヨリ之ヲ控訴裁判所

ノ監倉ニ移ス可シ

第四章 重罪公判

第四章 此ノ章ノ重罪ハ刑法第二章ノ重罪外(刑法第二章ノ重罪ハ高等法院ニテ裁判ス)重罪ニ該ル可キモノヲ裁判スル手續中ヲ示スナリ

第三百六十八條 第三百三十九條ヨリ第三百四十二條マテ及第三百四十四條ノ規則ハ此章ニモ亦之レヲ適用ス  
第三百六十九條 輕罪裁判所檢事ノ控訴又ハ檢事長ノ附帶ノ控訴アリタル場合ニ於テ被告事件ヲ重罪ナリトスル時ハ第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ會議局ニ於テ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ  
第三百七十條 控訴ノ開席裁判及ヒ其故障ニ付テハ始審ノ開席裁判及ヒ其故障ニ付キ定メタル規則ニ從テ  
第三百七十一條 檢察官其他訴訟關係人ハ輕罪裁判所ノ終審ノ對審裁判言渡及ヒ控訴裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲ス可シ得  
▲明治十四年九月第四十五號布告(第三百三十八條參看)  
第四章 重罪公判  
第三百七十二條 重罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時豫終結ノ言渡ニ付キ一日ヲ經過シテ故障ナサハル時又其故障アリタル時若クハ第三百六十一條第三百六十九條ノ場合ニ付キ會議局ノ言渡アリテ上告期限三日ヲ經過シタルハ大審院ニ於テ其上告ヲ却ケタル時及ヒ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ニ付キ大審院ノ判決アリタル時即チ是ナリ  
集取 ツメル

一 豫審判事又ハ輕罪裁判所會議局ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡  
二 控訴裁判所又ハ大審院ノ判決ニ因リ其ノ事件ヲ移スノ言渡  
第三百七十三條 重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ左ノ區別ニ從ヒ公訴狀ヲ作ル可シ  
控訴裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作ル可シ  
始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作リ又ハ重罪裁判所檢事官ノ職務ヲ行フ可キ檢事ヲシテ之ヲ作ラシム可シ  
第三百七十四條 公訴ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ  
一 被告事件ノ始末及ヒ加重減輕ノ模様  
二 被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地  
三 豫審ニ於テ集取シタル原被ノ證據

四罪名法律ノ正條及ヒ重罪裁判所ニ移スノ言渡ノ概略

第三百七十五條 公訴狀ニハ重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ記載シタルヨリ以外ノ事件又ハ被告人ヲ記載ス可カラズ

第三百七十六條 重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ同一ノ被告人ニ對シテ附帶ニ非サル數個ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ檢察官ハ各別ニ公訴狀ヲ作りタル上ニテ各別ニ辨論ヲ爲ス

裁判所長ニ請求スルヲ得

裁判所長ハ同一ノ公訴狀ニ附帶ニ非サル數個ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ其職權ヲ以テ各別ニ辨論ヲ爲サシムルヲ得又數個ノ公訴狀ニ記載シタル事件ニ付キ同時ニ辨論ヲ爲サシムルヲ得

第三百七十七條 書記ハ被告人出廷ヨリ少クモ五日前ニ公訴狀ノ謄本ヲ被告人ニ送達ス可シ

被告人數名アル時ハ各別ニ其謄本ヲ送達ス可シ

第三百七十八條 重罪裁判所長又ハ其委任ヲ受ケタル陪席判

事ハ公訴狀ノ送達アリタルヨリ二十四時ノ後書記ノ立會ニ依リ被告事件ニ付キ被告人ヲ訊問シ且辨護人ヲ選任シタリ

若シ辨護人ヲ選任セサル時ハ裁判所長ノ職權ヲ以テ其裁判所々屬ノ代官人中ヨリ選任ス可シ

被告人及ヒ代官人ヨリ異議ノ申立ナキ時ハ代官人一名ヲシテ被告人數名ノ辨護ヲ爲サシムルヲ得

辨護人ヲ選任シタルヨリ三日ノ後ニ非サレハ辨論ニ取掛ル

一ヲ得ス

第三百七十九條 辨護人差支アル時若クハ被告人ヨリコレヲ改選ス可正當ノ事由ヲ申立タル時被告人自ラ辨護人ヲ選任スルニ非サレハ前條ノ規則ニ從ヒ裁判所長ヨリ之ヲ選任ス可シ但辨護人ヲ改選シタル時ハ三日間辨論ヲ停止ス可シ

第三百八十條 書記ハ第三百七十八條ノ場合ニ於テ訊問ノ調

概略 アラ  
以外 カ  
同一ノ被告人云々一  
告人ニシテ附帶ニ非  
ザル數個ノ重罪アル  
トキ之レヲ集合シテ  
一ノ公訴狀ニ記スル  
ハ大ニ錯雜ノ恐レ  
アリ故ニ檢察長一罪  
毎ニ一公訴狀ヲ認メ  
數通ノ公訴狀ヲ作リ  
テ每件順序ニ辨論ヒ  
ンフテ裁判長ニ請求  
スルヲ得  
得ルナリ

送達アリタルヨリ二  
十四時ノ後被告人カ  
クタル時ヨリ選任エラ  
リ起算ス 選任エラ  
カ所屬フ  
辨護人撰任云々 被告  
用ノ堪ユベカラザル  
ナドヨリシテ自ラ辨  
護人ヲ撰任スルヲ能  
ハサル時ニハ裁判所  
ノ費ニテ所屬代官人  
中ヨリ選任シテ辨護  
人ヲ附スヘ  
改選 アラヨニ 辨護人  
改選 エラブ  
改選スヘキ正當事由  
其ノ辨護陳述スル所  
被告人ノ意ニ適セサ  
ル場

事ハ公訴狀ノ送達アリタルヨリ二十四時ノ後書記ノ立會ニ依リ被告事件ニ付キ被告人ヲ訊問シ且辨護人ヲ選任シタリ

若シ辨護人ヲ選任セサル時ハ裁判所長ノ職權ヲ以テ其裁判所々屬ノ代官人中ヨリ選任ス可シ

被告人及ヒ代官人ヨリ異議ノ申立ナキ時ハ代官人一名ヲシテ被告人數名ノ辨護ヲ爲サシムルヲ得

辨護人ヲ選任シタルヨリ三日ノ後ニ非サレハ辨論ニ取掛ル

一ヲ得ス

第三百七十九條 辨護人差支アル時若クハ被告人ヨリコレヲ改選ス可正當ノ事由ヲ申立タル時被告人自ラ辨護人ヲ選任スルニ非サレハ前條ノ規則ニ從ヒ裁判所長ヨリ之ヲ選任ス可シ但辨護人ヲ改選シタル時ハ三日間辨論ヲ停止ス可シ

第三百八十條 書記ハ第三百七十八條ノ場合ニ於テ訊問ノ調

合

履行ヲミオ  
コナフ

刑ノ言渡 辯護人ハ被  
告人ノ爲メ  
其ノ無罪ヲ説明シ其  
ノ權利ヲ保護スルモ  
ノニシテ重罪公判ニ  
必ス之レ無カル可カ  
ラス若シ之レ無クシ  
テ刑ノ言渡アリタル  
時ハ無効ノ  
モノトス

辯論ニ取掛前ニ非ラ  
サレハ 己ニ辯論ニ取  
掛リタル上ハ  
被告人自ラ其便益ヲ  
棄ルモノトスベク又  
本案ノ辯論ヲナス豫  
備既ニ整フテ差支ナ  
キヨリセシモノト見  
做シ得可キカ故ナリ  
抄寫カキ接見面會ス  
ルヲ

書ヲ作り辯護人ヲ選任スルニ付キ其式ヲ履行シタルヲ記  
載ス可シ

辯論中辯護人ヲ改選シ及ヒ辯論ヲ停止シタル時ハ公判公末  
書ニ其旨ヲ記載ス可シ

第三百八十一條 辯護人ナクシテ辯論ヲ爲シタル時ハ刑ノ言  
渡ノ効ナカル可シ

第三百七十七條ヨリ第三百七十九條マテノ規則ニ背キタル  
ヲアリト雖モ辯論ニ取掛ル前ニ非サレハ被告人ヨリ異議ノ  
申立ヲ爲スヲ得ス

第三百八十二條 辯護人ハ第三百七十八條ノ處分アリタル後  
被告人ト接見スルヲ得

又書記局ニ於テ一切ノ訴訟書類ヲ閱讀シ且之ヲ抄寫スルヲ  
得

辯護人ヲ除クノ外何人ト雖モ重罪裁判所ニ移スノ言渡アリ  
タルヨリ裁判言渡アルマテ被告人ト接見スルヲ得ス但被

閱讀

允許  
キハト  
ドク

開廷  
其事ニトリ  
カハルヲ

証人氏名云々 原告被  
告相互  
ニ其ノ証人ノ氏名人  
數ヲ報告スルハ其ノ  
人名ヲ看テ之ヲ避ケ  
シメ又ハ故障ヲ申立  
ルヲ得ル規則アリ  
ルヲ以テナリ

証人トシテ 宣誓  
ノ上

公廷  
シテ 面前  
マヘ

告人現ニ勾留ヲ受タル地ノ裁判所長ノ允許ヲ得タル時ハ此  
限ニ在ラス

第三百八十三條 檢察官及ヒ民事原告人ノ請求ニ因呼出シ  
ル 証人ノ氏名目録ハ開廷ヨリ一日前之ヲ被告人ニ送達ス可  
シ

被告人ノ請求ニ因リ呼出シタル 証人ノ氏名目録ハ同上ノ期  
限内ニ書記ヨリ之ヲ檢察官ニ送致シ民事ニ付キ呼出シタル  
証人ノ氏名目録ハ之ヲ民事原告人ニ送達ス可シ

第三百八十四條 前條ノ規則ニ從ヒ 豫メ氏名ヲ通知セサル  
証人ノ陳述ハ事實參考ノ爲メニ非サレハ之ヲ聽クヲ得ス  
但對手人ヨリ異議ヲキコフヲ申立タル時ハ証人トシテ其陳述  
ヲ聽クヲ得

第三百八十五條 証人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少ク  
モ二日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百八十六條 裁判長ハ開庭ノ日ニ當リ公廷ニ於テ陪席判



對質 ツキアハセ  
 前項ノ處分 更ニ證人  
 ルヲ又對質ス 愛憎  
 スルヲ取計ヒ 罪ヲ輕ク  
 セント思ヒニクム  
 メニ罪ヲ重ク 畏懼  
 セント思フハ 他日被害  
 人ノ害ヲナサシムコト  
 ヲオモフニシテ 退席  
 ソル 終結  
 辯論中發見 罪犯ノ原  
 ニ於テ之ヲ詳悉スル  
 モノナリト雖 事件  
 ノ繁雜紛擾ナル時 或  
 ハ之ヲ粗漏ニシテ 却  
 テ法廷辯論ノ間ニ於  
 テ之ヲ得ルコト 往々  
 リ以テ裁判ヲ審  
 定スル可シ得テ

得  
 裁判長ハ職權ヲ以テ前項ノ處分ヲ爲ス可シ得  
 第三百九十五條 裁判長ハ證人愛憎畏懼ノ念ヲ生シ 被告人ノ  
 面前ニ於テ充分ナル陳述ヲ爲ス可シ得サル可シト 思料シタ  
 ル時ハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其證  
 人ノ陳述中被告人ヲ退席セシムルヲ得  
 裁判長ハ證人陳述ヲ終リタル後再ヒ被告人ヲ公廷ニ呼入レ  
 其陳述シタル條件ヲ告知シ且被告人ノ意見アル時ハ之ヲ申  
 立シム可シ  
 第三百九十六條 裁判長ハ第三百條ニ定メタル手續ノ終リタ  
 ル後公訴ニ付キ辯論ノ終結シタルコトヲ言渡ス可シ  
 第三百九十七條 檢察官及ヒ被告人ハ辯論中ニ發見シタル條  
 件ニ付キ豫審ヲ求ムルコトヲ得裁判所ニ於テ其請求ヲ認可シ  
 タル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫  
 審ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシム可シ

法律適用ノ爲メ其意  
 見ヲ陳述ス 被告人ノ  
 第何條ノ罪ニシテ何條  
 ノ刑ニ該ル者ナリト  
 ノ意見ヲ陳  
 述スルナリ  
 閉廳前 重罪裁判所ハ  
 常ニ之ヲ開カ  
 ザルヲ以  
 テナリ

第三百五十七條 第一項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス  
 第三百九十八條 辯論終結ノ言渡アリタル時ハ檢察官法律適  
 用ノ爲メ其意見ヲ陳述ス可シ  
 被告人及ヒ辯護人ハ檢察官ノ意見其當ヲ得サルコトヲ辯論ス  
 ルヲ得  
 第三百九十九條 前條ノ辯論ヲ終リタル後民事原告人ハ私訴  
 ニ付キ其請求スル所ヲ陳述ス可シ原告人辯護人及ヒ民事擔  
 當人ハ答辨ヲ爲ス可シ得  
 檢察官ハ私訴ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ  
 裁判所ニ於テハ私訴ノ辯論ヲ延期スルコトヲ得但閉廳前之ヲ  
 判決ス可シ  
 第四百條 被告事件重罪ニシテ且證據充分ナル時ハ法律ニ  
 從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ  
 又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免許ノ言渡ヲ爲  
 シ且被告人ヲ放免ス可シ



第五編 大審院ノ職務第一章

大審院職務 大審院ハ最上等ノ裁判所ニシテ法律ノ要旨ヲ解釋シ法律ノ適用ヲシテ日本全國ニシテ其職務重且ツ大ナリ

上告 豫審又ハ公判ノ言渡シ法律ニ背キ定規ニ違フ者アル場合ニ於テ其言渡ヲ取消サレンコトヲ大審院ヘ請求スル

モノナリ

一 第二百三十七條第一 第二百卅八條第二 第七十九條ニ定メタル原由アルコトヲ照ラシテ忌避ノ申立ヲ爲ス

モ會議局ニ於テ之ヲ認可セ

二 重罪ハ裁判ザル時ニ官五名ニテ裁判シ

三 爲シ輕罪ノ控訴ハ三名以上ニテ判

テ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ

第四百九條 關席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所閉廳ノ後ハ其地ヲ管轄スル控訴裁判所ニ故障ノ申立ヲ爲ス可シ

控訴裁判所ニ於テ其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ重罪裁判所ノ裁判ヲ受ク可キノ言渡ヲ爲ス可シ

第五編 大審院ノ職務

第一章 上告

第四百十條 檢察官及ヒ被告人ハ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ左ノ場合ニ於テ上告ヲ爲スコトヲ得

▲參看 明治十四年九月第四拾五號布告(第三百三十八條參看)

一 法律ニ背キ忌避ノ申立ヲ認可セサル時

二 裁判所ノ構成規則ニ背キタル時

三 法律ニ背キ管轄違又ハ管轄ナリトノ言渡若クハ管轄ニ非

決シナス等ノ規則ニ背シト又ハ四十七條ノ規則ニ背キタル時モ亦構成不規則ナルトス

四 條第二百六十三條第一條ハ或ハ裁判言渡ヲ公行セサルニヨリ無効ニ屬シ或ハ辨護人ナクシテ重罪ノ刑ヲ言渡シタルハ無効ニ屬スルコトヲ云フナリ

此ノ規則ハ實ニ緊要欲ク可カラザルモノニシテ之レニ背キタルハ異議ノ申立ヲ爲スヲ得ベキモノナリ

此ノ異議ヲ申立タルニモ關ハラズ之レヲ認可セザルハ上告ヲ爲スヲ得無効ベキモノナリ

ノ記載ナキ規則ニ背キタル云々 例ハ第三百條ノ

ザル裁判所ニ事件ヲ移スノ言渡アリタル時

四 法律ニ於テ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時又ハ無効ノ記載ナキ規則ニ背キタルニ因リ異議ノ申立アリタル場合ニ於テ之ヲ認可セザル時

五 法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサル得

六 法律ニ定メタル場合ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽カサル時

七 裁判所ニ於テ請求ヲ受ケタル事件ニ付申判決ヲ爲サズ又ハ職權ヲ以テ判決スルコトヲ得可キ場合ヲ除クノ外請求ヲ受ケサル事件ニ付申判決ヲ爲シタル時

八 裁判言渡ヲ公行セス又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡ナクシテ訊問及ヒ辨論ヲ公行セサル時

九 事實及ヒ法律ニ依リ言渡ノ理由ヲ付セス又ハ其理由ノ齟齬アル時

十 擬律ノ錯誤アル時

十一 越權ノ處分アル時



規則ニ背キ被告ノ人ヲ  
 シテ最終ニ發言セシ  
 ヲザルニ因リ其被告  
 人異議ノ申立ヲ爲ス  
 モ之ヲ認可セシメテ  
 裁判官ニ爲スノ類  
 五期滿免除大赦若ク  
 ハ確定裁判ノ効力  
 ナ得タル事件ニ關ス  
 ル公訴ヲ受理シ又ハ  
 是等ノ事情ノ一ナキ  
 場合ヲ誤リテアリト  
 シテ公訴ヲ受理セザ  
 リシガ如キモノトス  
 六第百二十八條第百  
 七十六條第百八十  
 三條第百九十四條第  
 二百二十條第百二十  
 五條第百九十三條  
 第百三十二條等ニ定  
 メタル場合ニ於テ檢  
 察官ノ意見ヲ聽カサ  
 ル七訴訟關係人ノ請  
 求アルハ裁判官ノ任  
 ナリ又請求ナキニ之

第四百十一條 免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テハ被  
 告人ノ利益ノ爲メ定メタル規則ニ背キタルコト又ハ犯罪ノ場  
 所ニ因リ管轄違アリト雖モ上告ヲ爲スコトヲ得ス  
 第四百十二條 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ニ關  
 スル豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ第四百十二條ニ定メタル原  
 由ニ付上告ヲ爲スコトヲ得  
 第四百十三條 上告ノ對手人ハ大審院ノ判決アルマテ何時ニ  
 テモ附帶ノ上告ヲ爲スコトヲ得  
 大審院檢事長モ亦附帶ノ上告ヲ爲スコトヲ得  
 第四百十四條 上告ノ期限ハ三日ナリトス但豫審ニ付テハ言  
 渡書ノ送達アリタルヨリ起算シ公判ニ付テハ言渡アリタル  
 ヨリ起算ス  
 第四百十五條 豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上告アリタル時ハ  
 勾留保釋責付釋放及放免ノ言渡ヲ除クノ外其執行ヲ停止  
 ス

ヲ判決スルハ禁スル  
 所ナリ然ルニ之ニ反  
 シタル處分アル時但  
 シ職權ヲ以テ判決シ  
 得條項九第百二十  
 三條第百八條及第  
 三百四條ニ於テ定ム  
 ル如ク裁判官ニハ  
 必事實并ニ法律ノ  
 理由ヲ欲クテ得ス  
 豫シテ人ヲ殺スノ意  
 ナリテ詐稱誘導シテ  
 人ヲ死ニ致シタル者  
 アランニ刑法第百  
 九十七條及ヒ刑法第  
 二百九十二條即チ謀  
 殺ヲ以テ論ス可キニ  
 却テ刑法第百九十九  
 條故殺ヲ以テ論シ  
 ヲルガ如キコトナリ  
 十一禁錮ノ刑ニ該ラ  
 サル場合ニ於テ自由  
 ナ停止ス可キ令狀ヲ  
 發シタルカ又ハ勾留  
 ノ期日成規ニ過クル

第四百十六條 上告ヲ爲サントスル者ハ其申立書ヲ原裁判所  
 ノ書記局ニ差出ス可シ  
 上告ノ申立書ハ其申立アリタルヨリ二十四時内ニ書記ヨリ  
 之ヲ對手人ニ送達ス可シ  
 第四百十七條 上告申立人ハ其申立ヲ爲シタルヨリ五日內ニ  
 趣意書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ  
 書記ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ對手  
 人ニ送達ス可シ  
 第四百十八條 對手人ハ上告趣意書ヲ受取タルヨリ五日內ニ  
 答辨書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ  
 書記ハ其答辨書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ上告申  
 立人ニ送達ス可シ  
 第四百十九條 檢察官ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辨書  
 ハ二通ヲ作り一通ヲ大審院ニ差出シ一通ヲ對手人ニ送達ス  
 可シ私訴ノ裁判官渡ニ對シ訴訟關係人ヨリ差出ス可キ上告

カ又ハ現行犯ノ場合ニアラヌシテ豫審判事ヲ待タズシテ豫審處分ニ取掛リタルカ如ク被告人ノ利益ノ爲メニ定メタル規則ニ背ク言渡ハ被告人ノ利益トナルモノ故假令其他ニ被告人ノ利益ヲ目的トシテ定メタル少條アリテコレニ背クコトアリトモ已ニ無罪免訴ノ言渡アレハ爲メニ消滅ノ場所ニ因リ管轄スル裁判所ノ相違アリトモ是亦消滅シ上告スル能ハザルモノナリ重罪ノ被告人辯護人ナクシテ裁判官言渡サレ又ハ被告人最終ノ辨論ヲ爲サンコト

趣意書又ハ答辨書ニ付テモ亦同シ

第四百二十條 書記ハ前數條ニ定メタル期限經過シタル後速ニ訴訟書類及ヒ上告書類ヲ其ノ裁判所ノ檢察官ニ差出ス可シ

檢察官ハ其書類ヲ五日內ニ大審院檢察長ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ添フ可シ

檢察長ハ上告事件ヲ刑事局ノ簿冊ニ登記ス可キコト院長ニ請求ス可シ

第四百二十一條 上告申立人及ヒ對手人ハ代言人ヲ差出ス可キ得

重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲シ又ハ檢察官ヨリ重罪ノ刑ニ該ル可キ者トシテ上告ヲ爲シタル場合ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケタル者自ラ代言人ヲ選任セサル時ハ院長ノ職權ヲ以テ其院所屬ノ代言人中ヨリ之ヲ選任ス可シ

第四百二十二條 院長ハ刑事局判事中心ニ專任判事一名ヲ命

トテ許サレヌシテ裁判官言渡サレタル場合等ヲ附帶ノ上告ニイフ

四十九條 二詳ナリ

經過スル簿冊ヲヤウ

登記カキノ

上告申立人及ヒ對手人被告人民事原告人又ハ民事擔當人ヲ云フ檢察官ハ其中ニ含蓄セズ

專任判事モチ

檢閱シテ自己シテ經由手ヲ擴張オシヒシユニテヤ

ウスル

專任判事ハ一切ノ書類ヲ檢閲シ其報告書ヲ作ル可シ但自己ノ意ヲ付ス可カラヌ

第四百二十三條 上告申立書及ヒ對手人ハ專任判事ノ報告書ヲ差出スマテハ大審院書記局ヲ經由シテ其趣意ヲ擴張ス可キ辨明書ヲ差出ス可キ得

專任判事報告書ヲ差出シタル後辨明書ヲ差出シタル時ハ之ヲ報告書ニ添フ可シ

第四百二十四條 書記ハ開廷ヨリ三日前ニ開廷ノ日時ヲ上告申立人及ヒ對手人ノ代言人ニ報知ス可シ

第四百二十四條 開廷ノ日ニハ公廷ニ於テ專任判事其報告書ヲ朗讀ス可シ

檢察長及ヒ代言人ハ各其趣意ヲ辨明ス可シ

私訴ノ上告ニ付テハ檢察長最終ニ其意見ヲ述陳ス可シ

第四百二十六條 上告申立人又ハ對手人ヨリ代言人ヲ差出サ

辨明書 イヒワケノ  
 檢察官上告申  
 代理人 刑ノ言渡ヲ受  
 棄却 トリア  
 上告ニ付キ云々ノ事  
 第四百十條ナル原由  
 アリテ其ノ言渡ノ何  
 幾部分ニテモ又ハ全  
 部ニテモ破棄スヘキ  
 モノトスルハ其ノ  
 事件ヲ他ノ裁判所ニ  
 移スノ言渡ヲ爲スヘ  
 シト雖モ次ノ條々ニ  
 載セタル例外ノモノ  
 ハ此限ニアラズ  
 破毀 トリ  
 破毀 ケシ  
 其後ノ手續ニ利害ヲ  
 及ホサ、ル時例ヘハ  
 豫審ニ

、ル時ハ其儘ニテ判決ヲ爲スヘシ  
 第四百二十七條 大審院ニ於テ上告ノ理由ナシトスル時ハ之  
 棄却スルノ言渡ヲ爲ス可シ  
 第四百二十八條 大審院ニ於テ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對スル  
 上告ニ付キ破毀ノ原由アリトスル時ハ其言渡ノ全部ヲ破毀  
 シ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ但後ノ數條  
 ニ記載シタル場合ハ此限ニ在ラス  
 第四百二十九條 擬律ノ錯誤若クハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シ  
 又ハ受理セサルコトニ因リ原裁判言渡ヲ破毀シタルトキハ其  
 事件ヲ移スコトナク大審院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス可シ  
 第四百三十條 豫審又ハ公判ノ手續規則ニ背キタルコトアリト  
 雖モ其後ノ手續ニ利害ヲ及ホサ、ル時ハ其事件ヲ他ノ裁判  
 所ニ移スコトナク止メ其手續ヲ破毀ス可シ  
 第四百三十一條 豫審又ハ公判ノ言渡ノ幾分ニ對シ上告アリ  
 タル場合ニ於テ他ノ部分ニ關係アラサル時ハ大審院ニ於テ

於テ檢証處分ヲ爲ス  
 ニ當リ書記ヲ立會ハ  
 シテザリシニ竟ニ證  
 憑ヲ發見セザリシ場  
 合公判ニ於テ被告ハ  
 ヲリ裁判官ヲ忌避ス  
 ト雖モ法律ニ背キ其  
 申立ヲ認可セズ然ル  
 モ其裁判官直チニ自  
 ラ回避シタル等ノ場  
 合等ニ言渡ノ幾分ニ  
 對シ上告アリタル場  
 合豫審又ハ公判ニ於  
 テ其犯又ハ數罪ヲ  
 合セテ一箇ノ言渡ヲ  
 爲シタル場合ニ於テ  
 其言渡ノ幾分ニ爲シ  
 上告スルモノアル時  
 他ノ裁判所 原裁判所  
 判所ナルハ重罪裁  
 判所ハ常立ニ非サル  
 ヲ以テ他ノ裁判所ヲ  
 シテ執行セシメザル

其上告ニ係ル部分ヲ破毀シ法律ニ從ヒ直チニ相當ノ裁判言  
 渡ヲ爲シ又ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス可シ  
 第四百三十二條 大審院ニ於テ原裁判言渡ヲ破毀シ直チニ裁  
 判言渡ヲ爲シタル時ハ原裁判所又ハ他ノ裁判所ヲシテ其執  
 行ヲ爲サシム可シ  
 第四百三十三條 大審院ニ於テ破毀シタル事件ヲ他ノ裁判所  
 ニ移スノ言渡ヲ爲ス可キ時ハ原裁判所ニ接近シタル同等ノ  
 裁判所ヲ定示ス可シ其單ニ私訴ニ係ル事件ハ之ヲ民事裁判  
 所ニ移ス可シ  
 第四百三十四條 法律ニ係ル大審院ノ判決ハ確定ノ者トス  
 大審院ヨリ送付ヲ受ケタル裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ通  
 常ノ規則ニ從ヒ更ニ上告ヲ爲スコト得  
 第四百三十五條 法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シ  
 又ハ相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタル場合ニ於テ定期内ニ  
 上訴スル者ナクシテ其裁判言渡確定シタル時ハ大審院檢事

ヲ得 接近モヨ 同等ノ  
 裁判所 原裁判所控訴  
 他ノ控訴裁判所ナレ  
 示シ重罪裁判所ナレ  
 ハ他ノ重罪裁判所裁  
 示定示スルナリ  
 判官渡 即チ法律ノ罰  
 リトスルハ無罪ノ  
 言渡ヲ爲シ原裁判ニ  
 テ過重ノ刑ヲ言渡タ  
 リトスル時ハ改テ相  
 當ノ刑ヲ言 哀訴 大審  
 渡ス者トス 院ノ  
 判決若シ法式ニ合ハ  
 ス又ハ判決ニ錯誤ア  
 リタルハ尚ホ覆  
 審ヲ乞フテ云フ

長ヨリ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ非常上  
 告ヲ爲スヲ得  
 非常上告アリタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ大審院ニ於テ直  
 ナニ裁判言渡ヲ爲ス可シ  
 第四百三十六條 左ノ場合ニ於テハ大審院ノ裁判言渡ニ對シ  
 檢事長其他訴訟關係人ヨリ其院ニ哀訴スルヲ得  
 一 大審院ニ於テ前數條ニ定メタル式ヲ履行セサル時  
 二 訴訟關係人ヨリ申立タル條件ニ付キ判決ヲ爲ササル時  
 三 同一ノ裁判言渡ニ付キ二箇ノ條件相離シタル時  
 第四百三十七條 哀訴ヲ爲サントスル者ハ裁判言渡アリタル  
 日ヨリ三日内ニ書記局ニ其申立ヲ爲ス可シ  
 書記ハ申立書ヲ受取リタルヨリ三日内ニ之ヲ對手人ニ送達  
 シ對手人ハ同一ノ期限内ニ其答辭書ヲ差出ス可シ  
 大審院ニ於テハ通常上告ノ規則ニ從ヒ哀訴ノ判決ヲ爲ス可シ  
 第四百三十八條 大審院ノ裁判言書ハ其言渡アリタルヨリ三

第二章 再審ノ

再審ノ 控訴上告ヲ  
 ハ是等ノ 控訴上告等  
 判官渡既ニ確定シタ  
 ル後其裁判言渡ハ事  
 實ト大ニ異ナルニ確  
 証アル場合ニ於テ再  
 審ノ裁判言渡更ニ相  
 當ノ裁判言渡アラン  
 ヲ請求ス 裁判確定  
 ル者チイフ 裁判確定  
 ノ後ニ非サレハ 裁判  
 セサル者ハ尚ホ通常  
 規則ニ從ヒ上訴以テ  
 救護挽回スルノ道ア  
 ルヲ以テ敢テ非常ノ  
 法ニ依ルニ例ヘハ甲  
 京裁判所ニ於テ瀛車  
 旅客乙者ノ物品ヲ盜  
 取シタルトシテ刑ノ  
 言渡ヲ受ケタル然ル  
 ニ丙ナル者亦同一ノ  
 事件ニ付横濱裁判所

日間又哀訴アリタル時ハ判決アルマテ執行ヲ停止ス

第二章 再審ノ

第四百三十九條 再審ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ重罪輕罪ノ刑ノ  
 言渡ニ對シ被告人ノ利益ノ爲メ之ヲ爲スヲ得但裁判確定  
 ノ後ニ非サレハ之ヲ爲スヲ得ス  
 一人ヲ殺シタル罪ニ付キ刑ノ言渡アリタル後其言渡ノ日ニ  
 當リ殺サレタルト認メラレシ者現ニ生存シ又ハ犯罪前既  
 ニ死去シタルノ確証アリタル時  
 二 同一ノ事件ニ付キ共犯ニ非スシテ別ニ刑ノ言渡ヲ受ケタ  
 ル者アリタル時  
 三 犯罪アル以前ニ作リタル公正ノ證書ヲ以テ當時其場所ニ  
 在ラサルヲ證明シタル時  
 四 被告人ヲ陷害シタル罪ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリ  
 タル時  
 五 公正ノ證書ヲ以テ訴訟書類ニ偽造又ハ錯誤アルヲ證明

若クハ同一ノ裁判所ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケ而シテ其共ニ共犯ト認メラレザル時ノ如キヲ謂フニ被告トシテ訴ヘラレタルモノ其場合ニ居ラサル証據公正ナル證書ヲ以テ申立タル時例ヘハ一月一日東京ニ犯罪アリ而シテ其犯罪ニ付キ刑ノ言渡ヲ受ケタル者十二月卅一日ニ作リタルノ公正ノ證書ヲ以テ其日長崎ニアリタル旨ヲ證シタル如キ場合ニテ其公正ノ證書トハ地方廳裁判所長役場等ニ於テ官吏ノ作リタル書類ナリ

四 裁判官檢察官警察官賄賂ヲ収受聽許シ若クハ怨ヲ挾サシメ被告ハ人ヲ陷害シ證

シタル時

第四百四十條 再審ノ訴ヲ爲スヲ得可キ者左ノ如シ

一 刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官

二 刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル控訴裁判所ノ檢察官

三 大審院檢察長但司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲ス可シ

四 刑ノ言渡ヲ受ケタル者

五 刑ノ言渡ヲ受ケタル者死去シタル時ハ其親屬

第四百四十一條 再審ノ訴ハ刑ノ消滅シタルニ拘ハラズ何時ニテモ之ヲ爲スヲ得

第四百四十二條 再審ノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ原裁判官渡書ノ原本及ヒ證憑書類ヲ添ヘ之ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢察官ハ其書類ニ意見書ヲ添ヘテ之ヲ大審院檢

人鑑定人通事詐偽ノ陳述ヲ爲シテ被告人ヲ陷害シ又ハ何人ヲ問ハズ不實ノ事ヲ以テ被告人ヲ誣告陷害シタルニ因リ刑ニ處セラルタル時消滅ノノアサタル時消滅ノ満期滿免除特赦等ニ因リ刑ノ消滅スル

ナ他ノ事件ヲ關キ再

リ訴ハ確定裁判ノ効力ヲ殺ギ裁判執行ヲ停止スルモノナル故鄭重綿密ヲ要セス

非ザルノミナラス最モ急速ヲ要スルモノナレハ他ノ取調中ノ事件アルモ之ヲ關キテ大審院刑事局判事一同ノ會議ニ附ス

私訴ノ故ヲ以テ英ニ

移ス

事長ニ差出スヘシ

原裁判所ノ檢察官及ヒ控訴裁判所檢察官自ラ再審ノ訴ヲ爲サントスル時ハ前項ノ手續ニ從ヒ其書類ヲ差出ス可シ

第四百四十三條 大審院ニ於テハ檢察官ノ請求ニ因リ速ニ專任判事一名ヲシテ其取調ヲ爲シ報告書ヲ差出サシム可シ

第四百四十四條 大審院ニ於テハ他ノ事件ヲ關キ刑事局判事全員會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢察官ノ意見書ニ依リ判決ヲ爲ス可シ

第四百四十五條 大審院ニ於テ再審ノ原由アルヲ認メタル時ハ原裁判官渡書破毀シ公訴及ヒ私訴ニ付キ再審ヲ爲ス可

一 言渡シ其事件ヲ原裁判所ト同等ナル他ノ裁判所ニ移ス可シ

其送付ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ通常ノ規則ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可シ

原由ヨリト

名譽云々 人間ハ榮譽  
至重ノモノトス故ニ  
再審ノ訴ヲ爲シテ果  
シテ無罪トナルカ又  
ハ死者ノ爲メ親屬ヨ  
リ訴ヲ爲シテ破毀セ  
ラレタル時ニ於テハ  
其ノ者ノ汚名ヲ雪キ  
名譽ヲ回復セシメン  
タメ言渡書ヲ揭示場  
ニ張出シ新聞ニ廣告  
スル 揭示公告 ハリタ  
ナリ 揭示公告 シオホ  
ヤケニ  
ツジル  
特別裁判所 高等法院  
海軍裁判所等 都テ通  
常ノ裁判所ニ非サル  
モノヲ 忌避ノ原由 裁  
判官 忌避セラ非  
ル、如キコトナリ非  
常ノ事變 地方ノ騷擾  
等ノ如キ 傳染病流行  
コレナリ 管理 トリア  
管轄 イハ

第四百四十六條 死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲ爲シタル場合ニ  
於テ大審院ニテ再審ノ原由アルヲ認メタル時ハ其事件ヲ  
他ノ裁判所ニ移スヲナク原裁判言渡ヲ破毀ス可シ

第四百四十七條 再審ノ裁判ニ因リ無罪ノ言渡アリタル時又  
ハ前條ノ場合ニ於テ破毀ノ言渡アリタル時ハ其者ノ名譽ヲ  
復スル爲メ其言渡書ヲ揭示公告ス可シ

第三章 裁判管轄ヲ定ムルノ訴  
第四百四十八條 通常裁判所ト特別裁判所トト問ハス管轄ニ  
非サルノ言渡ヲ爲シ其言渡確定シタル時又忌避ノ原由若ク  
ハ非常ノ事變ニ因リ訴訟事件ヲ管理スルヲ能ハサル時ハ檢  
察官其他訴訟關係人ヨリ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲スヲ  
得

大審院 檢察長ハ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲  
スヲ得

第四百四十九條 裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲サントスル者ハ

其願意書ニ訴訟書類ヲ添ヘ之レテ大審院ノ書記局ニ差出ス  
可シ

第四百五十條 大審院ニ於テハ刑事局判事五名以上會議局ニ  
集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢察長ノ意見書ニ依リ裁判管  
轄ヲ定ムルノ訴ヲ判決シ其事件ヲ管理ス可キ裁判所ヲ定示  
ス可シ

第四章 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴  
第四百五十一條 犯罪ノ性質被告人ノ身分員數地方ノ民心其  
他重大ナル事情ニ因リ裁判ニ對シ紛擾又ハ危險ヲ生スルノ  
恐アル時ハ公安ノ爲其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スヲ  
得

第四百五十二條 公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ司法卿ノ  
命ニ因リ大審院 檢察長ヨリ其院ニ之ヲ爲ス可シ

第四百五十三條 大審院ニ於テハ會議局ニテ訴訟關係人ノ申  
立ヲ聽クヲナク速ニ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四百五十四條 大審院ニ於テハ會議局ニテ訴訟關係人ノ申  
立ヲ聽クヲナク速ニ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四百五十五條 大審院ニ於テハ會議局ニテ訴訟關係人ノ申  
立ヲ聽クヲナク速ニ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四章 公安又ハ嫌疑ノ爲メ  
裁判管轄ヲ移スノ訴

公安 犯罪ノ性質例  
其地方ニ於テ被告人  
若クハ被告人ノ員數  
極テ多ク又ハ地方ノ  
民心騷動シテ被告人  
ヲ劫奪シ或ハ良民憤  
怒シテ慘虐ノ所爲ヲ  
被シテ加ヘントス  
判ニ對シ紛擾危險ヲ  
生スルノ妨礙ヲ除去  
シ裁判所ヲシテ獨立  
不綱ノ地位ニ置 被告  
カシムルヲ云

治罪法

人身分ニ付キ嫌疑アル場合 被告人顯官若クハ其裁判所ノ高等ナル官吏タルト又ハ巨商大賈タル等ノ如キ 地方ノ民心ニ嫌疑アル場合 宗教ニ關スル事等ニ付キ多ク其例ヲ見ル可キナリ 訴訟ノ模様ニ因リ云々 例ヘハ刑法第二百七十一條ノ罪ニ付訴訟ヲ受ケ其他ノ人民之ヲ憎ムト甚シキ場合ノ如キ是ナリ 嫌疑ノ爲メ裁判管轄云々 地方ノ動靜ニ因リ平穩ニ裁判シ得ヘカラサルヲ以テ裁判ヲ移スノ訴ハ其關係人ヨリモ之ヲ爲スヲ得

第四百五十四條 被告人ノ身分地方ノ民心又ハ訴訟ノ模様ニ因リ裁判ノ公平ヲ維持スルコト能ハサルノ恐アル時ハ嫌疑ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スヲ得

第四百五十五條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ管轄裁判所ノ檢察官其他訴訟關係人ヨリ之ヲ爲スヲ得

民事原告人嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ爲シ又被告人其裁判所ニ於テ異議ノ申立ナクシテ本案ニ付キ辨論ヲ爲シタル時ハ前項ノ訴ヲ爲スヲ得ス

第四百五十六條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ヲ爲スニハ其趣意書ニ通テ原裁判書ノ書記局ニ差出スヘシ

書記ハ速ニ一通ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ其送達アリタルヨリ三日内ニ答辨書ヲ差出スヲ得

第四百五十七條 大審院ニ於テハ第四百五十條ノ規則ニ從ヒ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四百五十八條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴アリタル

第六編 裁判執行及赦免第一章 裁判執行

裁判執行 本章ハ主刑ノ執行ヲ示スモノニシテ刑法第一編ト刑ノ法附則トヲ併セテ始メテ完全ヲ爲ス可シ

裁判確定ノ後 上訴手續ニ盡キタルカ或ハ上訴期限ノ經過シ去リタルニ因リ原裁判言渡ノ變更シ能ハサル場合ニ至リタルルハチイフ

第四百六十條 刑法第三條ニ死刑ハ司法卿ノ命令アルニ非サレハ之ヲ行フコト得ズトアリテ死刑ノ言渡ハ確定スト雖モ直チニ之ヲ行フコトカラス檢察官ヨリ死刑ノ訴訟書ヲ司法卿ニ差出シ之ヲ鄭重ニスル者ハ二日之ヲ過ルルハ取

時ハ裁判所ニ於テ其訴訟手續ヲ停止ス

第六編 裁判執行復權及ヒ特赦

第一章 裁判執行

第四百五十九條 重罪輕罪違警罪ノ刑ハ裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ執行ス可カラス

第四百六十條 死刑ノ言渡確定シタル時ハ檢察官ヨリ速ニ訴訟書類ヲ司法卿ニ差出ス可シ

司法卿ヨリ死刑ヲ執行ス可キノ命令アリタル時ハ三日内ニ其執行ヲ爲ス可シ

第四百六十一條 死刑ヲ除クノ外刑ノ言渡 確定シタル時ハ直チニ之ヲ執行ス可シ

第四百六十二條 刑ノ執行ハ原裁判所ノ檢察官又ハ大審院ヨリ命ヲ受ケタル裁判所ノ檢察官ノ指揮ニ因リ之ヲ爲ス可シ

罰金料裁判費用及ヒ沒收物品ハ檢察官ノ命令書ニ依リ之

戻スヲ得  
サレハナリ

徴収  
トリダ

破壊  
コハ廢棄スル處

分  
カトリハ

別ニ規則ヲ以テ之ヲ

定ム  
本條ハ刑法附則

行ノ條項ヲ包括シタ  
ルモノナレハ彼レニ

就テ見  
ルヘシ

既決  
モハヤ裁

一刑ノ言渡ヲ受ケ  
タル者ヲ指示ス

チ徴収ス可シ

▲參看明治十四年十二月司法省丁第二拾五號達  
治罪法第四百六十二條第二項罰金料費用及ヒ沒收物品ノ徴  
収ハ書記局ニ於テ之レヲ擔當シ會計主任ヘ引渡ス儀ト可心得  
此旨相達候事

第四百六十三條 死刑ノ執行ニ付テハ書記其始末書ヲ作り刑  
ノ執行規則ニ從立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印ス可シ

其他刑ノ執行ニ關スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テコレヲ定  
ム

第四百六十四條 裁判言渡確定シ又ハ闕席裁判アリタル時ハ  
其刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ書記既決犯罪表ヲ作り左ノ

條件ヲ記載ス可シ但大審院ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲シタル時ハ  
其執行ヲ爲シタル裁判所ノ書記之ヲ作ル可シ

一犯人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地

二罪名刑名

三再犯

第四百六十五條 既決犯罪表ハ二通ヲ作り一通ヲ司法省ニ送  
致シ一通ヲ其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ

違警罪ノ既決犯罪表ハ一通ヲ作り其裁判所ノ書記局ニ藏置  
ス可シ

第四百六十六條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者其言渡ノ條件ニ付キ  
疑義ノ申立又ハ其執行ニ付キ異議ノ申立ヲ爲シタル時ハ刑

ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ

第四百六十七條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡ノ後捕ニ就キタ  
ル場合ニ於テ人違ノ申立アリタル時ハ之ヲ認定スル爲メ前  
ニ其罪ヲ認メタル裁判所ニ送致ス可シ

裁判ニ於テ本犯ナルヲ認定スルヲ能ハサル時ハ事實參考

藏置  
オサメ

刑ノ言渡云々  
疑義ノ

裁判言渡中ニ審ナラ  
ズ疑フ可キ所アレハ

之ニ對シ説明  
ヲ乞フ書ナリ

逃亡  
ニシテ

疑義  
ガヒ

認定  
シカトミ



干預  
ハツサ  
ハル

復權  
重罪ヲ犯シ因テ  
公權ヲ剝奪セラ  
レタル者ヲシテ其將  
來ノ權ヲ復セシムチ  
フイ

一 本人受ケタル所ノ  
刑如何ナリシヤチ

第二章  
復權

ノ爲メ曾テ其事件ニ干預シタル裁判官檢察官書記又ハ原被  
ノ證人ヲ呼出スコト得

第四百六十八條 前二條ノ場合ニ於テハ公廷ニテ刑ノ言渡チ  
受ケタル者ノ中立及ヒ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判官言渡チ爲ス  
可シ但其言渡ニ對シテハ上訴ヲ許サス

第四百六十九條 賠償及ヒ訴訟關係人ニ償還スヘキ裁判費  
用ニ付キ其言渡ノ執行ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第二章 復權

第四百七十條 復權ノ願ハ刑法第六十三條ニ定メタル期限經  
過シタル後刑ノ言渡チ受ケタル者ヨリ司法卿ニ之レヲ爲ス  
可シ

復權ノ願書ニハ本人署名捺印シ現ニ住スル地ノ始審裁判所  
檢事ニ之ヲ差出ス可シ

第四百七十一條 復權ノ願書ニハ左ノ書類ヲ添フ可シ  
一 裁判官渡書ノ謄本

二 主刑ノ滿期特赦又ハ期滿免除ト爲リタルコトヲ證明スル書  
類

三 假出獄及ヒ假ニ監視ヲ免セラレタルノ證書

四 賠償及ヒ裁判費用ヲ辯濟シ又ハ其義務ヲ免カレタルノ証  
書

五 過去現在ノ住所及ヒ生計ヲ記載スル書類

第四百七十二條 檢事ハ願人ノ品行其他必要ノ取調チ爲シ前  
條ノ書類ニ意見書ヲ添之レテ控訴裁判所檢事長ニ差出ス可  
シ

第四百七十三條 檢事長ハ更ニ必要ノ取調チ爲シ復權ノ願ニ  
關スル書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ司法卿ニ差出ス可シ

第四百七十四條 司法卿ハ復權ノ願ニ關スル書類ヲ檢閲シ其  
願チ允許ス可キ者ト認メタル時ハ速ニ上奏ス可シ

第四百七十五條 勅裁又ハ司法卿ノ意見ニ因リ復權ノ願チ棄  
却シタル時ハ司法卿ヨリ其旨ヲ控訴裁判所檢事長ニ通知シ

明ニ主刑ノ終リ三  
タルヲ証ス

謹直以テ獄則ヲ守リ  
峻改ノ狀アリタルチ

證犯人ノ心意如何  
ス四ヲ知ルト民事ノ

責ナキチ 五 犯人ノ行  
願ハス 爲如何チ

搜索スル品行ニモ  
ノ便アリ

檢事長ハ更ニ云々檢  
長ハ檢事ノ意見ト書

類トニ由リ更ニ要用  
ナル取調チ爲シ又其

ノ意見ヲ添ヘテ司法  
卿ニ差出  
スヘシ  
上奏  
天皇陛下下  
勅裁  
天皇陛下  
勅裁  
ノ御判決

前項ノ場合ニ復権ノ願ヲ棄捨シタルヲ云フ

裁可勅裁ニ因リ

特別ナル赦典ニシテ之ヲ與フルハ天皇陛下ノ特權ナレハ如可ナル場合ニ其申立ヲ爲ス可キカハ豫メ定メ難クレハ其申立ヲ爲スハ檢察官監獄長及ヒ司法卿情狀ヲ具シツブサニ

第三章 特赦

特赦特別ナル赦典ニシテ之ヲ與フルハ天皇陛下ノ特權ナレハ如可ナル場合ニ其申立ヲ爲ス可キカハ豫メ定メ難クレハ其申立ヲ爲スハ檢察官監獄長及ヒ司法卿情狀ヲ具シツブサニ

檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢事ニ通知ス可シ

前項ノ場合ニ於テハ刑法第六十三條ニ定メタル期限ノ半ヲ經過スルニ非サレハ更ニ其願ヲ爲ス可キ得ス  
更ニ復権ノ願ヲ爲スニ付テモ亦前數條ノ規則ニ從フ

第四百七十六條 復権ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ其裁可狀ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢事長ニ送致ス可シ  
檢事ハ裁可狀ノ謄本ヲ願人ニ下付ス可シ  
又刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ裁可狀ノ謄本ヲ送致シ其裁判所ニ於テハ之ヲ裁判言渡書ニ記入ス可シ

第三章 特赦

第四百七十七條 特赦ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ檢察官又ハ監獄長ヨリ犯人ノ情狀ヲ具シ司法卿ニ申立ルヲ得

經由手ヲ

監獄長ヨリ特赦ノ申立ヲ爲ス時ハ檢察官ヲ經由ス可シ但檢察官ハ意見書ヲ添フ可シ  
特赦ノ申立アリタル時ハ司法卿ヨリ其書類ニ意見書ヲ添ヘ上奏スヘシ

第四百七十八條 司法卿ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ特赦ノ申立ヲ爲ス可キ得

死刑ヲ除クノ外特赦ノ申立アリト雖刑ノ執行ヲ停止セズ  
第四百七十九條 特赦ノ申立棄却アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

第四百八十條 特赦ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ特赦狀ヲ送致ス可シ此場合ニ於テハ第四百七十六條ノ規則ニ從フ

▲明治十八年九月太政官第三拾壹號布告  
明治十四年九月第四拾四號布告及ヒ同年十二月第八拾號布告ヲ廢止シ違警罪即決例別紙ノ通制定ス

右奉 勅旨布告候事

(別紙)

違警罪即決例

即決 即時即日判決ス  
ルナリ即決ハ被  
告人ノ利益ノミナラ  
ス官ノ事務上ニ一大  
便益アルモ  
ノト思考ス

正式ヲ用ヒス 治罪法  
公判ノ  
式ニヨ  
ラズ

陳述 マチシ  
ノベル

証憑 シヨウコト  
ナルモノ

第一條 警察署長及ヒ分署長又ハ其代理タル官吏ハ其管轄地  
内ニ於テ犯シタル違警罪ヲ即決スヘシ但私訴ハ此限ニ在ラ  
ス

第二條 即決ハ裁判ノ正式ヲ用ヒス被告人ノ陳述ヲ聽キ証憑  
ヲ取調ヘ直チニ其言渡ヲ爲スヘシ  
又被告人ヲ呼出スコトナク若クハ呼出シタリト雖モ出廷セ  
サル時ハ直チニ其言渡書ヲ本人又ハ其住所ニ送達スルコト  
ヲ得

第三條 即決ノ言渡ニ對シテハ違警罪裁判所ニ正式ノ裁判ヲ  
請求スルコトヲ得但正式ノ裁判ヲ經スシテ直チニ上訴ヲ爲  
スコトヲ得ス

第四條 即決ノ言渡書ニハ被告人ノ氏名年齢身分職業住所犯

罪ノ場所年月日時罪名刑名及ヒ正式ノ裁判ヲ請求スルコト  
ヲ得ヘキ期限並ニ其言渡ヲ爲シタル警察署年月日警察官ノ  
氏名ヲ記載スヘシ

第五條 正式ノ裁判ヲ請求スル者ハ即決ノ言渡ヲ爲シタル警  
察署ニ申立書ヲ差出スヘシ但其期限ハ第二條第一項ノ場合  
ニ於テハ言渡アリタルヨリ三日内第二項ノ場合ニ於テハ言  
渡書ノ送達アリタルヨリ五日内トス

第六條 警察署ニ於テ前條ノ申立書受ケタル時ハ二十四時内  
ニ訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ違警罪裁判所檢察官ニ送致ス  
ヘシ

第七條 第五條ニ定メタル期限内ニ正式ノ裁判ヲ請求セサル  
時ノ即決ノ言渡ヲ以テ確定ノモノトス

第八條 科料拘留ノ言渡ヲ爲シタル時必要ト認ムル場合ニ於  
テハ後ノ數條ニ定メタル處分ヲ爲スコトヲ得

第九條 科料ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其金額ヲ假納セシムヘシ

假納 即決ナル故ニ後  
チ正式ノ言渡ニ

於テ前言渡書破棄ノ  
恐レアル故ニ假ノ字  
ヲ置クモ  
ノナリ  
折算 カンチ  
ヤウシ  
避クルコトヲ得スハツ  
ガデ  
キヌ  
執行 刑ノトリ  
オコナヒ

若シ納メサル者ハ壹圓ヲ一日ニ折算シテ之ヲ留置ス其壹圓  
ニ滿サル者ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス  
第十條 拘留ノ言渡ヲ爲タタル時ハ一日ヲ壹圓ニ折算シ其刑  
期ニ相當ノ金額ヲ保証トシテ差出サシムヘシ若シ差出サ、  
ル者ハ第五條ニ定メタル期限内之ヲ留置ス但刑期五日内ナ  
ル時ハ其日數ニ過クコトヲ得ス  
第十一條 保証金ヲ差出シタル者ハ刑ノ言渡確定シタル後  
直チニ出廷シテ其執行ヲ受クヘシ若シ出廷セサル時ハ保証  
金ヲ没入シテ木刑ニ換フ  
第十二條 留置シタル者正式ノ裁判ヲ請求シ因テ呼出狀ノ送  
達アリタル時ハ直チニ留置ヲ解クヘシ  
第十三條 留置ノ日數ハ一日ヲ壹圓ニ折シテ科料ノ金額ニ算  
入シ又ハ拘留ノ刑期ニ算入スヘシ  
▲明治十八年一月太政官第二號布告  
明治十四年(十二月)第七拾四號布告ヲ廢シ自今輕罪ニ係ル控

同法四百四十四條等  
ヲ併シ便宜法ヲ設ク  
單行ノ法律ト  
爲シタルモノ  
第七拾四號布告ニ關  
スル控訴ヲ執行  
セザルトノ趣意  
輕罪 刑法第八條ニ記  
載シタル禁錮罰  
金ノ刑  
控訴 法律ハ被告人ヲ  
保護スルコト多キ  
モノナレハ輕罪裁判  
所ノ言渡ニ對シ覆審  
ノ訴ヲナ 抵觸アレ本  
スヲ云 訴訟ヲ受ケ  
案タル事件 對手  
テ 保証ウケ 豫納カマ  
オサ  
ム  
鑑定人 輕罪ヲ犯スニ  
用ヒタル物件

訴ハ左ノ規則ニ從ヒ之ヲ爲スコトヲ得但治罪法中此規則ニ抵  
觸スル條件ハ當分ノ内施行セス  
第一條 控訴ハ治罪法中本案ノ裁判言渡前ニ許シタルモノト  
雖モ總テ本案ノ裁判言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スコ  
トヲ得ス  
第二條 控訴ノ期限内ハ控訴ヲ爲サスシテ直チニ上告ヲ爲ス  
コトヲ得但對手人控訴ヲ爲シタルトキハ此限ニ在ラス  
控訴ヲ爲サスシテ直チニ上告ヲ爲シタルトキハ原裁判言渡ニ  
對シ更ニ控訴ヲ爲スコトヲ得ス  
第三條 被告人公訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴ヲ爲サントスルト  
キハ裁判費用ノ保証トシテ金拾圓ヲ豫納スヘシ  
第四條 被告人ニ於テ證人鑑定人ノ呼出ヲ請求スルトキ前條  
保証金ニテ不足ト認ムル場合ニ於テハ別段其費用ヲ豫納セ  
シムヘシ  
第五條 治安裁判所ニ於テ爲シタル輕罪ノ裁判言渡ニ對スル

ノメキ、  
人ヲ云、  
管轄輕罪裁判所云々  
犯罪ノ種類性質場所  
及ヒ被告人ノ身分ニ  
ヨリ各其所轄ヲ異ニ  
スレハナリ第三十八  
條第四十條  
ヲ見ルヘシ

コソツ  
控訴ハ管轄輕罪裁判所ニ之ヲ爲スヘシ其控訴ヲ受ケタル裁  
判所ニ於テハ治罪法中輕罪ノ控訴ニ付キ定メタル規則ニ從  
ヒ之ヲ裁判スヘシ  
右奉 勅旨布告候事

柳澤武運三註釋

鼈頭  
標註傍訓監獄則  
註釋  
全監獄則罰具圖式

明治十九年一月出版

監獄則目錄

第一編

第一章

汎則

第二章

監署ノ規程

第三章

監獄ノ構造

第二編

第一章

役法 附時限

第二章

工錢

第三章

徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ヲ受タル囚徒押送

第四章

假出獄免幽閉ノ者ニ貸與スル屋舎

第三編

第一章

給與 附死亡

第二章

疾病

第三章

書信

第四章

接見

第五章 差入品

第四編

第一章 教誨

第二章 賞譽

第三章 懲罰

傍訓監獄則

第一編

第一章 汎則

第一條 監獄ヲ別テ左ノ六種ト爲ス

一 留置場 裁判所及ヒ警察署ニ屬スルモノニシテ未決者ヲ

一時留置スルノ所トス但時宜ニ由リ拘留ノ刑ニ處セラレ

タル者ヲ拘留スルコトヲ得

二 監倉 未決者ヲ拘禁スルノ所トス

三 懲治場 懲治人ヲ懲治スルノ所トス

四 拘留場 拘留ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘留スルノ所トス

五 懲役場 懲役ノ刑及ヒ禁錮ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘禁

スルノ所トス

六 集治監 徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ニ處セラレタル者ヲ集治

スル所トス

北海道ニ在ル本監ハ徒刑流刑ニ處セラレタル者ヲ集治ス

第一編 汎則

汎則總體ノ規則

監獄

未決者

監倉

拘禁

懲治

拘留

懲役 コラ  
 禁錮 コメ  
 徒刑 シモキヨ  
 流刑 ナガシ  
 禁獄 ニウ  
 集治監 監獄ヲ合集シ  
 管理 シハ  
 適用 アテハメ  
 所屬 シハイ  
 巡閱 ミマ  
 在監人 監倉中ニ居  
 ルモノヲ云

第二條 監獄ハ内務卿ノ管轄ニ屬ス但陸海軍ノ管轄ニ屬スルモノハ此限ニ在ラス

第三條 集治監ハ内務卿之ヲ直轄ス留置場監倉懲治場拘留場懲役場ハ警視總監又ハ府知事ヲ除ク縣令之ヲ管理ス

第四條 此獄則ハ特ニ陸海軍ノ獄則ヲ以テ處スヘキモノニ適用スルヲ得ス

第五條 内務卿ハ毎年其所屬官吏ヲシテ各監獄ヲ巡閱セシムヘシ

第六條 警視總監府知事縣令ハ毎年三四次所轄ノ監獄ヲ巡閱スヘシ裁判官檢察官ハ時々其裁判所ニ屬スル監倉ヲ巡閱スヘシ府縣會議員ハ臨時其府縣監獄ヲ巡閱スルコトヲ得

第六條 在監人ト稱スルハ未決既決ノ者及ヒ第十九條第三十條ニ記載シタル者ヲ云フ

第七條 在監人ヨリ司獄官吏ノ處置ニ對シ若シ情苦ヲ訴ヘントスルトキハ第五條第一項第二項ニ記載シタル官吏巡閱ノ

第二章 監署ノ規程

司獄官吏 ヒトヤツ  
 處置 キオ 情苦 ツラヒ  
 ミチ 口述 口上ヲ以テ  
 云 口述 言ヒ立ツル  
 申告 ウツタ  
 管束 取締ヲ和平 ナダ  
 決責 セメツ 監房 ヒト  
 ナ 觀察 ヲマ 査閱 ラダ  
 カ 傲情 オコ 脱越 ノガ  
 ル 領収 ノ証リ書  
 シ 渡ヒキタ 交付 ヒキリ  
 ツル

際對書又ハ口述ヲ以テ申告スルコトヲ得

第二章 監署ノ規程

第八條 司獄官吏在監人ヲ管束スルハ一ニ和平ヲ兼リ罰例ニ照シテ犯則者ヲ決責スルノ外恣ニ責罰スルヲ得ス

第九條 典獄看守長ハ日夜不時ニ監房ノ内外ヲ視察シ或ハ物件ヲ査閱シ其他囚徒ノ傲情ヲ生シ脱越等ノ事ナカラシムルヲ要ス

第十條 新ニ入監スル者アルトキハ典獄先ツ拘引狀拘留狀収監狀又ハ處刑宣告書等ノ文書ヲ査閱シテ之ヲ領シ其領収ノ證ヲ引致シ來タル者ニ交付ス其文書ナクシテ引致セラレタル者ヲ入監スルヲ得ス

未決者ノ中共犯人アルトキハ其監房ヲ別異シ談話通聲ヲ禁シ法廷ニ引致ノ時モ同往セシムルヲ得ス

已決囚ハ第十六條ニ記載シタル差別ニ從ヒ其ノ監房ヲ別異ス



談話 モノガ通聲 ハナ  
 ヲ携帶 ツレモニ 要領 ハ  
 ム詳録 ハツキ 通身 カ  
 子 リカク 通身 カ  
 ダギ 搜檢 サガシ ア  
 ウ 利器 キノ 夾帶 モチ  
 精檢 コマカ ニア  
 釋放 ユルシ 隱匿 ツカ  
 ク貨物 キン  
 沒收 トル ア  
 書籍 ホ

第十一條 入監ノ婦女乳兒 三歲ヲ携帶セント請フ者アルトキハ之ヲ許ス

第十二條 新ニ入監スル者アルトキハ名籍ノ様本ニ照シ其要領ヲ詳録シ一小房内ニ於テ通身ヲ搜檢シ利器其他ノ物件ヲ夾帶スルヲ拒クヘシ懲治人ノ監舎ニ入ルトキモ亦同シ

第十三條 總テ監房ニ入ル、物品ハ典獄一々之ヲ精驗シ其危險ノ虞アルモノハ一切之ヲ禁スヘシ

第十四條 總テ入監人ノ携有スル財貨物件ハ悉ク點檢シテ其名數ヲ簿冊ニ記載シ典獄一々證印シテ之ヲ領置シ釋放ノ時還付スヘシ但點檢ノ際隱匿セシ貨物ハ沒收ス

若シ其領置ノ貨物ヲ以テ親屬ヲ扶助シ其他正當ノ費用ニ充ント請フトキハ之ヲ許ス

第十五條 在監人書籍ヲ看ント請フトキハ新聞紙及ヒ時事ノ論說ヲ記載スルモノヲ除キ修身又ハ營業ニ必要ナルモノ、モヲ許スヘシ

修身 ミチ オ  
 要犯 タイ セツナ  
 疑獄 ウタ ガヒノカ、  
 縫着 ヌヒ ツ  
 白布 ヌ ノ  
 覆面 カホ チ  
 小孔 ナ ア  
 窺探 ウカ ヒ  
 矯正 マツ スク  
 歸善 ゼン シンニ  
 タチカヘル

第十六條 既決囚ハ各刑名ニ從テ其監房ヲ別異シ又其中ニ就テ左ニ記載シタル者ヲ別異ス

一十六歲未満ノ者ト滿十六歲以上ノ者

二滿十六歲以上二十歲未満ニシテ再犯以上ノ者ト同上ノ年齡ニシテ初犯ノ者

三初犯ノ者ト再犯以上ノ者

第十七條 要犯疑獄ニ係ル者ヲ拘禁スル未決監ニ於テハ其氏名ヲ呼ハス番號ヲ以テ之ニ換フヘシ但着衣ノ外襟ニ白布ヲ縫着シ其番號ヲ墨書シ監房ニ出入スル毎ニ白布ヲ以テ覆面シ當眼ノ所ニ小孔ヲ穿チ共犯者ヲシテ共ニ拘禁ノ身タルヲ窺探スルヲ得サラシム

第十八條 放恣不良ノ者ヲ懲治場ニ入レ矯正歸善セシメント其會屬親ヨリ願出ルルハ第二十條第一項ノ例ニ照シテ處分スヘシ矯正歸善ノ爲メ懲治場ニ入ルヘキ者ノ年齡ハ滿八歲以上滿二十歲以下ヲ限リトス

瘡啞 シヤウ  
 證票 シヤウ  
 行狀 シヤウ  
 宅舎 シヤウ  
 帶往 シヤウ  
 情狀 シヤウ  
 宣告書 シヤウ  
 領置 シヤウ  
 送致 シヤウ

第十九條 懲治人ト稱スルハ左ニ記載シタル者ヲ云フ  
 一 刑法第七十九條第八十二條ニ從ヒ懲治場ニ留置スル幼年ノ者及ヒ瘡啞者  
 二 尊屬親ノ情願ニ由テ懲治場ニ入レタル者  
 第二十條 前條第二款ニ記載シタル懲治人ハ戶長ノ證票ヲ具スルニ非レハ入場ヲ許サス但シ在場ノ時間ハ六箇月ヲ一期トシ二年ニ過ルヲ得ス  
 入場ヲ請ヒシ尊屬親ヨリ懲治人ノ行狀ヲ試ル爲メ宅舎ニ帶往セント請フトキハ其情狀ニ由リ之ヲ許スヘシ  
 第二十一條 懲治人ハ左ノ年齢ニ從ヒ其居房ヲ別異ス  
 一 十六歳未満ノ者ト滿十六歳以上ノ者  
 二 滿十六歳以上二十歳未満ニシテ再ヒ懲治場ニ入シ者ト同上ノ年齢ニシテ初テ入場スル者  
 第二十二條 在監人ヲ他監ニ移ストキハ其名籍又ハ處刑ノ宣告書其他必用ノ文書及ヒ領置ノ貨物ヲ具シテ送致スヘシ其

發遣 シヤウ  
 戒具 シヤウ  
 考據 シヤウ  
 賞表 シヤウ  
 褫奪 シヤウ  
 削除 シヤウ  
 特赦 シヤウ

發遣ノ途中ニ在テノ行狀ハ押送官吏之ヲ記述シテ典獄ニ知會スヘシ  
 在監人ヲ裁判所又ハ他監ニ押送スルトキハ戒具ヲ用ヒ男ト女ヲ別ツヘシ但懲治人ハ戒具ヲ用ヒス  
 第二十三條 典獄ハ監守長及ヒ看守ヲシテ常ニ在監人ノ行狀ヲ録サシメ賞罰ヲ行フノ考據トナスヘシ  
 第二十四條 賞表ヲ與ヘタルトキハ賞譽簿ニ其氏名及ヒ賞詞ヲ記載シ褫奪シタルトキハ之ヲ削除スヘシ但其賞罰ヲ行ヒタル旨ヲ囚徒ニ示スハ第二十六條ノ例ニ依ルヘシ  
 第二十五條 特赦アリタルトキハ速ニ其旨ヲ内務卿ニ申報スヘシ  
 第二十六條 特赦ヲ受ケタル者アルトキハ免役日若クハ日曜日ノ午後ニ在テ他ノ囚徒ヲ集メ其旨ヲ聽カシメ仍ホ之ヲ揭示スヘシ  
 第二十七條 假出獄ヲ許サレタル者ニハ其證票ヲ與ヘ警察

幽閉  
トメ

使役  
ツカヒ  
マハス

勸誘  
スハメイ  
ザナウ

繼續  
モチ  
コス

凌辱  
ヒドクア  
ツカウ

所爲  
シハ  
ザ

遞傳ヲ以テ其居住セントスル地ニ押送スヘシ

監署ニ領置セシ金錢ハ出獄者ニ携帶セシメス其金圓ヲ録シテ共ニ其地ノ警察官ニ記載シタル官吏ニ送致スヘシ

第二十八條 假出獄免幽閉ヲ受タル徒刑流刑ノ者其刑期間ハ

典獄ニ於テ營業ノ方法ヲ指示シ其來署ヲ要スルトキハ召喚スルヲ得

第二十九條 在監人中能ク獄則ヲ守ル者ヲ撰テ傳告者誘工者

トナス傳告者ハ官吏ノ命令ヲ在監人ニ傳ヘシメ誘工者ハ工場ニ在テ服役者ヲ勸誘セシム但傳告者誘工者ハ滿六箇月以上其用務ヲ繼續セシムルヲ得ス

傳告者及ヒ誘工者ハ私ニ在監人ヲ使役シ若クハ凌辱スルノ所爲アルヲ許サス

第三十條 刑期滿限ノ後頼ルヘキ所ナキ者ハ其情狀ニ由リ監獄中ノ別房ニ留メ生業ヲ營マシムルヲ得

第三十一條 刑期滿限ノ者ヲ解放スルハ滿期翌日午前第十時

遺骸  
シガ  
イ

埋葬  
ム  
ツ

故舊  
トモ  
チ

遞付  
ヒキワ  
タス

送費  
チクル  
チ

自辨  
自分  
モチ

逃走  
ニゲ  
ハ

ヲ過ヘカラス

第三十二條 死刑ノ執行ハ午前第十時ヲ過ルヲ得ス其執行中

ハ看守ヲシテ嚴ニ刑場ノ門戸ヲ護ラシムヘシ其遺骸ハ死相ヲ驗シタル後仍ホ二分時ヲ過サレハ埋葬若クハ下付スルコトヲ得ス

第三十三條 死刑者又ハ死亡者アルトキハ其年月日時ヲ記シ

典獄ヨリ本籍ノ戶長及ヒ近地ノ親屬若クハ故舊ニ通知スヘシ其監署ニ領置シタル貨物ハ親屬ニ下付ス若シ親屬ナキトキハ遺骸ヲ領収シタル故舊ニ之ヲ下付ス但死者ノ身ニ纏ヒタル衣服ハ此限ニ在ラス

親屬遺地ニ在テ物品ヲ送付スルニ入費ヲ要スルモノハ其物品ヲ販賣シテ代價ヲ遞付スルコトヲ得但送費ハ親屬ノ自辨トス

若シ其物件又ハ代價ヲ受クヘキ者ナキトキハ之ヲ沒收ス

第三十四條 在監人逃走スル者アル時領置ノ貨物ハ前條ノ例

第三章  
監獄ノ  
構造

發火シハ  
罹災ナイ  
形勢アリ  
避ノガ  
解放トキハ  
牆壁カ  
區畫ヘ  
嚴罰キビツク  
ヘダツル

ニ依テ處分スヘシ但沒收ハ逃走ノ日ヨリ滿一個年ヲ經ルノ  
後ニ非サレバ之ヲ處分スルコトヲ得ス  
領置ノ工錢ハ第五十七條ニ照シテ處分スヘシ  
第三十五條 監獄ノ近境ヨリ發火シテ罹災ノ虞アルトキハ司  
獄官吏其形勢ヲ量リ在監人ヲ他所ニ押送シ其災ヲ避シムヘ  
シ  
水火風震其他激甚ナル變災ニ際シ在監人ヲ押送スルノ違ナ  
キトキハ要犯疑獄ニ係ル者ヲ除クノ外一時解放スルヲ得  
第三章 監獄ノ構造  
第三十六條 留置場監倉懲治場拘留場懲役場ハ每府縣ニ  
置キ集治監ハ適當ノ地ニ之ヲ置クモノトス  
留置場監倉懲治場拘留場懲役場一區畫内ニ在ルモノハ牆壁  
ヲ以テ之ヲ區畫スヘシ  
第三十七條 未決監已決監及ヒ懲治場ハ男監女監ノ別ヲ嚴罰  
スヘシ

交談 互ニ相談  
交通 取換ハ  
鑰匙  
閤室 居處  
空氣 カゼ  
光線 日ノヒ  
接見室 面會場  
首部 入口  
柵欄  
障得 サ  
牆壁

甲ノ監房ニ在ル者ト乙ノ監房ニ在ル者ト彼是交談シ又ハ物  
件ヲ交通スルノ便ヲ得サラシムヘシ各監房ノ鑰匙ハ其製式  
ヲ同シクシ甲乙適用スルヲ要ス  
第三十八條 密室ハ監倉ニ設ケ他人ト交通スルコトヲ得サラ  
シムヘシ  
閤室ハ已決監ニ設ケ暗ニ空氣ヲ通セシメ毫モ光線ヲ通セシ  
メサルヲ要ス  
密室閤室ハ一室一人ヲ限トス  
第三十九條 接見室ハ監舍ノ首部ニ設ケ其壁面ニ方三尺ノ口  
ヲ開キ之ニ縱横ノ格子ヲ嵌メ格子ヨリ三尺許ヲ距リ柵欄ヲ  
設ケ在監人ハ格子内ニ立シメ外人ハ格子外ノ柵欄ニ倚ラシ  
ムヘシ但懲治人ノ接見室ハ此例ヲ用ヒス  
第四十條 燈火ハ監房外ニ置キ障得スルノ虞ナカラシムヘシ  
第四十一條 死刑場ハ監獄ノ一隅ニ設ケ牆壁ヲ以テ外見ヲ防  
グヘシ

第二編  
第一章  
役法

作業 シゴ  
斟酌 ミリ  
科程 ヤマ  
疲勞 ツカ  
鐵鎖 クサ  
聯絆 ヒヤアハ  
整列 タチナ  
點檢 ミアラ  
タメ

第二編

第一章 役法附時限

第四十二條 定役ニ服スル者ノ作業ハ刑名ニ因テ之ヲ斟酌シ  
毎囚一日ノ科程ヲ定メテ服役セシム滿十二歳以上十六歳未  
滿ノ者滿六十歳以上及ヒ病後ノ疲勞若クハ身體ノ虛弱ニ因  
リ勞作ニ勝ヘサル者ハ體力ニ應ジ作業ノ科程ヲ寛恕スル若  
シ已ムヲ得ス外役ニ服セシムル時ハ鐵鎖ヲ用テ二囚毎ニ聯  
絆シ笠ヲ用テ問ハス其面ヲ掩ハシム但外役ノ囚徒ハ一組十  
人以上十五人以下ト定メ看守一人押丁二人以上ヲシテ之ヲ  
監セシム  
外役ノ囚徒道路往來スル時ハ務メテ他人通行ノ妨ト爲ラサ  
ラシムルヲ要ス  
第四十三條 毎日囚徒ヲシテ役ニ就カシムルニ際シ悉ク之ヲ  
監房外ニ整列セシメ看守長及ヒ看守點檢ヲナスヘシ歸監セ  
シムル時モ亦同シ

喪トハ死亡シテ七週  
間ヲ經サル内ヲ云  
フ然レモ此處ニ云フ喪  
ハ父母死亡シタル日  
ヲ聞知シタル翌日一  
日ヲ指セシモノナリ

第四十四條 左ニ記載シタル日ハ服役ヲ免ス父母ノ喪ニ遭フ  
者モ亦一日免役ス

- 一月一日
- 元始祭
- 孝明天皇祭
- 紀元節
- 春季皇靈祭
- 神武天皇祭
- 秋季皇靈祭
- 神嘗祭
- 天長節
- 新嘗祭

專習 ナラフ

第四十五條 囚徒ノ專習スル工業ハ授業者若クハ工業殊等

勸誘 スハメイ  
 將來 ノチヲ云  
 撫生 ヨウシヤ  
 指示 ツ  
 教誨 ヲシ  
 起床 ヲキイ  
 喫飯 クフ  
 運動 アルク

ノ囚ヲシテ之ヲ導カシム其刑期一年以下ノ者ニハ習熟シ易キ工業ヲ授ルヲ要ス

第四十六條 定役ニ服セサル囚徒ト雖モ典獄之ヲ勸誘シテ其將來ノ生業ヲ計リ攝生又ハ親屬扶助ノ爲メ勞作セント請フニ至ラシムルヲ要ス其工業ノ種別ヲ定ムルハ典獄ノ指示ニ依ル

未決監ニ在ル者座作ノ業ヲ爲サント請フトキモ亦同シ

第四十七條 懲治人ニハ教誨ニ充ル爲メ服役時間表ニ準ジ七時ニ過キサル時間 休憩時 農業若クハ工藝ヲ教ヘ力作セシムヘシ

○時限

第四十八條 未決者及ヒ定役ニ服セサル囚徒ハ已決囚ハ毎朝日出ノ頃ニ起床シ 各其監房ヲ掃除シ畢リ喫飯セシム又毎朝一時間以内監房外ニ於テ運動ヲ許ス

第四十九條 定役ニ服スル者ハ毎朝日出ノ頃ニ起床シ各其監

第二章 工錢

休憩 イキヤ  
 罷役 シゴトヲヤ  
 伸縮 ノベチ  
 全監 監獄一休  
 一齊 イチ  
 驗視 ミアラ  
 偷懶 ナマ  
 科定 クベツシテ  
 餘分 ノコ

房ヲ掃除シ畢リ喫飯セシム其起床ヨリ約子一時間ヲ經テ役ニ就カシメ午前十時前後ニ至テ湯若クハ水ヲ與ヘ正午十二時ニ至リ休憩ス飯後暫時休憩シ再ヒ就役日没前罷役セシム其時間ハ別表ニ之ヲ定ム但時宜ニ由リ其時間ヲ伸縮スルヲ得

起床還房及ヒ就役罷役其他ノ動止ヲ令スルハ鈴若クハ柝ヲ以テシ全監一齊ニ動止セシム

第五十條 科程ヲ終リタル者ハ時限ニ拘ハラズ罷役セシム午飯ニ就カシムルノ際科程ノ大半ヲ爲シ得タルヤ否ヲ驗視スヘシ若シ偷懶ニシテ怠役スルモノハ飯後休憩ヲ許ルサズ

第二章 工錢

第五十一條 定役ニ服スル囚徒現役一百日ヲ經レハ始テ各自ノ工錢ヲ科定シ之ヲ十分シ重罪囚ニハ其一分輕罪囚ニハ其二分ヲ與ヘ餘分ハ之ヲ監署ニ收ム

定役ニ服セサル囚徒及ヒ未決者並ニ第十九條第一款ニ記載

扣除ノケ  
留置アル  
準テホ  
贈與ヲタリ

シタル懲治人ニシテ作業スル者ノ工錢ハ十分シテ其三分ヲ  
 監署ニ収メ其七分ヲ與フ定役ニ服スル囚徒ニシテ當日ノ科  
 程ヲ畢リテ仍ホ作業スルモノ科程外ノ工錢モ又々同シ  
 第五十二條 第十九條第二項ニ記載シタル懲治人ニシテ其尊  
 屬親ヨリ衣食費ヲ自辨スル者ハ其工錢ノ全分ヲ與ヘ衣食費  
 ヲ自辨スルノ能ハサル者及ヒ第三十條ニ記載シタル者ハ工  
 錢ノ内ヨリ衣食費ヲ扣除シ餘分ハ之ヲ與フ  
 第五十三條 在監人ニ與フヘキ工錢ハ監署ニ留置シ毎月ノ首  
 ニ於テ其前月ノ總計金額ヲ本人ニ知ラシムヘシ  
 第五十四條 各種ノ工錢ハ其地普通ノ傭工錢ヲ準トシ各自ノ  
 技能ニ應ジ一日若干錢ト定ムヘシ  
 第五十五條 監署ニ留置ノ工錢ハ本人ノ請ニ由リ親屬ニ贈與  
 スルヲ許シ又ハ書籍其他必要ノ物品及ヒ第六十九條ニ從ヒ  
 食物ヲ購ヒ之ヲ給スルヲ得  
 第五十六條 在監人死亡シ監署ニ留置ノ工錢アルトキハ第三

第三章  
徒刑及  
禁獄ノ  
刑ニ處  
セラル  
ル囚徒  
ノ押送

遞傳 驛次ニ  
管束 トリシ  
派出 デハ

第十三條ノ例ニ照ラシテ處分スヘシ  
 第五十七條 在監人若シ逃走シタルトハ己決囚ノ工錢ハ之ヲ  
 沒收ス未決者及懲治人ノ工錢ハ其親屬ニ下付ス親屬ナケレ  
 ハ之ヲ沒收ス  
 第三章 徒刑流刑又ヒ禁獄ノ刑ニ處セラレタル囚徒押送  
 第五十八條 徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ニ處セラレタル者アルト  
 キハ其宣告書ノ附書ヲ具シテ内務卿ニ申報シ其指揮ニ從ヒ  
 警察遞傳ヲ以テ集治監ニ押送スヘシ  
 北海道集治監ニ於テ管束スヘキ徒流刑ノ囚徒ハ本監官吏ノ  
 臨時派出シタル地マテ押送スヘキモノトス  
 第五十九條 北海道ニ在ル集治監ハ毎歲三四次官吏ヲ派出シ  
 前條第二款ノ例ニ從ヒ押送シタル徒刑流刑ノ囚徒ヲ受取ヘ  
 第六十條 徒刑流刑ノ囚徒ヲ押送スル時ハ戒具ヲ用ヒ男囚ト  
 女囚トヲ別ツヘシ遞船中ニ在テハ戒具ヲ用ヒサルモ妨ケナ

第四章 假出獄 免幽閉ノ者ニ 貸與スル屋舎

幽閉 トザ コム

構造 ツクリ カマユ

創置 ツク ル

計畫 モク ロミ

配偶者 ツレン ツ フモノ

第六十一條 假出獄免幽閉ノ者ニ貸與スル屋舎  
スヘキ家ナキトキハ屋舎ヲ貸與スヘシ  
屋舎ヲ構造スルハ將來市街村落ヲ創置スルノ便ヲ計畫スル  
ヲ要ス

第六十二條 假出獄免幽閉ヲ受ケタル徒刑流刑ノ者其配偶者  
又ハ其他ノ親屬ヲ招キ全居セント請フトキハ典獄將來營生  
ノ方法ヲ取亂シ之ヲ許否スヘシ  
前項ノ請ヲ許ストキハ其配偶者又ハ其他ノ親屬現住スル地  
ノ戸長ニ通告ス可シ  
其徒刑流刑ノ者嫁娶ヲ爲サントスルトキハ監署ニ申告セシ  
メ典獄之ヲ許否スヘシ

第三編 第一章 給與

臥具 シヤ

赭色 カキ イロ

淺葱色 アサギ イロ

第六十三條 己決囚ノ獄衣類ハ總テ之ヲ貸與ス  
第六十四條 未決者ノ衣類ハ總テ自辨トシ臥具ハ之ヲ貸與ス  
若シ臥具ヲ自辨セント請フ者ハ之ヲ許ス貧困ニシテ衣類ヲ  
自辨スルコト能ハサル者ニハ之ヲ貸與ス

第六十五條 己決囚ノ獄衣ハ赭色トシ懲治人ノ衣服ハ淺葱色  
トス

第六十六條 獄衣ハ總テ筒袖トシ長短二種ニ別ツ男ノ通常服  
ハ長衣就役服ハ短衣トシ女服ハ總テ長衣トス  
獄衣ノ外襟ニハ白布ヲ縫着シ之ニ番號ヲ墨書スヘシ

第六十七條 在監人ニ貸與スル衣類雜具

- 一 通常服
- 一 單衣
- 一 裕
- 一 綿入衣
- 一 襦袢



- 一 就役服
- 一 單短衣
- 一 袴短衣
- 一 綿入短衣
- 一 襦袢
- 一 股引
- 一 雜具
- 一 蒲團
- 一 蚊帳
- 一 莞筵
- 一 枕
- 一 帶 長三
- 一 手巾 長三尺
- 一 襪

澁澤  
セソ  
ダラ

補綴  
トリツ  
レル

領置  
アツ  
カル

一 笠

以上ノ貸與品ハ地方ノ便宜ニ依リ之ヲ斟酌取捨シ澁澤補綴  
シテ其用ニ充ルヲ得

第六十八條 在監入一人一日ノ食糧

- 一 下白米十分ノ四
- 一 挽割麥十分ノ六
- 一 七合 強キ力業ニ服スル者
- 一 五合 輕キ力業ニ服スル者
- 一 四合 工役ニ服セサル者及ヒ
- 一 三合 十歳未満ノ幼者

金壹錢五厘以下

地方ノ便宜ニ依リ粟稗ノ類ヲ以テ麥ニ代用スルヲ得

第六十九條 工業ニ勉勵シテ食費ヲ償フヘキ工錢ヲ得ル者及  
ヒ其幾倍ヲ得ル者等ニハ其請ニ由リ領置シタル工錢ヲ以テ  
食物ヲ購ヒ之ヲ給スルコトヲ得但一日金三錢ヲ過ルコトヲ  
得ス

定役ニ服セサル者ニハ其請ニ由リ領置シタル工錢ヲ以テ食

物ヲ購ヒ之ヲ給スルコトヲ得但一日金五錢ヲ過ルコトヲ得

ス

第七十條 在監人日用ノ雜費 澣濯補綴又ハ炊用ノ薪炭ハ一人 其他一身ニ係ル日常諸費

一日金壹錢貳厘以下トス

第七十一條 監房常置ノ器具

木製

一 貯水器并ニ飲器

木製大小二種但監房ニ厠圍ノ 接續スル者ニハ此器ヲ用ヒス

一 唾壺

全 草ノ種類ヲ以テ製作 セシ軟カナルモノ

一 便器

一 小箒

木製

第七十二條 浴湯ノ定度ハ毎年六月ヨリ九月マテハ五日毎ニ 一次十月ヨリ五月マテハ十日毎ニ一次トス

第七十三條 已決囚及ヒ懲治人ノ髪ハ常ニ之ヲ短薙シ髭鬚ア

ル者ハ常ニ剃除セシム但未決者ハ此限ニ在ラズ

婦女ノ梳髪ハ膏ヲ用ヒテ裝飾スルヲ許サズ

剃除  
ルソ

髭鬚  
ゲヒ

短薙  
シツカク  
カルフ

第二章 疾病

裝飾  
ヲヒソ

晒洗  
フアラ

攝養  
ナヒシ

侵襲  
コルヒ

豫防  
シヨウ

感染  
ルツ

形狀  
サマリ

詳悉  
ヲツマヒ  
カ

第七十四條 衣類雜具其他ノ物品ハ種質ニ由リ時々熱湯ヲ用

ヒテ之ヲ澣ヒ臭氣ヲ去リ蟲害ヲ防クヲ要ス但病者ノ物品ト

混一シテ之ヲ晒洗スヘカラス

第三章 疾病附死亡

第七十五條 在監人疾病ニ罹レハ病狀ノ輕重ヲ料リ其監房若

クハ病室ニ於テ醫療セシム

懲治場ニ在ル者ハ情狀ニ由リ其親屬ニ交付スルコトヲ得

第七十六條 病者ノ攝養ニ効アル飲食物又ハ温ヲ取ル湯瀉等

ヲ用ルコトヲ要スルトキハ醫師ヲシテ其旨ヲ証明セシメ典

獄之ヲ考檢シテ許否スヘシ

第七十七條 傳染病侵襲ノ兆アルトキハ其消毒豫防ヲ慎重ニ

スヘシ若シ在監人中傳染病者アルトキハ直ニ病性及ヒ感染

ノ形狀ヲ詳悉シ醫師ノ診察書ヲ副ヘ各其所屬長官ニ報告ス

○死亡

驗屍  
シガイチア  
ラタル

第七十八條 在監人死亡スレハ典獄看守長醫師并葎テ之ヲ驗屍スヘシ  
未決者又ハ已決囚ニシテ別故アリ再ヒ訊問ニ係ル者死亡シタルトキハ之ヲ其裁判所ニ申報スヘシ

第七十九條 死者ノ親屬若クハ故舊第三十三條ニ記載シタル時限ヨリ二十四時以内ニ在テ遺骸ノ下付ヲ請フトキハ之ヲ許シ其者ヲシテ簿冊ニ署名押印又ハ花押セシムヘシ  
遺骸ヲ請フ親屬故舊ナキトキハ棺ニ入テ假葬シ其上ニ氏名標ヲ建ツヘシ其標ハ約ソ面三寸長三尺五寸トス

第三章  
書信

信書  
テガ

回答  
ヘン

第三章 書信

第八十條 已決囚其親屬故舊ニ信書ヲ贈ルハ六個月間ニ一次トシ一通ニ過ルコトヲ得ス但シ其他官司ノ訊問等ニ由テ書信ヲ要スルトキ又タハ親屬故舊ニ回答セント請ヒ司獄官吏ニ於テ法律ニ觸ルコトナク且必用ト認タルトキハ此限ニ在ラス

忌諱  
イミカ  
クヌ

適正  
マツス  
クナ

遷善  
正直ナ心ニ  
改ノ還ル

諭示  
サト

付與  
アタ

改悛  
改心  
ノ

順讀  
アタリマ  
イニヨム

逆讀  
サカ

斜讀  
スシカ  
イヨミ

横讀  
ヨコ

嫌疑  
ウタ  
ガイ

緘  
シ

第八十一條 未決者ニ係ル信書ハ定限ナシ但豫審判事又ハ檢事ノ檢閱ヲ經ルニ非レハ贈答セシムルヲ得ス

第八十二條 懲治人及ヒ幼年ノ已決囚其親屬故舊ニ贈ル信書ハ一個月一次トシテ一通ニ過ルコトヲ得ス

第八十三條 在監人ノ發スル信書ハ典獄之ヲ檢閱スヘシ若シ書中忌諱ニ涉ル等ノ文意アルトキハ通信ヲ許サス

第八十四條 外人ヨリ在監人ニ贈リ來タル信書ハ典獄之ヲ檢閱シ適正ノ事項ヲ陳ヘ又ハ遷善ノ諭示ヲ主トシタルモノニ限り之ヲ本人ニ付與ス若シ在監人ノ改悛ヲ妨ルモノト認ルトキハ之ヲ付與セス

第八十五條 信書ヲ檢閱スルハ先ツ直行ヲ順讀シ次ニ逆讀斜讀又ハ横讀シ嫌疑ノ文意アリヤ否ヲ詳查スヘシ

第八十六條 在監人ヨリ發スル信書ハ必ス信書紙ヲ用ヒシメ典獄之ヲ緘シ封皮ニ其受領スヘキ者ノ住所氏名ヲ書シ某監獄署ト記シ之ヲ遞送ス但郵便稅ハ自辨セシム

第四章 接見

緣由 イハ

形跡 カタ

接見 メンク

旨趣 ガラ

談話 シ

停止 メル

親屬故舊若クハ辯護人ノ信書ハ監獄署ニ宛テ差出サシム

第四章 接見

第八十七條 在監人ニ見接セント請フ者アルトキハ典獄先ツ之ヲ面接ノ其氏名族籍營業等ヲ訊ヒ其緣由ヲ詳悉シ己ムヲ得サルノ事狀アリテ形跡ノ疑フヘキトキハ之ヲ許シ看守長看守並蒞テ面會セシム但密室ニ在ル者ハ接見ヲ許サス

面會ノ時間ハ三十分ヲ過ルヲ得ス若シ面會ヲ請ヒシ旨趣ニ違フ談話ヲナシタルトキハ直ニ之ヲ停止ス

第八十八條 死刑ノ執行及ヒ徒刑流刑禁獄ノ刑ヲ受タル囚徒ヲ集治監ニ押送ノ以前親屬故舊其囚徒ニ面會セント請フトキハ前條第一項ノ例ニ依テ之ヲ許ス但面會時間ハ五十分ヲ過ルヲ得ス

第五章 差出品

第四編 第一章 教誨

寄贈 イシ

第九十條 已決囚ニハ書籍用紙ノ外一切差入品ヲ許サス

第四編

第一章 教誨

第九十二條 已決囚及ヒ懲治人教誨ノ爲メ師誨師ヲシテ悔過遷善ノ道ヲ講セシム

第九十三條 教誨ハ免役日又ハ日曜日ノ午後ニ於テ其講席ヲ開クモノトス

第九十四條 懲治人ニハ毎日二三時間讀書習字算術度量圖書

|                  |             |        |             |                  |             |             |             |             |             |        |             |        |
|------------------|-------------|--------|-------------|------------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|--------|-------------|--------|
| 排<br>列           | 容<br>止      | 聽<br>聞 | 謹<br>守      | 教<br>令           | 釋<br>義      | 傍<br>訓      | 簿<br>冊      | 頁<br>香      | 優<br>劣      | 進<br>步 | 研<br>究      | 教<br>誨 |
| ブ<br>ナ<br>ラ<br>ル | カ<br>ホ<br>カ | キ<br>ク | マ<br>モ<br>ル | ツ<br>ハ<br>シ<br>ヘ | ハ<br>ト<br>キ | ツ<br>ケ<br>ナ | メ<br>テ<br>ウ | ア<br>ヨ<br>シ | マ<br>サ<br>リ | ム<br>ハ | フ<br>ナ<br>ラ | ヘ<br>シ |

等ノ科目中ニ就キテ之ヲ教フヘキモノトス  
 學科ハ懲治場ノ教場ニ於テ之ヲ研究セシメ其學業ノ進歩ヲ  
 表スル爲メ就學ノ年月卒業ノ科目學業ノ優劣及ヒ行狀ノ  
 頁否氏名年齢等ヲ簿冊ニ記載シ巡閱官吏ノ檢閲ニ供シ又其  
 尊屬親ニ示スコアルヘシ  
 第九十五條 各監房内ニ左ノ諸款ヲ揭示シ傍訓釋義シテ解シ  
 易カラシムヘシ若シ文字ヲ識ラサル者アレハ入監ノ時ヨリ  
 二十四時内ニ於テ之ヲ讀ミ聽カスヘシ

揭示

- 一 在監人ハ常ニ教令ヲ謹守スヘシ
- 一 平日互ニ和順ヲ主トシ教誨聽聞ノ席ニ就クトキハ慎テ容  
止テ正フスヘシ 此款ヲ除ク
- 一 毎朝父母若クハ其墳墓所在ノ方位ニ向テ禮拜スヘシ
- 一 毎朝常用ノ諸器具ヲ清潔ニシ之ヲ排列シテ點檢ヲ受ケ及  
ヒ席壁圍扇等ヲ掃除スヘシ

|             |             |             |        |             |             |             |             |                  |             |             |
|-------------|-------------|-------------|--------|-------------|-------------|-------------|-------------|------------------|-------------|-------------|
| 圍<br>扇      | 濫<br>用      | 鎮<br>靜      | 說<br>話 | 放<br>歌      | 喧<br>噪      | 惡<br>戲      | 汚<br>辱      | 猥<br>褻           | 異<br>常      | 急<br>劇      |
| イ<br>ン<br>ツ | ニ<br>用<br>ユ | マ<br>ル<br>ツ | ハ<br>ナ | ウ<br>ダ<br>ウ | ク<br>ハ<br>ン | ワ<br>ル<br>フ | ハ<br>ツ<br>カ | ミ<br>ダ<br>リ<br>カ | カ<br>ハ<br>ツ | ハ<br>イ<br>ダ |

- 一 窓壁若クハ物件ヲ汚損シ不淨器ノ外ハ唾キ時水ヲ濫用ス  
ルヲ禁ス
- 一 監外ニ出タル時其途上ニ於テ全往ノ者ト交談シ及ヒ手ヲ  
交ヘ或ハ路人ニ聲語スルヲ禁ス
- 一 夜間ハ最モ鎮靜ヲ主トシ說話或ハ穢聲又ハ濫リニ起歩ス  
ルヲ禁ス但書間ト雖モ放歌喧噪又ハ高聲ニ誦讀スルヲ禁ス
- 一 許可ヲ得サル物件ヲ監房ニ置キ或ハ勝負ヲ競ヒ若クハ賭  
博類似ノ惡戲ヲナシ或ハ全房ノ者ニ汚辱ヲ被ラシメ猥褻  
ニ涉ルカ如キ所爲アルヲ禁ス
- 一 服役中其作業ニ關セサル他事ヲ交談シ及ヒ休憩時間部外  
ノ工場ニ至ルヲ禁ス 此款ヲ除ク
- 一 許可ヲ得スシテ衣食其他ノ物件ヲ受與貸借スルヲ禁ス
- 一 監房ニ於テ異常ノ事アレハ晝夜ニ拘ラス直ニ看守所ニ通  
聲スヘシ
- 一 日没後ハ發病スルモ其症急劇ナルニ非レハ翌朝ニ至テ醫

響器繩ヲ引クト響

療ヲ乞フヘキモノトス若シ劇症ナルトキハ直ニ看守所ニ  
通聲スヘシ

一 獨居ノ者卒カニ病ヲ發シタルトキハ監房ヨリ看守所ニ架  
スル所ノ響器繩ヲ引キ以テ之ヲ報スヘシ

一 病者アルトキハ全房ノ者共ニ介保ニ力ヲ致スヘキハ勿論  
其看病人タラシムル者ハ切實ニ之ヲ看病スヘシ

一 水火風震等ノ際解放ニ遭フ者ハ其解放ノ時ヨリ二十四時  
内ニ監獄署又ハ警察署ニ其旨ヲ申出ツヘシ

右ノ諸款ニ違フ者及ヒ違フ者アルヲ知テ告ケサル者又ハ官  
吏ヨリ犯者ヲ問フニ當リ之ヲ舉ケサル者ハ其情狀ヲ量リ  
處分スヘキモノナリ

年月日

某監獄署

第二章 賞譽

第九十六條 已決囚獄則テ謹守シ且改悛ノ行爲著キモノト  
典獄ニ於テ確認スルトキハ之ヲ賞譽スヘシ

第二章 賞譽

確認  
ミトムル

具狀  
上ル

捕得  
ニル

防禦  
フセ

救援  
ヌクヒ

第九十七條 賞譽セシ者ニハ賞譽セシ毎ニ之ヲ表スル爲メ獄  
衣ノ左袖ノ肩臂間ニ方二寸曲ノ淺葱色ノ布ヲ縫着スヘシ

第九十八條 賞表ハ假出獄免幽閉又ハ特赦ヲ具狀スルノ考  
據ト爲ヌヲ得

第九十九條 賞表ヲ得タル者ニハ二個月ニ一次親屬故舊ニ  
接見及ヒ通信スルヲ許ス

第一百條 已決囚若シ在監人ノ逃走ヲ密告又ハ捕得シ或ハ監獄  
ニ係ル水火災ヲ防禦シ人命ヲ救援シタル者アレハ金貳拾五

錢以下ヲ賞與シ其賞金ハ監署ニ領置シ本人ノ請ニ由リ必用  
品又ハ食物ヲ購求スヘシ但第九十七條ノ賞表ヲ與フルノ限

ニ在ラス

第一百一條 未決監ニ在ル者前條ノ勞勳アルトキハ之ヲ錄シテ  
檢察官及ヒ裁判官ノ參考ニ供スヘシ

第一百二條 懲治人第一百條ニ適シタル勞勳アルトキハ金貳拾五  
錢以下ヲ以テ適宜物品ヲ購ヒ之ヲ與フヘシ

隔絶 カケハ  
座作 座シナカラナ  
絶信 音信ヲ  
屏禁 トギ  
コメ

第三章 懲罰

第三百三條 已決囚獄則チ犯ストキハ其輕重ヲ量リ左ノ例ニ從  
フテ處罰ス

一 絶信 親屬故舊ト書信接見ヲ絶ス

二 屏禁 晝夜他ノ監房又ハ工場ト隔絶シタル監房ニ獨居セ

シメ服役時限表ニ照シテ座作ノ役ヲ科ス

三 減食 常食ノ半若クハ其三分ノ二ヲ減シ鹽湯二品ノ外

菜ヲ與ヘス

一 閤室 閤室ニ入シ常食ノ半若クハ其三分ノ二ヲ減シ鹽湯

二品ノ外菜ヲ與ヘス仍ホ臥具ヲ禁ス

第四百四條 絶信屏禁ハ有限若クハ無限ト爲シ減食閤室ハ七晝

夜ヲ限トス

減食閤室七晝夜ニ滿ルモ改悛ノ狀ナキトキハ一旦之ヲ免シ

更ニ之ヲ科スルコトヲ得

第四百五條 懲治人及ヒ十六歲未滿ノ已決囚獄則チ犯ストキハ

煽惑 チダ  
テル

其輕重ヲ量リ左ノ例ニ從テ處罰ス

準擬 ヒキア  
テル

一 獨愼 晝夜一室ニ獨居セシム

褫奪 ハギウ  
バウ

二 減食 常食ノ半以內ヲ減ス但菜ヲ減スルノ限ニ在ラス

毀壞 コボ

第三百六條 獨愼ハ七晝夜以內減食ハ三日以內トス

鐵革或ハ布ヲ以テ  
纏ヒ施スモノ

第三百七條 未決者及ヒ拘留ノ刑ヲ受ケシ者教令ニ順ハス或ハ

鐵索 クサ

同監ノ者ヲ煽惑シ又ハ其他ノ規則ヲ犯ストキハ所犯ノ輕重

線帶 カハ  
チビ

ヲ量リ第三百三條第三百五條ニ準擬シ減食スルコトヲ得

鐵索 クサ

第三百八條 賞表ヲ有スル者處罰ヲ受タルトキハ賞表一個又

線帶 カハ  
チビ

ハ數個ヲ褫奪ス

鐵索 クサ

第三百九條 無期徒刑ノ囚徒逃走シ若クハ獄舎器具ヲ毀壞シ又

線帶 カハ  
チビ

ハ暴行脅迫ヲ爲シ其他重罪輕罪ヲ犯シタルトキハ三月以上

線帶 カハ  
チビ

五年以下兩脚又ハ一脚ニ鉄ヲ施シ仍ホ鐵丸ヲ屬シタル鐵索

線帶 カハ  
チビ

ヲ其鉄ニ貫キ腰間ニ線帶セシメ線帶ノ所ニ下鍵ス但監房ニ

線帶 カハ  
チビ

在ルモ晝間ハ之ヲ施スモノトス

線帶 カハ  
チビ

若シ再ヒ重罪ヲ犯シタルトキハ五年以上十年以下前項ノ例

動靜  
マフル  
窺察  
クミワ  
違背  
クム  
拘置  
トメ

ニ照シテ處罰ス  
鐵丸ノ量ハ二百目以上一貫目以下トシ被罰者ノ體力ニ應シテ之ヲ施ス丸ハ索尾ニ屬シ地上ヲ轉ハスモノトス其外役ニ服スルトキハ鐵丸ヲ除キ二人聯絆ノ法ニ從フ

第百十條 減食或ハ閉室ノ罰ニ處スヘキモノアルトキハ醫師ヲシテ診視セシメ身體ニ妨ケナキヲ證シテ後之ヲ行フヘシ

第百十一條 屏禁減食閉室又ハ獨愼ノ罰ニ處シタル後ハ典獄若クハ看守長時々其動靜ヲ窺察シ狀況ニ由リ醫師及ヒ教誨師ヲシテ之ヲ問ハシムルコトアルヘシ

第百十二條 罰則ニ處セラレタル者改悛ノ狀著ル、トキハ之ヲ免スルコトヲ得

第百十三條 假出獄免幽閉ヲ受タル徒刑流刑ノ者監署ノ命令ニ違背シタルトキハ七日已下之ヲ拘置スルコトヲ得

〔此括弧ヲ付スル者及ヒ下段ハ總テ朱字以下全シ〕

|  |  |        |        |        |        |        |                        |               |                         |       |             |
|--|--|--------|--------|--------|--------|--------|------------------------|---------------|-------------------------|-------|-------------|
| 〔典獄(檢印)〕 懲治人名籍 主檢 書記〔氏名印〕                                      |  | 本<br>管 | 出<br>地 | 族<br>籍 | 氏<br>名 | 年<br>齡 | 懲治人及ヒ<br>尊親屬ノ營業        | 親<br>屬        | 入場ノ年月日                  | 入場ノ事狀 | 身<br>材      |
| 國郡 町 村 番地住何某 男 弟<br>何國郡 町 村 產 族籍 何 某<br>某年 月 日 生<br>當何年何月何年何夕月 |  |        |        |        |        |        | 懲治人ノ營業<br>主願者タル尊親屬親ノ營業 | 父母兄弟及ヒ配偶者等ノ有無 | 明治何年 月 日 午 前 第何時入場<br>後 |       | 長何尺何寸何分肥瘠強弱 |



|   |               |                      |                          |             |                         |
|---|---------------|----------------------|--------------------------|-------------|-------------------------|
| 容貌音聲  | 入場中ノ賞罰        | 書信贈答                 | 懲治場ニ留置ノ宣告ヲナセシ裁判所         | 事變          | 放還                      |
| 面體眉毛耳目鼻口ノ形容面色ノ黑白四肢ノ姿態其他痘斑、瘰癧、癩子、癭瘤、黑痣、癩風、天皰、創瘻ノ類及ヒ音聲ノ高低ヲモ細緻ニ具載ス | 明治何年月日何ノ賞罰ヲ行フ | 何年何月日國郡町住親屬若クハ朋友ニ書信來 | 明治何年月日何日某裁判所ニ於テ若干月日留置ノ宣告 | 犯由ノ大畧及ヒ某裁判所 | 明治何年月日病死或ハ變死或ハ逃走或ハ他監ニ移ス |
| 入場ノ時文字ヲシルヤ否或ハ讀書ヲナスヲ得或ハ善ク讀書ヲナス入場後進學ノ景況何宗或ハ宗門不詳                   |               |                      |                          |             | 明治何年月日某家ニ放還             |

〔典獄(檢印)〕 未決者名籍 主檢 書記〔氏名印〕

|                               |                         |                |                    |             |   |
|-------------------------------|-------------------------|----------------|--------------------|-------------|---|
| 本出生地管                         | 營業及ヒ親屬                  | 乳兒提携           | 入監ノ年月日時及ヒ事件        | 身材          | 容貌音聲  |
| 某管下國郡町番地住又ハ何某子弟妻女何國郡村産 族籍 何 某 | 營業ヲ詳記ヌ可シ 父母兄弟及ヒ配偶者子孫ノ有無 | 男或ハ女 叔監ノ時何歳何ヶ月 | 明治何年月日午前第何時入監何罪ヲ犯ス | 長何尺何寸何分肥瘠強弱 | 面體眉毛耳目鼻口ノ形容面色ノ黑白四肢ノ姿態其他痘斑、瘰癧、癩子、癭瘤、黑痣、癩風、天皰、創瘻ノ類及ヒ音聲ノ高低ヲモ細緻ニ具載ス |

|                |                                       |
|----------------|---------------------------------------|
| 教育及<br>宗門      | 文字ヲ識ルヤ否或ハ讀書ヲナスヲ得或ハ書ク<br>讀書ヲナス何宗或ハ宗門不詳 |
| 入監中ノ賞罰         | 明治何年月日何ノ賞罰ヲ行フ                         |
| 書信ノ贈答<br>ヲ許ス月日 | 明治何年月日何國郡町村住親屬若クハ朋友ニ書信來發              |
| 當該官<br>ノ氏名     | 裁判長ノ氏名死刑ハ裁判長ノ外其行<br>刑ヲ臨監ヒシ官吏ノ氏名       |
| 保釋<br>付        | 明治何年月日保釋若クハ責任                         |
| 事變             | 明治何年月日病死或ハ變死脱監                        |
| 終結             | 明治何年月日放免若クハ刑ノ宣告執行<br>又ハ他監押送           |

|                           |  |
|---------------------------|--|
| 〔典獄(檢印)〕 己決囚名籍 主檢 書記〔氏名印〕 |  |
| 本出生地管                     | 某管下國郡町村番地住又ハ何某子弟妻女   |
| 氏名籍地                      | 何國郡村産 何 族籍 某   |
| 年 齡                       | 某年 月 日 生<br>當何年何月何年何月  |
| 營業及ヒ親屬                    | 營業ヲ詳記ヌ可シ<br>父母兄弟及ヒ配偶者子孫ノ有無                                   |
| 乳携兒                       | 男若クハ女<br>收監ノ時何歳何ヶ月<br>父母ニ先テ出監シ或ハ死去シタル時ハ之ヲ詳記ス                 |
| 刑名及ヒ宣<br>告ノ月日裁<br>判所ノ名稱   | 何刑若クハ何年何月日<br>明治何年月日何裁判所ニ於テ宣告                                |
| 收監ノ年月日                    | 明治何年月日午 前 第何時入監<br>後   |
| 犯由ノ大畧<br>及ヒ犯數             | 財産ヲ竊取シ或ハ人ヲ毆傷スル等犯罪ノ大略<br>ヲ記ス若シ再三犯ナレハ往年何罪ヲ犯シ某裁<br>判所ニ於テ何刑ニ處セラレ |

|              |   |
|--------------|---|
| 身<br>材       | 長何尺何寸何分肥瘠強弱   |
| 容貌<br>音聲     | 面體眉毛耳日鼻口ノ形容面色ノ黑白四肢ノ恣態其他痘斑、瘰癧、黑痣、癩風、天跡、創瘻ノ類及ヒ音聲ノ高低ヲモ細緻ニ具載ス |
| 教育及ヒ宗門       | 文字ヲ識ルヤ否或ハ讀書ヲナスヲ得或ハ善ク讀書ヲナス何宗或ハ宗門不詳                         |
| 入監中ノ賞罰       | 明治何年月日何ノ賞罰ヲ行フ   |
| 書信贈答<br>ノ年月日 | 明治何年月日何國郡町住親屬若クハ朋友ニ書信發                                    |
| 假出獄免幽閉       | 明治何年月日何日假出獄或ハ免幽閉  |
| 事<br>變       | 明治何年月日病死或ハ變死或ハ脫監或ハ何罪ヲ犯シ復々未決監ニ入ル                           |
| 終<br>結       | 明治何年月日滿期放免又ハ赦特  |

|   |   |
|---|---|
| 假出獄之證票  | 某縣下國郡村番地住又ハ何某子弟妻女<br>族籍 何 某<br>某年 月 日 生<br>明治何年何月何年何月 |
| 身<br>材  | 名籍ノ機本ニ倣<br>ヒ詳記スヘシ                                     |
| 容<br>貌  | 上ニ全シ  |
| 罪<br>質  | 犯數  |
| 刑<br>名  | 刑期  |
| 及ヒ附加刑   |   |
| 何年月日某裁判所ニ於テ宣告ヲ受ケ<br>何年月日ヨリ執行何年月日滿期  |   |
| 一此者ハ假出獄ノ裁可アリタルヲ以テ本日出獄ヲ許シ何<br>地ヲ通過シ居住スヘキ何地ヘ約テ何日迄ニ到着シテ即<br>時其地ノ警察官ニ届出テ此證書ヲ納メタル上住宅ヲ定<br>ムヘキ旨申渡シタル事 |   |

一此者ハ本刑期限間特別監視ニ付セラレタル事  
 一此者假出獄中更ニ重罪輕罪ヲ犯スコトアルキハ直ニ出獄ヲ停止シテ出獄中ノ日數ハ刑期ニ算入セラレザル事  
 一此者發病其他ノ事變ニ因テ途中ニ滞留スルトキハ滞留地ノ警察官ヨリ其證書ヲ受ケ居住地ニ到着ノ上此證書ト共ニ居住地ノ警察官ニ差出スヘキ旨申渡シタル事  
 右之通心得サセ假出獄ノ証票ヲ與フル者也

署  
 某監獄署  
 長官何某  
 印

明治年月日  
 印

○假出獄ヲ受タル者所有金アルトキハ其證票ノ裏面若シハ欄内ニ左ノ二款ヲ附記スヘシ  
 一此者ノ所有金ハ當監署ヨリ其居住スヘキ地ノ警察官ニ送り遣シタル事

一警察官へ送り遣シタル金圓ハ此居住地ニ到着ノ後何日ニテモ受取得ヘキト雖モ同官ニ於テ正當ノ入用ナリト認定ノ上ニ非レハ一次ニ之ヲ渡サ、ルヘキ事

何管下某監獄署在監書信紙○明治四年月日

- 一在監人ヨリ其親屬故舊ニ送ル書信ハ此紙ニ書寫ス  
ヘシ
- 一信書ノ文句規則ニ背キタルコアルトキハ其送致ヲ  
止メ仍ホ相當ノ罰ニ處スルコアルヘシ

○明治十四年十二月内務卿達

本則第十七條ノ覆面巾及ヒ第百九條罰具ヲ製造スルノ様式タリ

要犯

疑獄ニ

係ル者

ニ覆面

巾ヲ蒙

ラシメ

タル圖

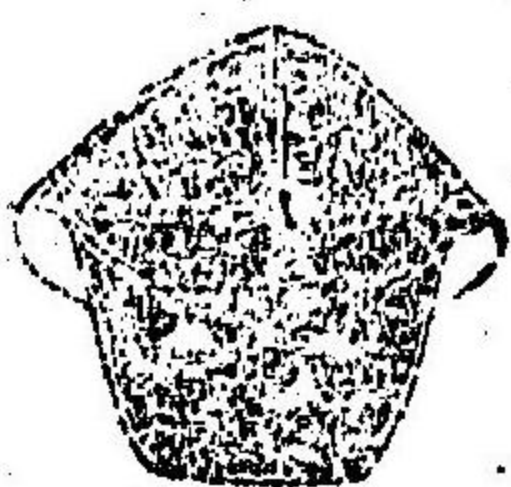


縫



斜面

同



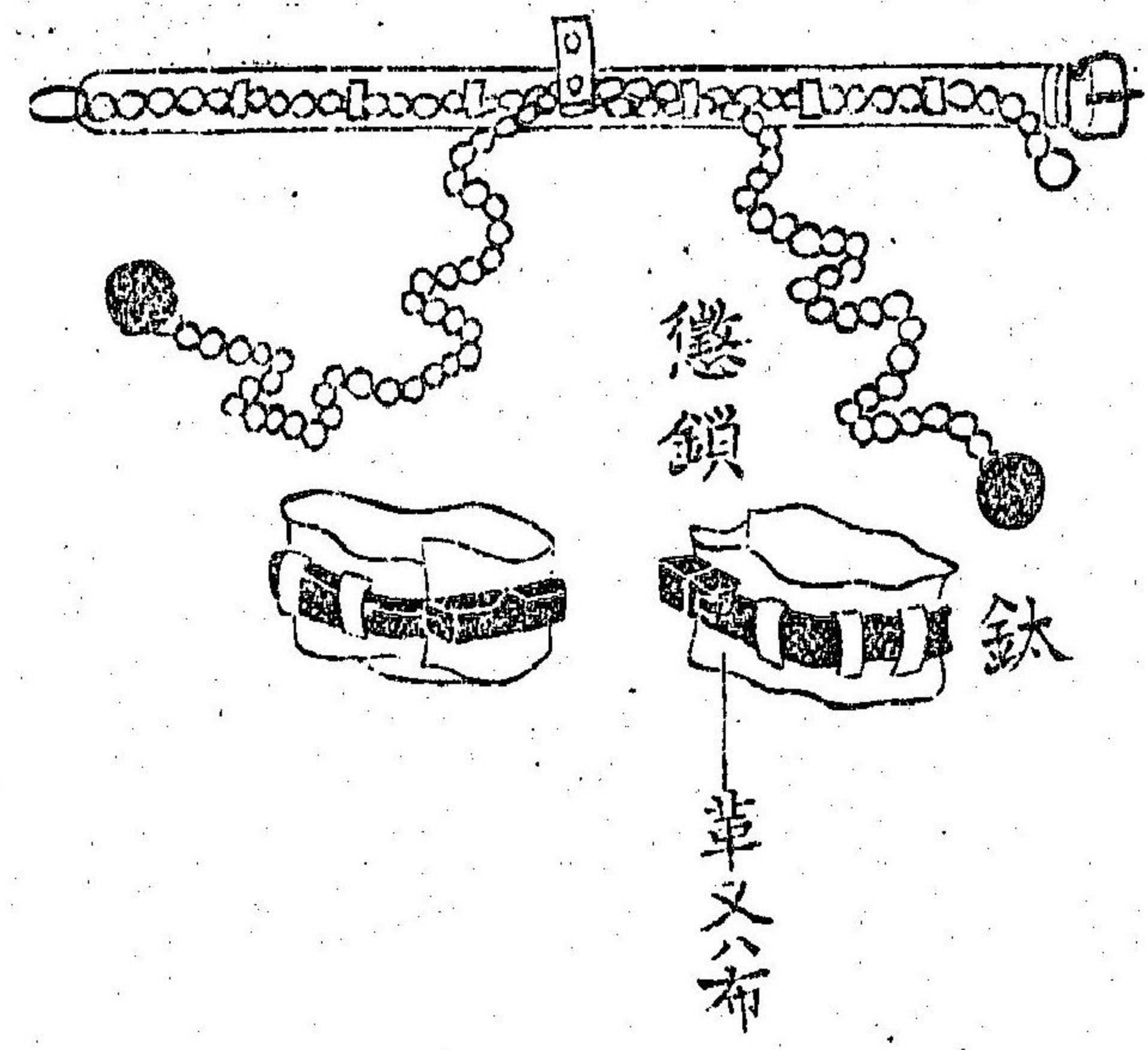
正面

無 徒 ノ 又 罪 ヲ 鎖 施 ン  
 期 刑 囚 犯 シ 懲 ン ン  
 圖 々 サ 々 懲 ン ン



赤尾ヨリ鉄ニ至ル  
 長サ約子曲尺一尺

線 帶 二 鎖 屬 々 圖  
 懲 懲 々 々 々 々



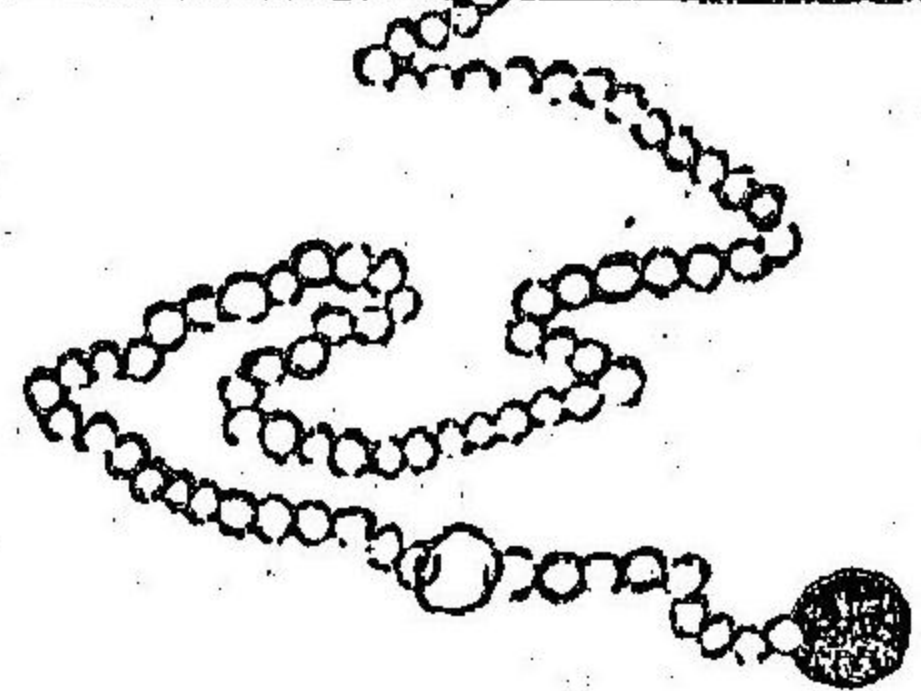
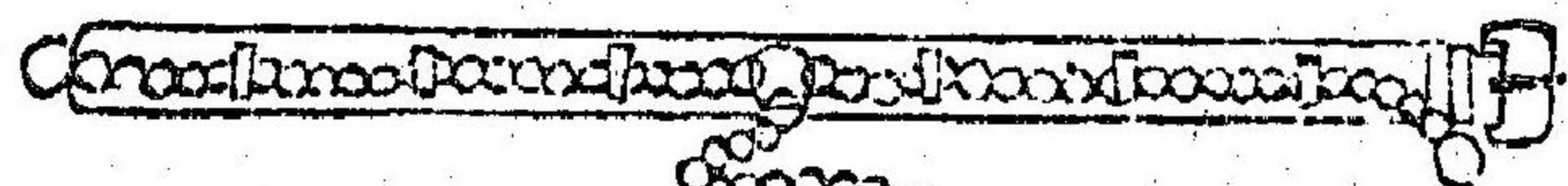
懲鎖

鉄

革又ハ布

| 月<br>日<br>限 | 囚徒服役時限表 |         |         |          |          |          |          |         |         |         |         |         |         |        |        |        |
|-------------|---------|---------|---------|----------|----------|----------|----------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|--------|--------|--------|
|             | 起       | 床       | 就       | 役小       | 憩        | 午        | 飯        | 罷       | 役       | 晚       | 飯       | 還       | 房       | 服      | 役      | 計      |
| 一月          | 前午七時〇二分 | 前午八時〇二分 | 前午八時〇二分 | 前午第十時〇五分 | 前午第十時〇五分 | 正午十二時〇五分 | 正午十二時〇五分 | 后午三時三十分 | 后午三時三十分 | 一時間二十八分 | 一時間二十八分 | 后午四時五十分 | 后午四時五十分 | 六時二十八分 | 六時二十八分 | 六時二十八分 |
| 二月          | 前午六時三十分 | 前午七時三十分 | 前午七時三十分 | 前午第十時〇五分 | 前午第十時〇五分 | 正午十二時〇五分 | 正午十二時〇五分 | 后午三時三十分 | 后午三時三十分 | 一時間三十二分 | 一時間三十二分 | 后午五時二十分 | 后午五時二十分 | 六時五十分  | 六時五十分  | 六時五十分  |
| 三月          | 前午六時〇六分 | 前午七時〇六分 | 前午七時〇六分 | 前午第十時〇五分 | 前午第十時〇五分 | 正午十二時〇五分 | 正午十二時〇五分 | 后午三時三十分 | 后午三時三十分 | 一時間三十四分 | 一時間三十四分 | 后午五時五十分 | 后午五時五十分 | 七時三十分  | 七時三十分  | 七時三十分  |
| 四月          | 前午五時三十分 | 前午六時三十分 | 前午六時三十分 | 前午第九時四十分 | 前午第九時四十分 | 正午十二時〇五分 | 正午十二時〇五分 | 后午三時三十分 | 后午三時三十分 | 一時間三十八分 | 一時間三十八分 | 后午六時二十分 | 后午六時二十分 | 八時三十分  | 八時三十分  | 八時三十分  |
| 五月          | 前午五時〇一分 | 前午六時〇一分 | 前午六時〇一分 | 前午第九時三十分 | 前午第九時三十分 | 正午十二時〇五分 | 正午十二時〇五分 | 后午三時三十分 | 后午三時三十分 | 一時間四十二分 | 一時間四十二分 | 后午六時五十分 | 后午六時五十分 | 九時五十分  | 九時五十分  | 九時五十分  |
| 六月          | 前午四時四十分 | 前午五時四十分 | 前午五時四十分 | 前午第九時三十分 | 前午第九時三十分 | 正午十二時〇五分 | 正午十二時〇五分 | 后午三時三十分 | 后午三時三十分 | 一時間四十四分 | 一時間四十四分 | 后午七時十四分 | 后午七時十四分 | 九時五十分  | 九時五十分  | 九時五十分  |
| 七月          | 前午四時十五分 | 前午五時十五分 | 前午五時十五分 | 前午第九時三十分 | 前午第九時三十分 | 正午十二時〇五分 | 正午十二時〇五分 | 后午三時三十分 | 后午三時三十分 | 一時間四十八分 | 一時間四十八分 | 后午七時四十分 | 后午七時四十分 | 九時五十分  | 九時五十分  | 九時五十分  |
| 八月          | 前午四時十分  | 前午五時十分  | 前午五時十分  | 前午第九時三十分 | 前午第九時三十分 | 正午十二時〇五分 | 正午十二時〇五分 | 后午三時三十分 | 后午三時三十分 | 一時間五十二分 | 一時間五十二分 | 后午八時十分  | 后午八時十分  | 九時五十分  | 九時五十分  | 九時五十分  |
| 九月          | 前午四時五分  | 前午五時五分  | 前午五時五分  | 前午第九時三十分 | 前午第九時三十分 | 正午十二時〇五分 | 正午十二時〇五分 | 后午三時三十分 | 后午三時三十分 | 一時間五十六分 | 一時間五十六分 | 后午八時二十分 | 后午八時二十分 | 九時五十分  | 九時五十分  | 九時五十分  |
| 十月          | 前午四時〇二分 | 前午五時〇二分 | 前午五時〇二分 | 前午第九時三十分 | 前午第九時三十分 | 正午十二時〇五分 | 正午十二時〇五分 | 后午三時三十分 | 后午三時三十分 | 一時間五十九分 | 一時間五十九分 | 后午八時三十分 | 后午八時三十分 | 九時五十分  | 九時五十分  | 九時五十分  |
| 十一月         | 前午三時五十分 | 前午四時五十分 | 前午四時五十分 | 前午第九時三十分 | 前午第九時三十分 | 正午十二時〇五分 | 正午十二時〇五分 | 后午三時三十分 | 后午三時三十分 | 一時間五十九分 | 一時間五十九分 | 后午八時三十分 | 后午八時三十分 | 九時五十分  | 九時五十分  | 九時五十分  |
| 十二月         | 前午三時〇八分 | 前午四時〇八分 | 前午四時〇八分 | 前午第九時三十分 | 前午第九時三十分 | 正午十二時〇五分 | 正午十二時〇五分 | 后午三時三十分 | 后午三時三十分 | 一時間三十二分 | 一時間三十二分 | 后午四時五十分 | 后午四時五十分 | 六時十二分  | 六時十二分  | 六時十二分  |

圖 鎖 巾 ス 二 一  
ノ 懲 へ 施 脚



革又六布

ニ早アリ  
日々分秒  
差刻アリ  
ルニ別西  
國ノ由テ  
此ノ地何  
レモ分秒  
於テ異ナ  
於テ異ナ  
ノ保異ナ  
ス大ツハ  
ニ均シキ  
平其起テ  
ク其起テ  
各此ノ司  
官此ノ司  
分此ノ司  
シ宜ク  
シテ役  
遇スヘシ

明治十八年十二月十日出版御届  
同 十九年一月五日出版

定價 金六拾錢

大阪府平民  
註釋人  
柳澤武運三

府下東區龍造寺町十八番地

大阪府平民  
出版人  
田中 太右衛門

府下南區安堂寺橋通り四丁目  
六十二番地

大阪府平民  
發兌人  
岡本仙助

府下東區唐物町四丁目十番地



柳澤武運三纂述

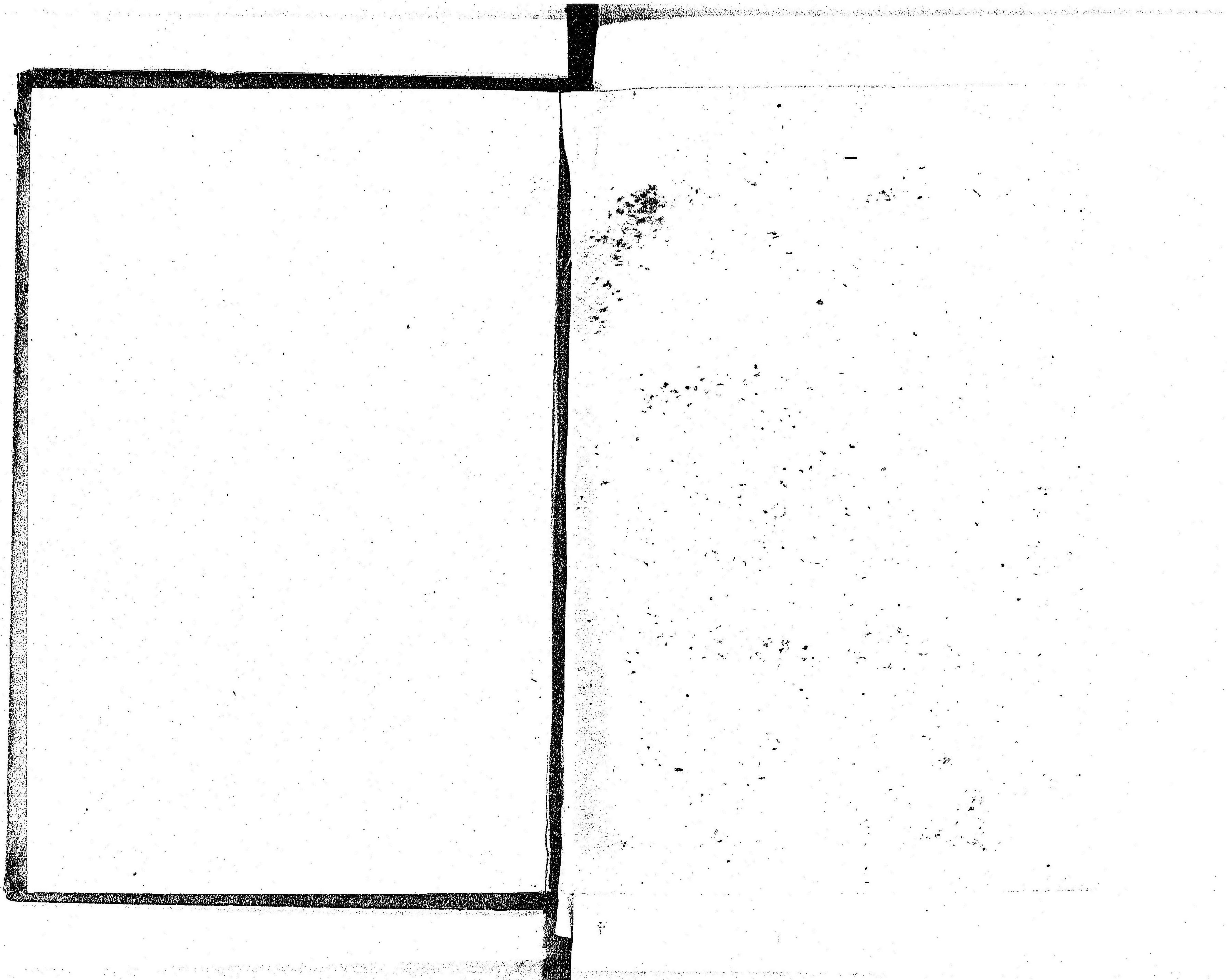
# 一 行現新撰書式全書

定價金六拾錢

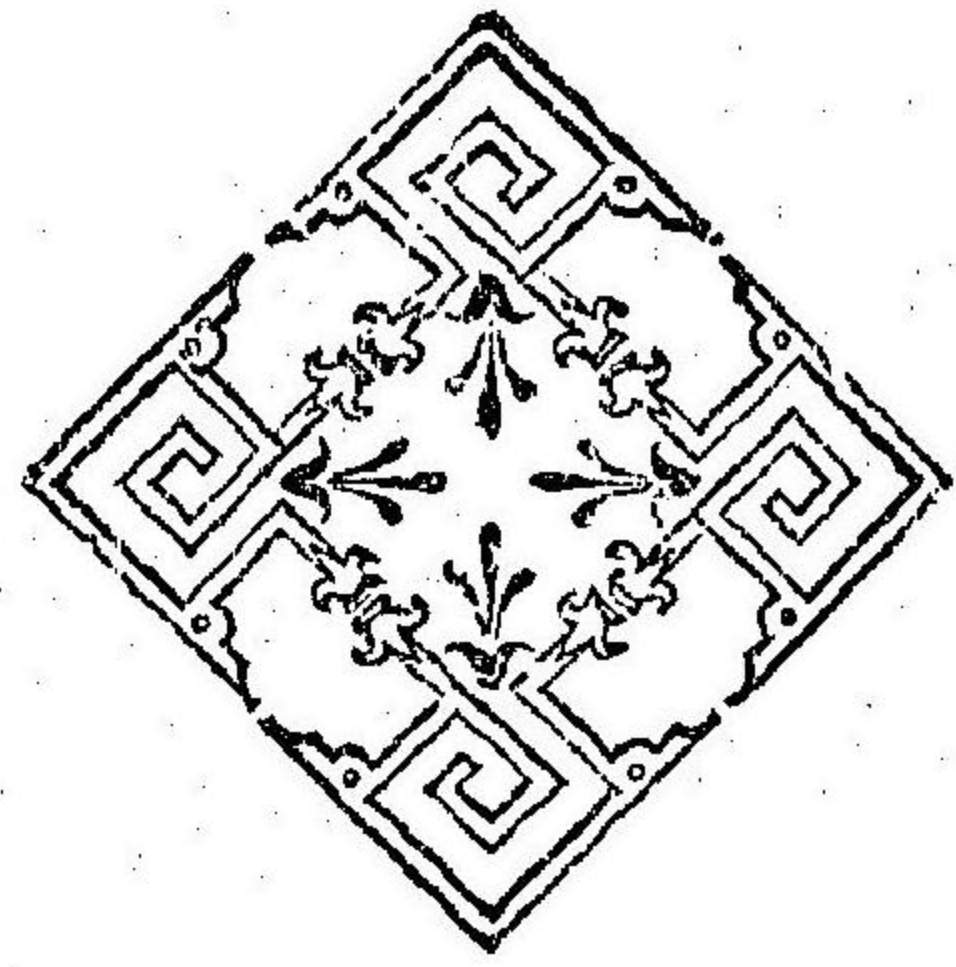
西洋形脊皮金文字頗美本

四百一十餘

諸願届ノ文書タルヤ在ル處ノ事實ト其意旨トヲ暢達セシムルニアリ又證券ノ文書ハ  
 互相間ノ契約ヲ明確ニセシムルニアルヲ以其文篇上最トモ戒慎ヲ加ヘサル可カラス  
 故ニ普通文章ノ如ク贅言飾語ヲ用ヒス簡明確實ヲ旨トス可キナリ然ルニ是  
 迄世ニ關シ處ノ書式文例ノ類ヲ視ルニ多クハ其實際ニ依ラス唯机上ニ於テノ思想ノ  
 ミヲ以綴レルノ故ニ徒ラニ無用ノ言ヲ述ヘ果テス實則ニ適ハサルヲ掲ケアルヲ  
 ナカラス此故ニ其意旨ヲ洞達セス或ハ契約ノ事ヲ架空ニ歸セシメ人々ノ權義上大ニ  
 關係ヲ及ホセシム夫レ此行政上ノ手續或ハ契約ノ成立等ハ何レモ因ニシテ而シテ訴  
 訟ニ及ホスモノハ果ナリ此結果ヲ詞訟ニ視ルハ則ハチ因タル處ノ願届及契約等ノ  
 成立ノ不充分ナルノ故ナリ豈鄭重ヲ加ヘサル可ケンヤ本書ハ此愛患ヲ豫防スル爲メ  
 編者カ嘗テ經驗シタル處ノ實際ニ就キ取扱タル適法適實ノモノヲ材料トシ以テ  
 纂述シタルモノナレハ前述ノ如キ愛患ヲ來タスノ恐レアララス卷ヲ啓ラカハ其欲スル  
 處隨意々々タル可シ故ニ平素此一本ヲ購供セラレハ當時ニ於テ願届ヲ要スルヲ  
 ナカルヘ可シ



大日本教育會館  
一  
三五九  
函架號  
一册



036203-000-9

特14-241

傍訓刑法治罪法監獄則 (鼈頭註釈)

柳沢 武運三 / 著

M19

BBP-0884

